

読地名の読みと由来

日本国内版

中国・四国地方編



上総の国いちはらの歴史を知る会

日本国内の地名は、有史以来に付いたものや、地域の統廃合などの都合で命名された地名があります。そしてその地名は素直に読める地名と、読めない地名があります。ここでは難読地名を都道府県ごとに選び、その読み方と由来を調べてみました。

中国地方編 鳥取県



NO	地 名	読み方	由 来
1	青谷町澄水	あおやちょう すんず	鳥取市・由来は、かつての村名「澄水村（すんずむら）」に由来し、「澄んだ水」を意味する漢字を当てた地名と思われる。
2	青谷町八葉寺	はつしょうじ	鳥取市・由来は、中世以降にこの地にあったとされる寺院名「八葉寺（はちようじ・はっしょうじ）」に由来し、その寺の所在する谷や村を指す地名として定着したもの。
3	赤子田	あこだ	鳥取市・由来は、当地に鎮座する赤子田神社（旧・八幡宮）と、その祭神である応神天皇（誉田別神）にちなむ名称と思われ「あこだ」という古い呼称が神社名や地名として定着をしたもの。
4	有富	ありどめ	鳥取市・由来は、「日本歴史地名大系」などによれば、中世文書に見える「有富（有留）」という小字や村名に由来し「富ある・豊かな土地」を意味する吉祥的な漢字を当てたと思われます。
5	晩稲	おくて	鳥取市・由来は、「普通の品種より遅く実る稲（晩生の稲）」を意味

			する語に由来し、江戸時代には「奥手」とも書かれた事から、水田地帯で晩生の稲作が行われた土地柄を反映した地名。
6	御弓町	おゆみのちょう	鳥取市・由来は、鳥取城下町の一角で、城の防衛と武家屋敷に関わる区域であった事から、弓を扱う武士や弓の訓練・保管に由来する「御弓」にちなむ地名と思われる。
7	紙子谷	かごだに	鳥取市・由来ははっきりしませんが、「紙子（紙のように白い・薄いもの）」＋「谷」という地形名から、白い岩肌や砂地・細長い谷地形の特徴を表した地名と思われます。
8	気高町会下	けたかちょうえげ	鳥取市・由来は、確実な定説はなく、古い村名の「会下谷村」の地名を引き継いだと思われる。
9	同上 奥沢見	おくぞうみ	鳥取市・由来は、「小沢見（こぞみ）」に対する内陸側（奥）の集落を指す「奥」＋入江・沢沿いの地形を表す「沢見（ぞうみ・ぞみ）」が結びついた地名で、小沢見と一体の海岸や谷地形を背景に成立した名称と思われる。
10	同上 下石	おろじ	鳥取市・由来は、「石の多い場所の下手（低い方）」を意味する地形的由来の地名と思われ、古くは石の多い斜面や谷の下側の集落を指した地名です。
11	同上 郡家	こうげ	鳥取市・由来は、古代の郡役所（郡家（ぐんけ））が置かれた事や段丘の高低差から生じた「高下（こうげ）」という呼び名が転じたものが重なって由来としたと思われる。
12	同上 酒津	さけのつ	鳥取市・由来は、もとは「樽谷（たるたに）」と呼ばれていた地名が、城主の亀井慈矩の時代に「酒」との縁起を担いで「谷」を嫌い「酒津」と改めたと伝えられる。
13	同上 睦逢	むつお	鳥取市・由来は、「人は睦まじく出会い、仲良く暮らす土地」という意味合いを込めて近年になって付けられた地名です。
14	同上 八束水	やつかみ	鳥取市・由来は、古代出雲神話に登場する神名「八束水臣津野命」（やつかみおみつぬのみこと）」に由来すると思われ「八束水」が転じて「やつかみ」と読まれるようになった地名。
15	稲葉丘	いなばおか	鳥取市・由来は、古くからの地名「稲葉（いなば）」と、昭和期に造成された団地名「稲葉ヶ丘団地」に由来し、国名「因幡（いなば）」と同源と思われ「稲の葉や稲の場」を意味する地名要素に、丘陵地の宅地開発を示す「丘」を組み合わせた名称とされる。
16	越路	こいじ	鳥取市・由来ははっきりしませんが、「越路」の字義（山や峠を越える道や境を越える道）から、峠越えや境越えの道筋に由来する地名とみられる説が有力です。
17	石井谷	いわいだに	鳥取市・由来は、元々「岩井谷」と書かれた村名が転じたもので石井郡へ抜ける谷の入口にあった事から「石井（岩井）へ通じる谷」を意味すると伝えられる。
18	上上地	かみわじ	鳥取市・由来は、袋川流域の低地に対して「上手側の上地」に位置する事を重ねて強調した地形に由来する地名。

19	神垣	こうがき	鳥取市・由来は、村の両端にある二つの神社に囲まれた集落であった事から「神の垣（かき）」神社に守られた村という意味で「神垣」と呼ばれるようになったという。
20	拾石	じっこく	鳥取市・由来は、もとの地名「十黒（じっこく）」が転じたもので、豊かな収穫（多くの石＝穀物）を連想される事から改められたと思われる。
21	清水	すんず	鳥取市・由来は、「湧き出る清らかな水（しょうず・しみず）」である場所に由来する地名」とされ、多くは湧水や泉・井戸にちなむ地名です。
22	楠城	なわしろ	鳥取市・由来は、もとは「楠見（くすみ）」と呼ばれた地が「楠城（くすぎ）」へと改名されたもので、楠の木が多い「楠の見える場所」から「楠のある城や要害の地」という意味合いに「変化した」と思われる。
23	広西	ひろせ	鳥取市・由来は、元々「広瀬」と書かれた集落名が時代と共に変化し、国府の西側一帯を指す地名として「広西」と表記されるようになったという。
24	宮下	みやのした	鳥取市・由来は、古代因幡国府の「宮市（みやいち）」跡に由来し、その「宮の下（宮の麓）」に位置する事から「宮下」と呼ばれるようになったと思われる。
25	上地	わじ	鳥取市・由来は、谷あいなどの低地に対して高所の意味から起こったという説がある。峠付近には中世の五輪塔が多く残る地域。
26	古郡家	ここおげ	鳥取市・由来は、古代に郡の役所（郡家（ぐんけ））が置かれていた場所を「もと郡家」とみなして名付けたという説が有力な由来。元は「古高下」と書いたが、元禄期に現在の「古郡家」に改められた。
27	小西谷	こざい	鳥取市・由来は、鳥取城下の枝郷として形成された谷筋の集落で、王寺谷から移された百姓の居住地であった事に由来すると思われる。古くは「小西」とも呼ばれ、法美郡に属しつつ邑美郡の支配を受ける特異な村でした。
28	小沢見	こぞみ	鳥取市・由来は、元々一つの村だった「沢見」が郡境の変更で東西に分かれ、規模の大小から「大沢見（奥沢見）」と「小沢見」と呼ばれるようになった事に由来する。
29	佐治町尾際	さじちょう おわい	鳥取市・由来は、古くは「尾合」とも書かれ、山地の尾根（尾）と谷や川の合流や際に位置する地形を表したものと思われる。
30	佐治町葛谷	かずらたに	鳥取市・由来は、谷に自生していた「葛（つる性植物）」が多い谷＝「葛の谷（かずらのたに）」を意味する自然地名が由来です。中世から「葛谷村」として佐治川沿いに成立した集落で、現在も歴史的地名を継承されている。
31	佐治町春谷	つくだに	鳥取市・由来ははっきりしませんが、谷地形と農作業（春の耕作・脱穀など）に由来すると思われる。

3 2	鹿野町乙亥正	しかのちょう おつかぜ	鳥取市・由来は、古くからの小字名「乙亥正（おつかぜ）」がそのまま残ったもので、「乙」「亥」と言った方位や干支に由来する字と、地形や土地利用を示すと思われる「正（せ）」が組み合わさった古い地名とみられる。
3 3	鹿野町鷺峯	じゅうぼう	鳥取市・由来は、北側から見ると翼を広げた「ワシ」の姿に見える山の「鷺峯山（じゅうぼうさん）」に由来し、その山麓の集落として名付けられた。
3 4	倭文	しとり	鳥取市・由来は、古代の織物（倭文）＝和風の文様織り」を生産した倭文部（しとりべ）という織物集団が住んでいた土地に由来する地名と思われる。
3 5	品治町	ほんじちょう	鳥取市・由来は、西側の鍛冶川と狐川の間にあった「品治村」にちなむ説と、この地にあった寺院「本寺」に名にちなむ説がある
3 6	大桷	だいかく	鳥取市・由来ははっきりしませんが、「桷」という字を含む古い小字や遺跡名（大桷遺跡・桷間一号墳など）として中世以前から続く地名が、そのまま現在の町名になったという。
3 7	竹生	たけなり	鳥取市・由来は、竹の多い土地に由来する説と、古くの人名、氏族名「竹生（たけなり）」などに由来する説がある。
3 8	千代水	ちよみ	鳥取市・由来は、千代川流域の水にちなむ地名で、かつての気高郡千代水村（徳吉・晩稲・南隈・安長・秋里・江津の6地区）を継承した地名と思われる。
3 9	徳尾	とくのお	鳥取市・由来は、「徳のある尾根（丘）の先端部」や「徳尾（とくのお）村として古くから続く集落名に由来する地名」とと思われる
4 0	馬場町	ばばのちょう	鳥取市・由来は、江戸時代中期に御乗役（殿様の乗馬役）だった山田庄蔵が住み、馬に乗っていた事から「馬場町」と呼ばれるようになったという。
4 1	福部町海士	ふくべちょう あもい	鳥取市・由来は、古代の海人集団「海部（あまべ）」に由来し、この地に井田海人や漁民の居住地を示す名が「海士」と表記されたものと思われる。現在も沖合の海士島や服部神社の祭神・服織神との関係などから、古代の海部系集団とのつながりが指摘される
4 2	福部町左近	さこ	鳥取市・由来は、戦国期にこの地の谷城を治めた武将「塩見左近」の名に由来し、その居館や城のあった一帯が後に「左近村」と呼ばれ、現在の地名として残ったもの。
4 3	福部町南田	のうだ	鳥取市・由来は、古くは岩美郡の村名「南田村（のうだむら）」として記録され、塩見川西岸の南側に開けた田地＝「南の田んぼ」の意を持つ地名と思われる。
4 4	福部町箭溪	やだに	鳥取市・由来は、「箭（や＝矢）」と谷や川を意味する「溪（たに）」が合わさり「矢のように真っすぐ流れる谷（川）」を表す地形由来の地名と思われる。古くから箭溪川や箭溪古墳群・蛇山城跡などがあり、谷筋の川と周辺の集落や遺跡を指す名称として定着した
4 5	古海	ふるみ	鳥取市・由来は、古代の「古海郷」由来する。千代川西岸一帯の

			古い地名が、中世から近世を通じて受け継がれて来た地名。
46	卯垣	ぼうがき	鳥取市・由来は、この地にウサギが多く住んでおり、稲穂を食い荒らす為に卯の花の生垣を作って防いだ事に由来する。
47	庖丁人町	ほうちょうにんまち	鳥取市・由来は、江戸時代に鳥取藩の台所方（料理や調理を担当した武家奉公人＝庖丁人）が住んでいた屋敷地に由来する町名。
48	南隈	みなみがくま	鳥取市・由来は、千代水第二土地区画整理事業に伴う町名変更で新たに設定された地名。
49	用瀬町安蔵	もちがせちょうあぞう	鳥取市・由来は、千代川流域の安蔵川流域に営まれた集落に由来する自然地名で「安らかな蔵」「穏やかな谷地」を意味すると思われる。
50	樟原	くぬぎはら	鳥取市・由来は、クヌギ（栲・櫟木・樟とも書かれる落葉広葉樹）と「原（はら＝原野）」に由来し、「クヌギの木が多く生えていた原野」を意味する地名。
51	古用瀬	ふるもちがせ	鳥取市・由来は、戦国期にこの地を本拠としていた武士「用瀬氏」が没落後に現在の用瀬へ移り住み、もとの里を「古い用瀬＝古用瀬」と呼んだ事に由来する。
52	矢矯	やはぎ	鳥取市・由来は、古くは「矢作」「矢萩」などと書かれ、矢を作るや矯める（まっすぐにする）職人や、矢に関わる生産地に由来。
53	若桜町	わかさまち	鳥取市・由来は、醍醐天皇の皇女・筋子内親王がこの地に行啓した際、桜の若芽が美しかったことから「若桜」と名付けられたという伝承が、町の公的資料で紹介されている事に由来する。
54	奥谷	おくのたに	米子市・由来は、一般的には「山合いの奥まった場所にある谷」「谷筋の奥」という地形を表す地名と思われる。
55	皆生	かいけ	米子市・由来は、戦国期の「海家（かいけ）村」が江戸末期に「皆生村」に改名された事に由来し、「皆が生き返る・生まれ変わる」という信仰的な意味合いも重ねられた名称と思われる。
56	上・下安曇	かみあずみ	米子市・由来は、古代に北九州を本拠とした渡来系氏族「安曇（あずみ）氏（安曇族）」が当地に移住したと伝わる事に由来し、古代の「安曇郷」名残と思われ、後に「上・下」に分かれた。
57	上・下新印	かみしい	米子市・由来は、「新印」は日野郡新印村にあった寺院がこの地へ移した事に由来する名称とされ、「上新印」は下新印に対する上手側の位置を示す接頭語と思われる。
58	勝田町	かんだまち	米子市・由来は、中世の荘園に由来し「勝田庄」に由来し「勝田（かった）」と読み、田の豊かさや吉祥を表す地名と言われる。「勝（かつ・かん）」をめだたい字として田地に冠した例という。
59	車尾	くずも	米子市・由良は複数あり、古くは「浜中の里」と呼ばれた地域が改称されたという説と、後醍醐天皇が出雲街道通行の祭に「尾車」詠んだ歌を逆さにして「車尾」とした説などがある。
60	熊党	くまんとう	米子市・由来は、古代の豪族名「熊党（くまんど）」に由来する説が有力で、熊野信仰や熊の生息地にちなむ説もある。

61	下郷	しものごう	米子市・由来は、「郷（さと）」の中で川下川や下手側に位置する集落を示す地名で、「上郷」に対する下位区分として生まれた地名
62	法勝寺町	ほっしょうじまち	米子市・由来は、近くを流れる法勝寺川と、その川沿い一帯の古い地名「法勝寺（ほっしょうじ）」に由来する。
63	葭津	よしづ	米子市・由来は、江戸時代に小篠津村として開かれ、ヨシ（葭）の多い海辺・潟の「津（港・浜）」であったことから「葭津」と呼ばれるようになった。
64	巖城	いわき	倉吉市・由来は、周辺にそびえる岩山や岩壁城の地形を「巖の城（岩の城）」に見立てた事が由来する説が有力です。
65	大河内	おおかち	倉吉市・由来は「大きな川の内側（流路や谷筋の内側）」にある集落」を意味する自然地形由来の名称と思われる。鳥取県内には、倉吉市や南部町などに「大河内」が見られ、いずれも川沿いの谷や盆地状と対応している。
66	大原	おはら	倉吉市・由来は、一般的に「大きな原野（広い平坦地）」を意味する地形に由来すると思われる。県内には倉吉市や伯耆町などに「大原」の地名がある。
67	上神	かずわ	倉吉市・由来は、古代伯耆国久米郡にあった「上神郷（かみがみのさと）」が語源で「下神に対する郷名が時代と共に「かずわ」と読まれるようになったものと思われる。上神大将古墳など古墳時代からの集落があり、古い郷名が現在の地名に残った例です。
68	悴谷	かせだに	倉吉市・由来ははっきりしませんが、「悴（しがれ）＝息子」と「谷」を合わせた字義からの当て字か創作地名と思われる。
69	堺町	さかえまち	倉吉市・由来は、旧来の村境や町境など「境界」に位置したことから「堺（境）町」と名付けられたと思われる。
70	鋤	すき	倉吉市・由来は、農具の「鋤（すき）＝土地を掘り起こす道具の名に由来し、開墾や耕作と結びついた地名と思われる。
71	菅原	すげがはら	倉吉市・由来は、「スゲ（菅）の草が生い茂る原野や湿地状の土地」を意味する地形的由来と思われる。
72	清谷	せいだに	倉吉市・由来は、「清らかな水が流れる谷や澄んだ谷」を意味する自然地形由来の名称と思われる。
73	関金町安歩	せきかねちょうあぶ	倉吉市・由来は、古くは「安部」とも書かれた村名で、小鴨川中流域の集落名として中世から近世から続く歴史的地名がそのまま現在の大字名になったものと思われる。
74	関金町米富	よねどめ	倉吉市・由来は、「米の富」＝米の収穫が豊かな土地である事を表す名と思われ、江戸期史料には「米留村」とも記されている。米作地としての性格を反映した地名です。
75	富海	とどみ	倉吉市・由来は、「富んだ海」「豊かな海」を意味する古い言い回しが転訛したとみられ、漁業や海産物に恵まれた海辺の土地を表した地名と思われる。
76	福庭	ふくば	倉吉市・由来は、「福（さいわい）」と「庭」を合わせた吉祥的な

			字をあてた集落名で、古くは福庭村として天竜川右岸の集落を指した地名に由来すると思われる。
77	不入岡	ふにおか	倉吉市・故藍は、古くは伯耆国造（はくきくにのみやつこ）石川氏の居住地とされる一帯の地名で、「国造屋敷跡」などの伝承を背景に中世以降も続いた歴史的集落名と思われる。
78	見日町	みるかちょう	倉吉市・由来については不明。
79	棕波	もくなみ	倉吉市・由来は、近世の村名「棕浪（もくなむ）村」に由来し、「棕（ムク）の木」と「波（浪）」を合わせて自然地形や植生にちなむ名と思われる。この地域に「棕（むく）の木が多い水辺や波打ち際の地形を表したとみる説もある。
80	上道町	あがりみちまち	境港市・由来は、「あがりまち（上りの道）」＝海岸から内陸へ向う上り坂の道や街道を示す地名とされ、古くは上道村として中世文書にも見える歴史ある名称です。
81	佐斐神町	さいのかみまち	境港市・由来は、村の西北の松林に祀られていた道祖神（さえのかみ）に由来し「佐斐神（さいにおかみ）」と表記されるようになったという。近世には「才神村」とも書かれ、周辺の開拓や城跡とも関わる地名。
82	東雲町	しのめちょう	境港市・由来ははっきりしませんが、一般的には「東の空にたなびく雲＝夜明け」を意味する語から転じた地名と解釈出来る。
83	外江町	とのえちょう	境港市・由来は、中海と境水道に面した外側の入り江や水辺を指す古い地名「外江（とのえ）」に由来し、弓浜半島北西端の水運拠点として発達した村名がそのまま町名として残ったもの。
84	浦富	うらどめ	岩美郡・由来は、漢字の意味からの推定で「富」は「富」と同源で「財貨が満ちる・豊かさ」を表す文字であり、浦富は「入り江（浦）が富むや豊かな浦」という意味合いの地名と思われる。
85	陸上	くがみ	岩美郡・由来は、古代にこの地の沼地で水鳥を捕り朝廷へ献上した人々「鳥取部（ととりべ）」が住んだ事に由来する地名とされる平安中期の辞書「和名類聚抄」に「鳥取郷」として現れ、現在の鳥取市久松山麓周辺が起源と思われる。
86	田後	たじり	岩美郡・由来は、「田の果て・田尻」を意味する言葉に由来すると伝えられ、かつて「田尻村」とも書かれた。
87	田河内	たのこうじ	岩美郡・由来は、「田んぼ（田）」と「川（河）」に囲まれた「内＝内側や谷あい」という地形を表す地名と思われる。古くは村名（田河内村）としても用いられてきたものとされている。
88	外邑	とのむら	岩美郡・由来ははっきりしませんが、字義の通り「外側の邑（むら）」＝中心集落の外延部を指す地名と解釈される。
89	大炊	おおい	八頭郡・由来は、朝廷の台所や食糧管理を司った官職名「大炊（おおい）」に由来し、その職掌や食料調達と関わる土地であった事から名付けられたと思われる。
90	春米	つくよね	八頭郡・由来は、「春に田植えをする米作地」など稲作や年貢米に

		はるこめ	関する意味から生じたと思われる。
91	屋堂羅	やどら	八頭郡・由来についてははっきりしませんが、「屋・堂・羅」という、いずれも仏教施設や建物を連想される漢字で構成されている
92	市瀬	いちのせ	八頭郡・由来は、千代川の瀬（浅瀬）に面した集落であることから「市瀬（いちのせ）」＝「市の立つ瀬や市場のある瀬」に由来すると思われる。近世以降、千代川沿いの交通や流通の要地として発達した用瀬地域の一集落名で「川の地形と市の機能を反映した地名」と思われる。
93	智頭	ちづ	八頭郡・由来は、「道」を表す「智（ち）」と「はじめ・入口」を表す「ず」が合わさり「都から因幡国に入って最初に通過する郡（入口の地）」を意味するものと思われる。古代の官道の要衝であった事を示す地名。
94	埴師	はにし	八頭郡・由来は、古くは「埴（はに＝粘土）」を産する土地で、土師や陶器生産に関わる人々や「埴師（はにし）」と呼ばれる土器作りの職能にちなむ地名と思われる。
95	穂見	ほのみ	八頭郡・由来は、稲の穂が良く実る田の景観を表す「穂」と山や丘を意味する「見（峯や見山）」などが結びつき「稲穂の良く見える（実る）場所」を指す地名というのが有力な説です。
96	市谷	いちのたに	八頭郡・由来は、「市（いち＝市場）」が立った谷間の地形を表すと名とおもわれ「市の谷」が転じた地名。
97	私都	きさいち	八頭郡・由来は、古代の郡名・郷名である「私部（きさいべ）郷」が中世に「きさいち」と呼ばれるようになり、近世以降「私都」と表記されるようになった地名です。
98	塩上	しおのうえ	八頭郡・由来は、千代川沿いの低地で塩分を含んだ湿地や塩性土壌が広がっていたことから「塩の上手（かみ）」＝塩分の多い土地の上流側や高まりを指した地名と思われ、塩分を帯びた土地環境に由来する説が有力です。
99	下濃	しもの	八頭郡・由来は、日野川流域の湿地（下手）で水が「濃い」＝湿地や氾濫地であった地形的特徴を表したものと見られ、「下流側の湿った土地」を意味する説が有力です。
100	隼福	はやふく	八頭郡・由来ははっきりしませんが、「隼村」の一部の集落名として後に付けられた地名で、吉祥語の「福」を組み合わせた名と思われる。
101	隼郡家	はやぶだこおげ	八頭郡・由来は、旧「隼村」と旧「郡家村」という二つの歴史的な村名が並列表記された住所表現です。
102	山上	やまのうえ	八頭郡・由来は、中世に因幡・伯耆を支配した守護大名「山名氏」の一族・家臣団の居住や支配に由来し、「山名」が転訛して「山上」と表記されるようになったと思われる。
103	破岩	われいわ	八頭郡・由来は、近世村名「破岩村」に由来し、村の位置する谷を流れる八東川が岩を浸食・破碎する地形イメージから「岩が破

			れたような場所を意味する地名と思われる。
104	小河内	おごち	東伯郡・由来は、「小さな川の流れる谷あい（川沿いの奥まった土地）」を意味する地形語に由来すると思われる。
105	神倉	かんのくら	東伯郡・由来は、「神の倉（神の御蔵）」＝神聖な物を納める場所や神にゆかりのある山や岩を指す語が縮まったものとみられ、周辺の信仰や地形に由来する地名と思われる。
106	俵原	たわら	東伯郡・由来は、「俵」の字が示す穀物を入れる俵と、「原」＝平原や平地の意味から、穀物俵を積み出したり保管をした原野や耕地に由来する地名と思われる。
107	笏賀	つが	東伯郡・由来は、中世文書に見える「笏賀庄」「笏賀郷」などの古い地名がもとになり、伯耆国の一地域名として続いて来たものと思われる。
108	三朝	みささ	東伯郡・由来は、「三たび朝を迎える頃には元気になる」と言われた温泉の効能に由来し、「三朝」と表記されるようになったという
109	羽衣石	うえし	東伯郡・由来は、もとは「崩岩ノ山」と呼ばれていた山を、南北朝時代に南城氏が城を築く際に、天女が羽衣を掛けたという伝説と古歌の「君が代は天の羽衣まれにきて」にちなむ「羽衣石山」と改めた事に由来する。
110	方面	かたも	東伯郡・由来については不明。
111	上浅津	かみあそづ	東伯郡・由来は、浅津（浅い入り江や浜辺）という地形名に、上流側や内陸側を示す「上」が付いた一般的な地名形成と思われる
112	長和田	なごうだ	東伯郡・由来は、東郷池南岸の羽衣石川下流に広がる細長い田地（長い郷の田・長い和田）を指す地形や田地名から生じたと思われる、鎌倉時代の文書にすでに「長和田西分」と見える歴史ある地名です。
113	野花	のきょう	東伯郡・由来は、古くは「野花尾（のけお）」と呼ばれた地名が音変化して現在の「のきょう」になったという説が一般的です。
114	埴見	はなみ	東伯郡・由来は、古くは埴輪などに使う粘土「埴（はに）」を産した土地を見張る・見渡す場所であった事から「埴を見る場所」という意味に由来する地名と思われる。
115	羽合	はわい	東伯郡・由来は、中世文書に見える「伯井田」「羽合田」という古い地名が変化したものとされ、戦国期にはすでに「羽合田」と記録されていた地名に由来すると思われる。
116	久留	ひさどめ	東伯郡・由来は、古くは「久留村」と呼ばれた集落名で、「久しく留める・留まる」と言った意味合いをもつ語（久＋留）から生じたと思われる、長く人が住み続けた土地や水がたまり留まる土地などを表す地名です。
117	水下	みずおち みずした	東伯郡・由来は、川や用水よりも低い位置にある土地を指す「水の下（みずのした）」が縮まった形とみられ、水害や湧水と関わる低湿地を表す地形由来の地名と思われる。

118	逢束	おおつか	東伯郡・元々「大塚」と書かれていた地名が明治以降に「逢束」と表記されるようになったもので、「人や物資が集まり逢う宿場・港町にあった大きな塚（丘）」に由来すると思われる。
119	鋤	こがね	東伯郡・由来ははっきりしませんが、一般的に漢字の意味から「金属・金」に関わる意味を持つ字を当てたものと思われる。
120	槻の下	つきのした	東伯郡・由来は、「槻（ケヤキの古称）の木の下（付近）の土地」を意味する地名と思われる。古くは「槻下村」として文献に現れ中世には武士の館跡「槻下館跡」も置かれた歴史ある地名です。
121	篋津	のつ	東伯郡・由来は、古代の郷名「篋津郷（のつごう）」に由来し「のつ」は平地に続く港（湊）を意味する地名要素とされ、海辺の地形を表す地名と思われる。
122	保	ほう	東伯郡・由来は、中世の荘園名「保（ほ）」に由来し、年貢を納める私有地＝保・保田などの一部として成立したと思われる。
123	八橋	やばせ	東伯郡・由来は複数あり、逢束川（あいづまがわ）の流れが八つに分かれ、そこに八つの橋が架けられていた事に由来する説と、大国主命の娘の高姫神にまつわる八匹の大蛇の伝承に由来する説が伝わる地名です。いずれも水辺と橋、神話的な景観が反映した地名と思われる。
124	下神	しもつわ	東伯郡・由来は、古くは「下神郷」「下神村」と呼ばれた地域で、上位の「上神（かみつわ）」に対する「下の神の郷（村）」という位置関係を示す地名と思われる。
125	土下	はした	東伯郡・由来については不明。
126	日吉津	ひえづ	西伯郡・由来は、元々は「稗津（ひえづ）」と書かれ「海岸近くの沼地や湿地」を意味した地名が、戦国期以降に現在の「日吉津」の字に改められたとされた。
127	石井垣	いわいがき	西伯郡・由来ははっきりしませんが、石の多い土地や井戸、囲いなど推定の地名と思われる。
128	押平	おしなら	西伯郡・由来は、現材の大山町の旧村名で、「山地の斜面を押し広げたような平坦地（平らな所）」を意味する地形由来の地名と思われる。
129	下甲	しもぎ	西伯郡・由来は、「甲（こう・えのき）川の下流に位置する集落」であることから「甲川に下8しも」の地」という意味で名付けられた地名と思われる。
130	大山	だいせん	西伯郡・由来は、中国地方最高峰である火山「大山」が古くから神の山として信仰され、「大いなる山」を意味する呼び名がそのまま地名となったとされる。古代には「出雲国風土記」に「火神岳（にのかみたけ）」と記され、後に「大山」と表記された。
132	飯戸	たたらど	西伯郡・由来は、集落内の滝の下で「たたら製鉄」が行われた事に由来する地名。
134	束積	つかづみ	西伯郡・由来は、古代の「束積郷」にさかのぼり「束積」は豊作

			を願う意味、」または「ツカ＝塚」として古墳が多い土地を示すと する説が代表的です。豊作祈願説と古墳地形説が併存している。
135	唐王	とうのう	西伯郡・由来ははっきりしませんが、漢字から「唐（異国・遠 方）」と王（首長・中心）」に関わる伝承や人物名に由来する可能 性が考えられる。
136	豊成	とよしげ	西伯郡・由来ははっきりしませんが、一般的には「豊かに成る・ 豊かに実る土地」を意味する端祥的な地名と解釈される。
137	樋口	ひのくち	西伯郡・由来は、水を通す「樋（とい）」の出口・端を意味する 「樋の口」が語源で、水路や用水の口に由来する地名と思われる
138	御来屋	みくりや	西伯郡・由来は、本来は伊勢神宮の「御厨（みくりや）」という神 領地名に由来し、さらに元弘3年（1333年）に隠岐を脱出し た後醍醐天皇が当地に上陸したという伝承から、男嶋崎を「御来 屋」と書くようになったという。
139	妻木	むき	西伯郡・由来は、奈良から平安期の皇后がこの地の出身とされ 「妻来（つまき）の郷」と呼ばれたという伝承が転じた地名と言 われるが、学術的には確定していない。
140	伐株	きりくい	西伯郡・由来は、山林伐採で木を切り倒した跡＝切り株が多い土 地であったことから、この景観を表す地名として生まれたという。
141	境	さかえ	西伯郡・由来は、伯耆国と出雲国の国境付近に位置したことから 「国境（くにざかい）」を意味する地名として生まれ、港町として 発展した堺港などに受け継がれている。
142	能竹	のうじく	西伯郡・由来ははっきりしませんが、「能う（よく育つ）竹」「よ く茂る竹林」など竹に関する意味からの連想される地名という。
143	押口	おさえぐち	西伯郡・由来は、中世に岸本村にあった「岸本要害」という城砦 を北側から押さえる位置にあったことから「要害を押さえる口（出 入口）」を意味して名付けられた地名。
144	白水	しらみ	西伯郡・由来は、「白く澄んだ水」や「泡立つ白い水」を意味する 水辺の景観に由来する地名と思われる。
145	阿毘縁	あびれ	日野郡・由来は、梵語（サンスクリット語）に由来し「他に比類 なき素晴らしいところ」という意味を持つ言葉が転じた地名。
146	神戸上	かどのかみ	日野郡・由来は、古代の「神戸郷」や神社に付属した封戸（神戸 ＝かんべ）に由来し、「神戸の上流側（上の郷）」という意味を持 つ地名と思われる。
147	秋縄	あきつな	日野郡・由来は、古くは「秋綱」「秋角」などと書かれ、日野川沿 いの山地に開けた集落で、秋の収穫期や山の斜面形状に由来する 説があるが、確定説ではないと思われる。
148	金持	かもち	日野郡・由来は、かつてこの地が鉄（砂鉄やたたら製鉄）の産地 であり、「金＝鉄」を持つ村」「鉄山を持つ村」という意味から生 まれたという説がある。
149	高尾	こお	日野郡・由来は、「高い尾根（山の尾）」を意味する古い地形語か

			ら付いた地名と思われる。
150	久連	くれ	日野郡・由来は、この地から「樽（くれ）」と呼ばれる板材を産出した事に由来する。
151	下蚊屋	さがりかや	日野郡・由来は、「蚊屋（かや）」と呼ばれた一帯の内、川下側に位置する集落を示す地名で、「下」＋「蚊屋」という位置関係を表す名称と思われる。



米子城跡

島根県



NO	地 名	読み方	由 来
1	秋鹿町	あいかちょう	松江市・由来は、古代の行政区画「秋鹿郡（あいかのこおり）」の名に由来し、その秋鹿郡名は群家の北に鎮座した神「秋鹿日女命（あきかひめのみこと）」の神名にちなむと伝えられる。奈良時代の「出雲国風土記」に秋鹿郡が見え、古くは「あきか」と読まれ、平安期以降に音便で「あいか」となったと思われる。
2	邑生町	おうちょう	松江市・由来は、中世文書に見える「邑生村」を受け継ぐ地名で古くは長海新庄の一部として清安寺への寄進状などに名が現れる歴史的集落名が、そのまま近代以降の町名となったという。
3	大海崎町	おおみさきちょう	松江市・由来は、中海に突き出した岬状の地形から「大きな海に面した岬（大きな海の岬）」を意味すると思われ、「出雲国風土記」

			に見える島根県前原崎に否定される古い海岸地形に由来する。
4	魚瀬町	おのぜちょう	松江市・由来ははっきりしませんが、「魚」と「瀬」の組み合わせは、魚が多く集まる浅瀬を指す地名と思われる。
5	恵曇	えとも	松江市・由来は、「出雲国風土記」に記された伝承で、海岸の潟湖や入江を指す「えとも（恵曇）」という言葉に由来し、潟湖や入江の多い地形を表した地名とされる。アイヌ語由来説もある。
6	手結	たい	松江市・由来は、古代の「手結浦（たえのうら）」に由来し、「出雲国風土記」に記された港や浦の名が変化したものと思われる。
7	国屋町	くやちょう	松江市・由来は、中世以来の「国屋郷」「国屋村」という古い地名を受け継いだ町名であり、その名は出雲国地方行政区画名（郷名・村名）に由来すると思われる。
8	薦津町	こもづちょう	松江市・由来は、「出雲国風土記」に見える佐太水海（さだのみずうみ）東岸一帯の地に由来する湖岸の地名と思われる。「薦」は水辺の草「津」は水際や港を意味する事から、水草の繁る入り江や水際を表した地名と解釈される。
9	大芦	おわし	松江市・由来は、古くは「大埼（おおさき）」と書かれた岬の地名が音の変化などにより「大芦（おおあし）」へ転じたものとされた
10	宍道町	しんじちょう	松江市・由来は、古代の「宍道郷」に由来し、出雲国風土記に見える「猪（しし）と犬（いぬ）が石になった」という伝承から「宍道（ししじ）」と呼ばれた地名が、後に「しんじ」と読まれるようになったという。
11	佐々布	さそう	松江市・由来は、奈良時代の「出雲国風土記」に見える「佐雑（ささふ）村」に由来し、その古い表記や読みが変化して現在の地名になったと思われる。
12	手角町	たすみちょう	松江市・由来は、古代の「出雲国風土記」や「和名抄」に見える島根郡「手染（たしみ）郷」の名が変化や継承した地名とされると思われる。
13	長海町	ながみちょう	松江市・由来は、かつてこの一帯が属した「島根郡」の中で、海岸線に細長くのびた地域であった事から、「長い海岸（長い海辺）」を意味する地形的特徴に基づく地名と思われる。
14	法吉町	ほっきちょう	松江市・由来は、「出雲国風土記」に記された「法吉郷」に由来し宇武賀比売命（蛤甲比売）が法吉鳥（うぐいす）に姿を変えてこの地に降り立ったという伝承から名付けられた地名。
15	出雲郷	あだかえ	松江市・由来は、古代にこの地にあった阿太加夜（あだかや）神社と、その背後に想定される阿羅加耶（朝鮮半島南部）の神を祀る渡来系集団に由来する地名と思われる。中世以降は郷名が地名化し「出雲郷」と書いて「あだかえ」と読むようになった。
16	母衣町	ほろまち	松江市・由来は、戦国武将の堀尾吉晴がかつて「母衣衆」であった事にちなむ説と、出陣の際に母衣を着ける事を許された上級武士が多く住んだ事にちなむ説がある。

17	櫟田原町	いちいたばら ちょう	浜田市・由来は、櫟（いちい・くぬぎなどの雑木）と田の多い原野を意味する地形語から生まれた地名と思われる。江戸時代の村名「櫟田原村」を継承した地名。
18	生湯町	うぶゆちょう	浜田市・由来は、古くから湧く温泉（生まれたての湯＝生湯）に由来すると思われる。1963年に町名として成立した。
19	上府町	かみこうちょう	浜田市・由来は、古代の石見国府が置かれた「国府（こくふ/こう）」の内、下流側に対する上流側・内陸側を示す「上の国府＝上府」とする説が有力です。
20	周布町	すふちょう	浜田市・由来は、神話登場する和加布都主命が狩りの際に幔幕を張り巡らすように命じた言葉「周布（すふ）」に由来し、奈良時代に「我布」から「周布」へ改められたと伝えられる。
21	田橋町	たばせちょう	浜田市・由来は不明ですが、旧村名「田橋村」を継承した地名と思われる。
22	日脚町	ひなしちょう	浜田市・由来は、古くは「日脚村（ひなしむら）」と呼ばれ、古代からの集落名「日脚（ひなっし）」がそのまま町名として継承されたものと思われる。
23	穂出町	ほのでちょう	浜田市・由来は、古くは「穂田」「穂出」など稲穂に関わる字を用いた田地に由来し、稲穂のよく実る土地や穂が良く出る田を意味する地名と思われる。
24	十六島町	うっぷるいちょう	出雲市・由来は、アイヌ語系とされる「ウブ・ルイ（多く・流れ込む入り江/波の寄せる入り江）」などの語源とする説がある。
25	萩杼町	おぎとちちょう	出雲市・由来は、古くは「杼島村（とちじまむら）」と呼ばれた地域に由来し、トチ（栃）の木やその実を意味する「杼（とち）」と、低湿地や島状の土地を指す地形語が見合わさった名称が変化して現在の「萩杼」の表記されるようになったと思われる。
26	神門町	かんどちょう	出雲市・由来は、古代の行政区画「出雲国神門郡」及びその郡名の由来になった豪族「神門氏」や、神々の出入りする「神の門」を意味する信仰的な地名に由来すると思われる。現在でも出雲大社周辺の「神門通り」などにその名が受け継がれています。
27	国富町	くんどみちょう	出雲市・由来は、「国が動かないように留めた」という伝承から「国留（くにどめ/くんどみ）」と呼ばれたこと、また「国が豊かであるように」との願いを込めて「国富」と表記された事が由来
28	大社町鵜峠	たいしゃちょう うど	出雲市・由来は、「鵜（う）」という海鳥と、岬や山の突き出た所を指す「峠（とうげ・たお）」が結びつき「鵜のいる岬や峠状の地形」を表したものと思われる。
29	日御碕	ひのみさき	出雲市・由来は、「日（太陽）」を祀る岬としての信仰と、出雲神話の国引き神話における「引き寄せられた土地の矢先の岬」という伝承に由来する。
30	遥堪	ようかん	出雲市・由来は、かつて斐伊川が注いでいた大きな池「菱根池」が「遥かに水を湛える（たたえる）さま」に由来し、その表現が

			転じた地名とされる説が有力です。
3 1	斐川町併川	ひかわちょう あいかわ	出雲市・由来は、複数の小河川が合流して一つになる地形から「川が併（あわ）さる川＝併川」と呼ばれるようになったという説が有力です。
3 2	阿宮	あぐ	出雲市・由来は、斐伊川の中州状の小島と、その周辺の集落や社（宮）にちなむ地名と思われ、「阿」は古い接続語的な字を当てたものと思われる。
3 3	沖州	おきのす	出雲市・由来は、「沖に面した洲（砂州や州浜）のある土地」を意味する地形由来の地名と思われる。古くは簸川郡の村名「沖須村」として見え、「沖」は沖合や湖岸側、「洲/須」は砂州や洲の意とされ、宍道湖東部の低湿地砂州地形を反映した名称です。
3 4	求院	ぐい	出雲市・由来は、本牟智和気命が「鵠（くぐい）」という大きな鳥を追って出雲の宇夜江で捕らえたという神話に由来し、その池を「鵠の池」、周辺を「鵠村」と呼んだのが転じて「求院村」となったと伝えられる。
3 5	富村	とびむら	出雲市・由来は、中世文章に見える「富村」という郷名や荘園名が起源で、「富（ゆたか）な土地や田地を意味する語から生じた地名と思われる。
3 6	中州	なかのす	出雲市・由来は、斐伊川などの河川がつくる川中の砂州や三角州状の土地＝中州（なかす）に由来する一般的地形の地名。
3 7	三絡	みつがね	出雲市・由来ははっきりしませんが、斐川平野は古く、斐伊川の分流や三角州が発達した地域であり、川筋や道が複雑に絡み交わる土地柄から付いた地名と思われる。
3 8	美南	みなみ	出雲市・由来は、旧の美談郷（みだみごう）に由来し、「美しい田（み）」が広がる地域を意味する古い地名の「美談」が転訛して「美南」と表記されるようになったと思われる。
3 9	美談町	みだみちょう	出雲市・由来は、「出雲風土記」に記された神の和加布都努志命が「天御領田（あめのみた）の長」として仕えたことから「御田を見る神」にちなみ、豊かな田んぼの広がる地を表す地名として生まれたと思われる。
4 0	美野町	よしのちょう	出雲市・由来は、「出雲風土記」に見える古代の郷名「伊農（伊努）郷」（いの/いのう）に由来し、これが中世以降の音変化して「伊野（いの）」「美野（よしの）」に表記されるようになったと思われる。
4 1	愛栄町	あさかちょう	益田市・由来ははっきりしませんが、「愛栄」という漢字の組み合わせから「愛で栄える土地」や「人々に愛され栄えた土地」という意味合いかと思われる。
4 2	飯浦町	いいのうらちょう	益田市・由来は、仲哀天皇がこの岩山の多い海岸を「岩見の浦」と名付けたのち、安祿山の乱に備えて紀伊国から起飯人がこの浦を防備した故事にちなみ「飯浦」と改めたという伝承がある。

4 3	黒周町	くろすちよう	益田市・由来は、中世の地名「黒谷（くろだに）」に由来し、大道山の北側に続く暗い谷（黒い谷）を意味する地名から転じたもの
4 4	遠田町	とうだちよう	益田市・由来は、「遠田」が「遠い田」や「奥まった田」を意味し、益田平野から離れた山裾の田地を指した事に由来する。
4 5	中垣内町	なかがうちちよう	益田市・由来は、山の斜面などに設けられた「垣内（かいと/がいと＝囲われた土地や谷あいの集落）の内、中央部に位置する集落を指す地形由来の地名。
4 6	中島町	なかのしまちよう	益田市・由来は、川の中州状の土地（川の「中の島」）に由来すると思われ、島状の微高地に集落が形成された事から「中島」と呼ばれるようになったという。
4 7	虫追町	むそうちよう	益田市・由来は、田の害虫を追ひ払う「虫追い」の信仰や行事に由来し、大歳大明神などの田の虫退治に霊験あった事から名付けられたという。
4 8	五十猛町	いそたけ	太田市・由来は、日本神話に登場するスサノウノミコトの子の五十猛命（イソタケル/イタケル）がこの地に上陸したという伝承に由来する地名とされる。
4 9	大城町大家	おおしろちよう おおえ	太田市・由来は、大化改新以前の古代この地には屯倉が置かれ、豪族の大家氏が管理していたと言われる。「大宅」とも表記された
5 0	久手町刺鹿	くてちよう さつか	太田市・由来は、中世の郷名「刺鹿郷（さつかごう）」及び中世村名「刺鹿村」に由来し、古くからの地名がそのまま残り継承された地名。鹿は神の使いであり、神に捧げる大切な存在でした。その為神事として鹿を仕留めていた場所。これが「刺鹿」という名の由来という。
5 1	三瓶町	さんべちよう	太田市・由来は、町の南にそびえる火山「三瓶山（さんべさん）」に由来し、その山名から付いた地名です。三瓶山は古くから信仰と生活の場として周辺地域の中心的存在であり、地名もその自然地形を反映したもの。
5 2	仁摩町仁万	にまちようにま	太田市・由来に諸説あり、古代の郡家が置かれた港町「仁万郷」「仁万律」に由来する地名で、古くは「和名抄」に「仁間ノ津」と見え、豊かな土地や鉱物「丹」に関わる説などがある。
5 3	水上町白坏	みなかみちよう しろつき	太田市・由来は、この地で産する白い土を使った「白い土の杯（さかずき）」に由来すると思われる。瓦作りに適した白土が採れた事から、その特徴を示す呼び名が地名になった。
5 4	温泉津	ゆのつ	太田市・由来は、「温泉のある津（港）」を意味し、古くから湧く温泉と天然の良港が一体となった土地柄を表した地名となっている。平安期の「倭名類聚抄抄」に「温泉郷」として現れ、中世には「温泉（ゆの）郷にある津」から「温泉津」と呼ばれるようになったと言う。
5 5	飯生町	いなりちよう	安来市・由来は、中世の荘園名「飯生庄（いなりのしょう）」や近世の村名「飯生村」に由来し、「飯（い）」＝稲・米の実りと、土

			地の神格化を表す名が結び着いたものと思われる。
56	吉佐町	きさちょう	安来市・由来は不明ですが、古くからの「吉佐村」という村名を引き継いだものと思われる。
57	九重町	くのちょう	安来市・由来は、旧村名「九重村（くのうむら）」に由来し、「九重」は多くの山々や峰が重なり合う景観を表す語と思われる。
58	実松町	さねまつちょう	安来市・由来は、中世にこの一帯にあった荘園「真松（さねまつ）保」の名が近世以降「実松」と表記されるようになった。
59	須山福富	すやまふくとみ	安来市・由来は、「須山」は炭（すみ）を産した山「福富」は古く の地名「福留（ふくどめ）」が転じたものと思われる。
60	伯太町峠之内	たわのうち	安来市・由来は、比叡山へ向かう才（さい）の峠より「峠の内側」に位置する山間の集落である事から、その地形的位置を表して名付けられた地名。
61	日次	ひなみ	安来市・由来は、「日並（ひなみ）」＝太陽が良く差し並ぶ場所や日当たりの良い場所を意味する具類語形が転じたものとされる説が有力。古くは「日並」「日波」などの表記があり、川沿いや海沿いの開けた土地の性格を表す地名です。
62	末明	ほのか	安来市・由来ははっきりしませんが、字形から「末＝端・先」「明＝開けた・明るい」と読めるため「山地や谷の末端が開けた場所」と言った地形由来の地名と思われる。
63	飯島町	はしまちょう	安来市・由来は、「飯島（はしま）」という古い地名や姓に由来し「飯（穀物・稲作）」と「島（中海沿岸の島状地形）」を表すと思われる。
64	井沢町	いそうちょう	江津市・由来ははっきりしませんが、「井」は井戸や湧き水・水場を表し、「沢」は谷地や湿地・沢地など水の多い地形を表す為、「井沢」は「水場のある沢や谷筋」といった地形に由来すると思われる。
65	敬川	うやがわ	江津市・由来は、古代的那賀郡「都農（つの）郷」に属する海岸部の一地区として成立し、近くを流れる「敬川（うやがわ）」という川の名に由来すると思われる。
66	二宮町神村	にのみやましかむら	江津市・由来は、中世以来の村名「神村（かむら/上村）」が近世以降も継承された地名です。神社や「神」に関わる集落です。
67	掛合町	かけあいちょう	雲南市・由来は、古くは交通の要衝として「道が掛け合う（交差する）場所」を意味する説が有力です。
68	木次町	きすきちょう	雲南市・由来は、「出雲国風土記」に見える「木次郷（きすきごう）」に由来し、神話で八十神を追ひ払った際に「この地においてになった（来すき）」事から名付けられたと伝えられる。のちに表記が「木次」となったという。
69	薦澤	こもざわ	雲南市・由来は、水辺に生える水草「薦（こも）」が多い沢＝「薦の沢」が語源とみられ、湿地状の谷筋地形を反映した地名。
70	三刀屋町須所	みとやちょう	雲南市・「須所」の由来は、中世以来の村名「須所村（すぞむ

		すぞ	ら)」に由来し、近世文書にも見られる歴史的な地名が残ったもの
71	亀嵩	かめだけ	仁多郡・由来は、近くの山の形が亀（スッポン）に似ている事から付いたという説が有力です。
72	馬馳	まばせ	仁多郡・由来は、古くは「馬馳村」と書かれ、馬を走らせる・駆けらせる場所に由来する説が有力です。
73	飯石	いいし	飯石郡・由来は、「出雲風土記」によれば神伊弉志都幣命（いびしつべのみこと）がこの地に天降った事に由来し、もとは「伊鼻志（いびし）」と書いたが、神亀3年（726年）に「飯石」と改められたという。
74	簸川	ひかわ	簸川郡・由来は、出雲地方を流れる斐伊川（ひいかわ）の古い呼び名「簸川（ひのかわ・ひかわ）」に由来し、この川の名を郡名に採ったという。
75	邑智郡	おおちぐん	邑智郡・由来は、古代の郡役所「邑智郡家（おおちぐんけ）」があった事に由来し、「邑（むら・くに）」を治める知（さとし）を持つ役所＝郡家を意味する地名とされる。
76	谷戸	たんど	邑智郡・由来は、谷に囲まれた低地・小盆地状の地形を表す「谷戸（やと）」形地名が、この地域の方言的に読みにより「たんど」となったという。
77	吾郷	あごう	邑智郡・由来は、中世の石見国邑智郡佐波郷の一部「吾郷（あごう）」という地名に由来し、後の吾郷村・吾郷地区として受け継がれた地名と思われる。
78	乙原	おんばら	邑智郡・由来は、「乙（おと）＝二番目・次の」「原＝原野」を意味し、周辺の前野地形に由来する地名と思われる。古くは「邑智郡誌」などで原野であった事に由来する。
79	櫛谷	かたらがい	邑智郡・由来は、ハゼノキ（櫛）の多い谷地形を表す地名と考えられ「櫛＋谷」が転訛して現在の「かたらがい」になったという近世には石見銀山御囲村の一つ「櫛谷村」として、現在も残っている。
80	京覧原	きょらんばら	邑智郡・由来は不明です。
81	築瀬	やなせ	邑智郡・由来は、川に仕掛ける魚捕り用の「築（やな）を設けた瀬（浅瀬）の場所を意味する地形や生業由来の地名という。
82	湯抱	ゆがかい	邑智郡・由来は、村の中央東寄りに湧く現在の湯抱温泉の湯に由来し、「湯を抱く（湯を抱き込む）場所」という意味から生じた地名と思われ、江戸時代には既に温泉が知られ、地名の由来という
83	出羽	いずは	邑智郡・由来は、中世文書に見える「出羽郷（いずはごう）」に由来し、同地を本拠とした国人・出羽氏（出羽元祐ら）の地名から現在の大字名として継承されているものと思われる。
84	邑南	おおなん	邑智郡・由来は、旧町村名「石見町（いわみちょう）」の「邑（おお）」と、旧村名「羽須美村（はすみむら）」の「南（なん）」を合わせた合成地名で、郡の南部に位置することも意識して命名された

85	日貫	ひぬい	邑智郡・由来は、中世文書に「日縫」「日貫」と記された古い地名で、「日を縫う」「日が差し通る」ような地形や景観を表すとする説が有力です。
86	左鐙	さぶみ	鹿足郡・由来は、壇ノ浦の戦いで敗れた平家の武者がこの地で馬の「左の鐙（あぶみ）」を生け垣に引っかけて落としたという伝承に由来すると思われる。
87	名賀	なよし	鹿足郡・由来は不明。
88	部栄	ぶさか	鹿足郡・由来は、銀鉾脈の発見によって久しく栄えるようにとの願いを込めて名付けられた地名と思われる。
89	有飯	ありい	鹿足郡・由来は、「飯（米や食糧）がある土地」「食に恵まれた場所」といった意味合いから生じたと思われる。
90	注連川	しめがわ	鹿足郡・由来は、神事に用いる「注連縄（しめなわ）」と川を結び付けた地名とみられ、川を神聖な境界や祭祀の場とみなした事に由来する地名と思われる。
91	蓼野	たでの	鹿足郡・由来は、川沿いなどに自生する植物「蓼（たで）」が多い野（原野）であった事から「蓼の野」から「蓼野」になったと思われる地名。
92	海士	あま	隠岐郡・由来は、古くはこの地に住み漁労に従事した海の民＝海士（あま）に由来し、「海部」「海」などと書かれた古い地名表記が変化したもの。
93	宇受賀	うずか	隠岐郡・由来は、古くは「宇須賀」「宇津賀」とも書かれた地名で神社名「宇受賀命神社」と関わる古い神名・伝承に由来する地名と思われる。表記は時代により揺れますが「うずか/うつか」と読まれ、隠岐の代表的な古社の鎮座地として中世から知られる。
94	古海	ふるみ	隠岐郡・由来は、「古い海」＝かつて海だった低湿地や入江が埋め立てや干拓で陸地化した地形を指す地名というのが有力な説です
95	来居	くりい	隠岐郡・由来ははっきりしませんが「人や船がやって来て、居ついた所」「来訪者が集まり住み着いた港（集落）」と思われる地名。
96	多沢	たたく	隠岐郡・由来ははっきりしませんが、沢の多い地域と思われる。
97	有木	あらき	隠岐郡・由来は、古くは「蟻木」とも書かれ、戦国期の蟻木城に由来する地名で、古代の海士族（あまぞく）との関係を指す地名
98	犬来	いぬぐ	隠岐郡・由来は、「犬が来た場所」という意味とされるが、古文献等には明確な由来はのっていない。
99	卯敷	うずき	隠岐郡・由来は、古くは「うつき」とも読まれ「宇敷」などとも書かれた地名で、卯年・卯月との確認は確認されておらず、川と入江に面した集落名として中世から近世に成立した地名。
100	蛸木	たくぎ	隠岐郡・由来は複あり、周辺海域でタコ漁が盛んだった事から「蛸」にちなむ名が付けられた説と、海岸の岩礁や入り江の形がタコの足のように入り組んでいた事に由来する説がある。
101	都万	つま	隠岐郡・由来は、古代の郷名「都麻（つま）郷」に由来し、律令

			制下の行政区画名がそのまま地名として受け継がれたものと思われる。
102	那久路	なぐち	隠岐郡・由来は、「風（なぎ）」の語に由来し、神功皇后が三韓征伐の際にこの地で時化を避けて風待ちをした伝承から「風（なぎ）の路（みち）＝那久路と呼ばれるようになったという。



出雲大社の社殿

岡山県



NO	地名	読み方	由来
1	栢谷	かいだに	岡山市・由来は、「栢（かや＝カヤの木）」が多く生えた谷地形に由来する地名と思われる。
2	岡南町	こうなんちょう	岡山市・由来は、岡山市中心部の南側（岡山状南方）にある事から「岡の南＝岡南」と呼んだ事に由来する。戦後の市街地拡大に伴う町名整理の中で成立した地名。
3	首部	こうべ	岡山市・由来は、温羅（うら）伝説にゆかりのある地名で、吉備津彦命に討ち取られた温羅の首が埋められたのがこの場所だとされて

			いて、首がいつまでも唸り続けるので「吉備津神社」に移されたという。近くには源平合戦の古戦場もあり、首塚はそちらに由来するという伝承がある。
4	下神目	しもこうめ	岡山市・由来は、元々志呂神社の祭祀に仕えた人々を指す「神部（かんべ）」と呼ばれた集団名が「神目」となり、そのうち下流側の集団を区別して「下神目」としたものの。
5	鶴田	たづた	岡山市・由来ははっきりしませんが、一般的には、鶴が多く集まる湿地や水田、あるいは鶴に似た地形にちなむ地名と思われる。
6	豊楽寺	ぶらくじ	岡山市・由来は、同地域にある寺院「豊楽寺」の寺地とその付属耕地から分かれて成立した村名・地名です。元は下神目村の一部で、豊楽寺の寺領として開かれた百姓地を中心に分村した事が、古文書から確認できる。
7	中撫川	なかなつかわ	岡山市・由来は、古代からある「撫川郷」の一部で、足守川流域の低湿地に開けた集落が、上流側の「中」に位置した事から「中撫川」と呼ばれるようになったという。
8	撫川	なつかわ	岡山市・由来は、古代の郷名「撫川郷」に遡るという。字義の「撫でる・いたわる」を意味する「撫で」と「川」を合わせた「穏やかな川や人に恵みを与える川」を想像した地名と思われる。
9	西山内	にしやまのうち	岡山市・由来は、旧村名「山内」の西側に位置する山あいの集落である事から「山の内・山中」を意味する「山内」に西側を示す「西」を付けた地名。
10	納所	のうそ	岡山市・由来は、かつて年貢米を収納した倉庫（納所＝米などを納める場所）であった事に由来する。
11	蕃山町	ばんざんちょう	岡山市・由来は、江戸時代の陽明学者の熊沢蕃山の屋敷があった事に由来し、彼の号「蕃山」にちなむ地名。
12	東山内	ひがしやまのうち	岡山市・由来は、旧福谷村の一部で「山内（山の内部や山あいの集落）」という古い地名に対し、その東側に位置する事から「東山内」と呼ばれるようになったと思われる。
13	日近	ひじかい	岡山市・由来は、「日（太陽）」と「近い」が結びつき「日当たりの良い近い場所」を意味する地形由来の地名と思われる。
14	真星	まなぼし	岡山市・由来は、山中に落ちて来たと伝えられる「星」（隕石・大岩）を祀った伝承に由来し「真に尊い星」「本当の星」という意味合いから名付けられたとされる。
15	御津鵜飼	みつうかい	岡山市・地名の「鵜飼」の由来は、近くを流れる字甘川（うかいがわ）に由来し、この川名が転じて「鵜飼」と表記されるようになったと思われる。
16	御津草生	みつくそう	岡山市・草生の由来は、周辺一帯が草の生い茂る草原や沼沢地であったことから「草の生えた所」という意味でついた地。旭川右岸の氾濫原で、水を多く含む土地だったため、人が開発せず草地として残った地形的特徴が背景にある。

17	御津紙工	みつしとり	岡山市・由来は、古代に織物を作る集団（倭文部（しとりべ））が住んでいた事に由来し、後に製紙が行うようになって漢字が「紙工」と当てられた地名とされている。
18	三和	みと	岡山市・由来は、旧三門村・大和村・出石村の三地区が一体となって発展する事を願い「三つの和（調和・融和）」を込めて名付けられた地名と思われる。
19	山上	やまのうえ	岡山市・由来は、「山の上にある集落・台地上の集落」である事を示す記述的な地名と思われる。
20	赤田	あこだ	岡山市・由来は、古くは「阿古田」「赤土」などと書かれた湿地や赤土の田を指す地名が転じたものとする説が有力です。
21	網浜	あみのはま	岡山市・由来は、かつて漁村であったこの地で、浜辺に漁網を干したり扱ったりしていた事から「網の浜」が「網浜」と呼ばれるようになったと思われる。
22	乙多見	おたみ	岡山市・由来は、村内の生庶（おたみ）大明神（現・生庶神社）の名に由来する地名とされ、江戸期の「乙多見村」以来の歴史を持つと思われる。
23	礪	さい	岡山市・由来は、干拓地「沖新田」の区画整理で付けられた数字入り地名群の一つで「十三番町」を意味する「十三才（さい）」が転じた地名という。
24	礪東町	さいひがしまち	岡山市・由来は、「礪」の東側に位置する地域。
25	四御神	しのごぜ	岡山市・由来は、土師の森に鎮座する大神神社で四座の神「四柱の祭神」を祀る事から「四御神（しのごせ）」と呼ばれるようになったという。
26	海吉	みよし	岡山市・由来は、古くは「海岸近くの吉い土地」を意味する語や、吉備の古い海「吉備の穴海」と関わる「海部の吉地」を表す呼称が転じたものと思われる。
27	湯迫	ゆば	岡山市・由来は、瀧ノ口山麓の浄土寺境内にあった温泉「湧泉」とそこに設けられた大きな湯屋に由来する地名という。中世には温泉が湧き、後に湯が枯れたという伝承もある。
28	邑久郷	おくのごう	岡山市・由来は、古代の「大迫（おおく）国造」に由来する地名「邑久（おおく）」という郷名を受け継いだものと思われる。
29	九蟠	くばん	岡山市・由来は、もとは干拓地の区画番号「九番（くばん）」で、それが明治以降に字形を変えて「九蟠」と表記するようになった。現在の「蟠」は「わだかまる」の意味を持つ字で、番地表記との混同を避けるために当てられたと説明されている、
30	鉄	くろがね	岡山市・由来は、古くはこの周辺で鉄鉱石を産出し製鉄が行われていた事に由来するとされ、「鉄を産した土地」である事を示す地名
31	古都宿	こずしゅく	岡山市・由来は、古代からの地名「居都郷（こづごう）」に由来する「古都（こづ）」と、中世以降に山陽道の宿駅が置かれた事に由来する「宿」を合わせた地名と思われる。

32	古都南方	ことみなみがた	岡山市・由来は、古都郷の南に位置する事から、北方に対して南方村と呼ばれたもの。
33	穴甘	しじかい	岡山市・由来は、古代に朝廷が猪や鹿を飼育するために置いた穴甘部に由来する。
34	宿毛	しゆくも	岡山市・由来は、古くは湿地や浅い海だった土地に生えた「スゲやカヤなどの草が群生する場所」を意味する地形由来の地名。
35	一日市	ひといち	岡山市・由来は、中世に毎月一日に開かれた市（定期市や日限市）があった事に由来する地名。
36	南古都	みなみこず	岡山市・由来は、古代の郷名「居都（こづ）郷」・近世の「古都村」の南側に位置する事から「古都の南にある村＝南古都」と名付けられた地名。
37	百枝月	ももえづき	岡山市・由来は、古くは「百枝月村」と称した村名に遡るが「百の枝」と「月」を組み合わせた地名と思われる。
38	飽浦	あくら	岡山市・由来は、古代の郷名「飽浦（あくらのうら）」に由来し、瀬戸内海に面した浦（入江や港）を指す地名が残ったもの。中世には佐々木氏一族がこの地名を名乗り、港町として発展した。」
39	奥迫川	おくはざかわ	岡山市・由来は、「迫川（はざがわ）」地区の山あい奥部に開かれた新田や集落である事から「奥（内側・奥まった所）＋迫川」と解される説が有力です。
40	新保	しんぼう	岡山市・由来は、室町時代に新しく開墾された土地を意味する「新しい保（ほ）」＝新しい開墾地に由来すると思われる。
41	妹尾	せのお	岡山市・由来は、平安末期にこの地を開発した武将「妹尾（瀬尾）太郎兼康」の名に由来する説と、海や入り江に面した「瀬の尾」（岬や洲の先端）を語源とする説の二つがある。
42	迫川	はざかわ	岡山市・由来は、「山と山に挟まれた狭い谷（迫・ハザマ）を流れる川」に由来する地名と思われる。
43	箕島	みしま	岡山市・由来は、「三つの島（洲）」が連なった地形から「三島」と呼ばれ、それが後に稲を振るう農具「箕」にちなむ字を当てて「箕島」と表記されるようになったという。
44	北畝	きたせ	倉敷市・由来は、江戸時代以降に干拓された畑地の「畝（うね）」が北側に位置する事から名付けられた地名で、南畝や中畝などと並ぶ開拓新田の区画名に由来する。この地域は、近世後期に塩田・新田開発が進んだ干拓地帯であり、その区画を示す方向＋畝の組み合わせが現在も地名で残っている。
45	児島通生	こじまかよう	倉敷市・由来は、中世以降の荘園名や村名「通生（かよう）」に由来し、瀬戸内海に面した港と製塩で栄えた歴史のある集落名がそのまま残ったものと思われる。
46	児島塩生	こじましおなす	倉敷市・由来は、古代から中世にかけてこの一帯が製塩地であった事に由来し、塩を「生産する・なす」土地から来た地名。
47	祐安	すけやす	倉敷市・由来は、「祐安」は、もとは「須計奈須の里」といい、菅

			生神社の菅（スゲ）生（ナス）が転訛したものと云われる。
48	中畝	なかせ	倉敷市・由来は、かつてこの一帯が干拓前の浅い海や湿地で、その「中ほどにある畝状の土地（細長く高まった地形）を指した事に由来するとおもわれる。
49	白楽町	ぱくろちょう	倉敷市・由来は、「白く明るい・楽しい町」というイメージから昭和期に新たに名付けられた地名。
50	日吉町	ひよせちょう	倉敷市・由来は、近江国の日吉大社（日枝神社）を勧請した日吉神社（山王権現）に由来し、「日吉の社のある町」という意味で名付けられたと思われる。
51	船穂町	ふなおちょう	倉敷市・由来は、高築川河口付近を行き交った船の帆（または船尾）に由来し、水運の要地だった事に示す地名です。
52	真備町上二万	まびちょうかみにま	倉敷市・由来は、古代の郷名「迹摩（にま）郷」に由来し、後に上二万・下二万に分かれた地名とされた。「二万の兵を集めた」という伝説は、後世の語呂合わせとみられる。
53	真備町妹	まびちょうせ	倉敷市・由来は、古くは「呉妹（くれせ）」と書かれ、備中国下道郡呉妹村として知られた古代以来の地名で、後に字形だけ「妹」となって受け継がれた地名。
54	真備町箭田	まびちょうやた	倉敷市・由来は、古くからの地名で、矢を意味する「箭（や）」と水田の「田」が合わさり、矢に関わる伝承や地形と水田地帯を反映した地名と思われる。
55	南畝	みなみせ	倉敷市・由来は、「南側にある田畑の畝（畝）が並ぶ土地」という地形・土地利用に由来する地名。
56	鷲羽山	わしゅうざん	倉敷市・由来は、山の姿が「鷲（わし）が羽を広げたように見えること」に由来する。特に北東・東北側から遠望した山容がその名の元になったという。
57	阿波	あば	津山市・由来は、古代の阿波忌部（あわいんべ）氏がこの地に移住した事に由来する説が有力で、他に「栗（あわ）」を栽培した集団の居住地を表す地名という説もある。
58	院庄	いんのしょう	津山市・由来は、後鳥羽上皇の「院」が持っていた荘園（庄）に由来する地名で、「上皇の荘園のあった所」という意味とされる。中世には後鳥羽院の荘園「院庄」といわれた事が村名・地名として残ったという。
59	上田邑	かみたのむら	津山市・由来は、旧田邑村の北側（上手）に位置する田地の集落である事から「田の上手の邑（むら）」＝上田邑と呼ばれるようになったと思われる。
60	加茂町塔中	かもまち たちゅう	津山市・由来は、近くにある寺院の塔（石造宝篋印塔など）に由来し、その塔の所在する一帯を指して「塔のある所」（塔中）と呼んだ事が地名となったという。
61	加茂町百々	どうどう	津山市・由来は、近くを流れる川の水音「ドウドウ」という擬音に由来すると思われる。「百々」とは、水が勢いよく流れる音を表す

62	神代	こうじろ	津山市・由来は、古くから神が鎮まる聖なる土地・神の時代に由来する名称とされ、近くの神社や古い伝承にちなむ地名と思われる。
63	河面	こうも	津山市・由来は、「川の水面近くの低地や川沿いの土地」を意味する古い語義から生じたと思われ「川面＝川の面（かわのも）」が転化して現在の読みや表記になった。
64	細工町	さいくのちょう	津山市・由来は、金具師や研屋・鞆師などの細工職人が多く住んでいた事に由来する職人町の地名。
65	下田邑	しもたのむら	津山市・由来は、田んぼのある村落のうち上流側・北側に位置する集落を示す「上（かみ）」と、水田を意味する「田」、集落や村を表す「邑」を合わせた「他のある村の上手（上流）の集落」という意味の地名と思われる。
66	神戸	じんど	津山市・由来は、古代に特定の神社に奉仕し租税を納めた人々の集落「神戸（かんべ）」に由来し、兵庫県神戸市と同系統の地名とされている。
67	田熊	たのくま	津山市・由来は、「田のある熊（くま＝隅・奥まった所）」という地形を表す語に由来する可能性が高い。
68	堂尾	どうのお	津山市・由来は、「堂（寺院などの建物）」と「尾（山の尾根や尾根状の地形）」に合わせ、「堂のある尾根（尾根状の高まり）」を意味する地形由来の名称と思われる。
69	野介代	のけだ	津山市・由来は、中世から近世にかけて「野の境（さかい）」＝村境や字境を表す語が変化した地名と思われ、周辺字「志戸部」との境界付近の地形や土地利用を反映した名称と思われる。
70	林田	はいだ	津山市・由来は、周囲を林に囲まれた田んぼ＝「林のある田」から生まれたとされる自然地形由来の地名と思われる。
71	八社	やさ	津山市・由来は、古代の式内社が集中する「社八社（やしろはっしゃ）」に由来し、「社（やしろ）」が転化して「やさ」となった地名
72	石島	いしま	玉野市・由来は、島全体が花崗岩質の岩山である特徴から「石の島」＝石島と表記されたと思われる。
73	迫間	はざま	玉野市・由来は、山と山や岬と岬などに挟まれ谷間や窪地を意味する地形語「迫間（はざま）」に由来する地名と思われる。
74	用吉	もちよし	玉野市・由来は、江戸時代の干拓で生まれた新田に付けられた縁起を担いだ瑞祥地名で、「土地をよく用いて吉を得る」「良い葦原＝吉原」に由来すると思われる。
75	生江浜	おえはま	笠岡市・由来は、江戸時代に干拓で新しく生まれた浜であることから「生まれた入り江（入江）の浜」＝「生江浜」と名付けられたという。寛文年間に備後福山藩が造成した新田で、入り江を干拓してできた土地という歴史が地名に反映している。
76	大亘	おおげ	笠岡市・由来は、「大きな入り江（大江）」を意味する古い地名が転訛したものと思われ、海に面した地形を反映した名称。
77	大河	おおこう	笠岡市・由来は、「大きな川（大河）」に由来し、その川筋や氾濫原

			に広がる集落や地域を指す自然地形由来の地名と思われる。多くは近くを流れる大きな河川や支流の呼称から転じたもので、古くからの水利用や洪水と結びついた歴史を背景に持つ地域。
78	押撫	おしなで	笠岡市・由来については不明ですが、昔からの村名を受継いだ地名
79	甲弩	こうの	笠岡市・由来は、古代の行政区画「甲弩郷」に由来し、奈良時代にはすでに成立をしていた地名。
80	神島	こうのしま	笠岡市・由来は、古くは島そのものが神聖視され、神が宿る島や神を祀る島と考えられたことから、「神島」と呼ばれるようになったとされる。特に笠岡市の神島では、神武天皇や菅原道真の伝承と結びつけて島名の由来を説明する説が伝わっている。
81	拓海町	たくみちょう	笠岡市・由来は、昭和40年代以降の干拓や区画整理で新たに造成された住宅や工場地域に「海を切り開き拓いた土地」という意味を込めて「拓海」と根付けたという。
82	用之江	もちのえ	笠岡市・由来は、古代の郡名「備後国」の「後（のち）」に対する「前（さき）」の意味から「用之江」が「備後国側の入江の先（前）」指したとする説が有力です。
83	出部	いずえ	井原市・由来は、古代の部民制における「出雲部」（いずもべ）が省略され、好字二文字化の政策で「出部」と表記されるようになった地名と思われる。
84	神代町	こうじろちょう	井原市・由来は、「神々の時代（神代）」に由来するとされ、古くから神を祀る聖地や神域であった事を示す名称と思われる。一般に「神代」の地名は、神話時代の伝承地や古社の存在と結びつけて名付けられた例が多く、井原周辺でも古代からの信仰や祭祀の場であった事を反映した地名と解釈されている。
85	祝部	ほおり	井原市・由来は、古代に神事や祭祀を司った職能集団「祝部（はふりべ）」由来すると思われ、彼らの居住や活動地を示す地名が残ったものと思われる。
86	刑部	おしかべ	総社市・由来は、古代の職業部民である「刑部（おしかべ）」という集団がおかれた地域に由来する。
87	清音三因	きよねみより	総社市・由来は、明治22年に、黒田・古地・軽部・三因の村が合併して「清音村」となり、その一部として三因の名が残った。
88	槁	けやき	総社市・由来については不明。
89	宍粟	しさわ	総社市・由来は、「播磨国風土記」によると、宍粟は奈良時代に宍禾の郡（しさわのこおり）として建部されたのが始まりであり、宍は肉、禾は穀物の意味なので、狩猟と農耕を表した地名となる。
90	富原	とんばら	総社市・由来ははっきりしませんが、「富」は豊かさや財物・収穫の多さを表す文字で、「原」は低い台地状の原野や開けた平坦地を指すことから、「実りが豊かな野原」といった意味合いと思われる。
91	美袋	みなぎ	総社市・由来は、高築川沿いの「水流れ（みずながれ）」が転じたものとされ「みながれ」⇒「みなぎ」と音が変化し「美袋」となっ

			たという。川の流れや川港としての性格を反映下水辺由来の地名
92	門田	もんで	総社市・由来は、集落の入口付近や城館や屋敷の門に近い田、あるいは村はずれの境界付近の田を意味する地名と思われる。
93	間之町	あいのまち	貴築市・由来は、江戸時代の岡山城下で「上ノ町」と「下之町」の中間に位置した事から、その「間（あい）」にある町という意味から名付けられた地名。
94	落合町福地	ししろ	高築市・由来は、白っぽい土が出る土地を「白地」と呼んだ事が始まりで、縁起を担いで「福地」と表記を改めたという。
95	近似	ちかのり	高築市・由来は、平安時代からあった地名で、「中世には「近似庄」とも書かれた。「近」は近いという意味で「似（則）」は傾斜地を意味する事を考えると「里に近い斜面の所」を意味する地名とも思われる。
96	御前町	おんざきちょう	高築市・由来は、近くに鎮座する御前神社（吉備津神社から勧請された丑寅御前を祀る神社）があり、その社名「御前」が町名の由来とされる武家屋敷町。
97	巨瀬町	こせちょう	高築市・由来は、古代の郷名「巨勢（こせ）郷/巨勢荘」に由来し「川瀬（瀬＝せ）」など溪谷や川沿いの地形を表す語に好字をあてた地名と思われる。
98	大瀬八長	おおせはちなが	高築市・由来は、「大瀬」は川の早瀬とか大きな瀬の意味で、いつの時代にか高瀬舟の船頭たちが付けたのか、高築川が有漢川を合流し、大瀬村付近で大きく折れ曲がって浅瀬で急流を作っている場所で、混声には松山藩が築を仕掛けていた所で、川岸には番小屋を設けていたと言う。
99	増原	ましはら	高築市・由来は、「増」は水量や土地の増加「原」は平坦地を表し「川の氾濫などで土砂が堆積して広がった原野」を意味する地形由来の地名と思われる。
100	石蟹	いしが	新見市・由来は、石が多い地形を表す「石」と、吉備津彦命が土賊「蟹梟師（かにかける）」を討伐した伝説に由来して「蟹」を合わせたとする説が有力です。石の多い土地にまつわる伝承から名付いた地名と思われる。
101	萩尾	おぎょう	新見市・由来は、萩の生い茂る尾根状の地形（丘や山の尾）を意味する自然地名に由来すると思われる。
102	神代	こうじろ	新見市・由来は、古くから神が鎮まる聖なる土地や神の時代に由来する名称とされ、近くの神社や古い伝承にちなむ地名と思われる。
103	千屋実	ちやさね	新見市・由来は、旧千屋村の一部である「実（さね）」地区が、新見市との合併時に旧村名「千屋」を冠して改称され、高築川沿いの谷底平野の中央＝村の中心部に位置する事から「千屋実」と呼ばれるようになったという。また、近くの佐根山城にちなむという説もある。
104	老栄	おいざこ	新見市・由来ははっきりしませんが、「老」「栄」を含む吉祥的な字

			を組み合わせた地名とみられ、近世以降の村名「老栄村」に由来すると思われる。
105	蚊家	こうのいえ	新見市・由来は、古くは「かや」と読み、カヤ（茅）の多い土地や、伽耶（かや）から渡来人集団に由来するという説もあり、後に「蚊家」の字が当てられた地名という。
106	豊永赤馬	とよながあこうま	新見市・由来は、鍾乳洞が多い「穴場（あなば）」が転じた地名とされ「赤馬」は「アコウマ」と読み、古くは「赤馬村」と呼ばれた地域名です。
107	麻宇那	あそうな	備前市・由来は、古くは「麻宇奈」「阿曾奈」などと書かれ、麻の栽培地や浅い湿地を意味する古語に由来すると思われる。
108	伊部	いんべ	備前市・由来は、古代の氏族「忌部（いんべ）氏」がこの地に居住し、備前焼の生産に関わったことから、その氏族名に由来する説が有力です。
109	香登	かがと	備前市・由来は、崖の下に広がる土地を意味する古語「かかと（懸処）」が転じた地名とされる説と、「草地」を意味する「カガ」に由来する説がある。いずれも古代の郷名「香止郷」にさかのぼる地名と思われる。
110	蕃山	しげやま	備前市・由来は、江戸時代前期の陽明学者「熊沢蕃山」がこの地に隠棲し、自らの号「蕃山」にちなみ、旧「寺口村」を改称させた事に由来する。
111	閑谷	しずたに	備前市・由来は、もとの地名「延原」が、閑静な谷あいの地形にちなみ「閑かな谷」を意味する「閑谷」に改称された事に由来する。
112	鶴海	つるみ	備前市・由来は、古くは浅い入江をもち海辺の地形に由来し、「鶴がいる（舞う）海」など瑞祥的な意味を込めた地名と考えられ、室町時代には「ツルミ」と記録されている。
113	日生町	ひなせちょう	備前市・由来は、古い地名「日那志（ひなじ/ひなし）」や「日成」などが転訛し、朝日がよく見える地形や干潟の景観に由来するとされている説が有力で、他に火災多発で「日（火）」と「生」を離れたという説もある。
114	寒河	そうご	備前市・由来は、冷たい水に由来するとも、溪流が多い事に由来するとも考えられる。
115	神根本	こうねほん	備前市・由来は、「神根神社のある谷の根元（谷の奥）」を意味する地形＋神社名に由来する地名と思われる。
116	牛窓町鹿忍	うしまどちょう かしの	瀬戸内市・由来は、古代の職能集団「鹿人（かのひと）」が住んだ事に由来し、その「鹿人」が転じたものとする説が有力で、他に「鹿の多い地」「鹿を狩る人」にちなむ説もある。
117	牛窓町千手	せんず	瀬戸内市・由来は、この地区の中心寺院である弘法寺の本尊の千手観音菩薩に由来する地名と思われる。弘法寺では千手観音を祀り「千住山」と呼ばれる行事や信仰が地域名と強く結びついている。
118	邑久町	おくちょう	瀬戸内市・由来は、古代の郡名「邑久（おほく）」に由来し「大き

			な区域」や入江の奥を意味する古い地名が、和銅6年（713年）の好字令で現在の二字表記「邑久」となったものと思われる。
119	尻海	しりみ	瀬戸内市・由来は、「海の奥まった場所（海の尻）」を意味する地形由来説と、古く一帯が入江や潟湖であった名残りとして「海」を含む陸地名の一種とみる説があり、いずれも古い海岸線や潟に関わる名称と思われる。
120	長船町飯井	おさふねちょう いい	瀬戸内市・由来は、古代の土器生産に関わる集団「海部・土師など」と、吉井川流域の堆積地形に根ざした生業や環境を背景に成立したと考えられ、周辺の東須恵・西須恵と共に古くからの集落名が近世以降も継承されたものと思われる。ただし「飯井」という字そのものの語源（「飯」＋「井」の具体的意味）について不明です。
121	長船町土師	おさふねちょう はじ	瀬戸内市・土師の由来は、古代に埴輪や土岐を作った技術者集団「土師部（はじべ）」が住み、良質な粘土を利用して土器生産を行った事に由来する。
122	稲蒔	いなまき	赤碧市・由来は、「稲を蒔く（まく）田んぼが広がる土地」である事を示す生業や景観由来の地名と思われる。
123	小鎌	おがも	赤碧市・由来は、山の形に似た小さな谷地形から生まれた地名とされる説が有力で、古くは「小釜」「小窪」などの表記から転じたと思われる。現在も「上・中・下」の小字に分かれている。
124	草生	くそう	赤碧市・由来は、水の多い土地に草が能く生い茂る様子から「草が生える土地」を意味して名付けられたと思われる自然地名とされ、古くは周匝川流域の一集落として中世の周郷の範囲に含まれた。
125	周匝	すさい	赤碧市・由来は、吉井川中流域の地名で、古くは川の名「周匝川」にも使われ、川沿いの集落名として中世から文献に見える歴史的地名。漢字の「匝」は「めぐる」の意味があり、川の流れや地形と関係する地名と思われる。
126	千躰	せんだ	赤碧市・由来は、仏像を「千体」安置したという信仰や伝承に由来すると思われる。
127	沼田	ぬた	赤碧市・由来は、かつてこの一帯が沼地であった地形に由来し、「沼のような湿地が広がる田（低湿地の田）」という意味から名付けられたと思われる。
128	皆部	あざえ	真庭市・由来は、古代の地方豪族に属する「部民（べのたみ）」の名に由来する地名と考えられており、「皆部郷」「皆部庄」として中世文章にも見える歴史のある地名。
129	禾津	いなつ	真庭市・由来は、「禾（いね・穀物）」＋「津（港・渡し場）」から成り、穀物を積み出す川港や船着き場に由来する地名と思われる。
130	開田	かいで	真庭市・由来は、旭川の氾濫で荒れていた土地が治水工事に寄って新たに「田を開いた」事に由来する地名。
131	鹿田	かった	真庭市・由来は、古代荘園「鹿田庄」や、更に遡る古代地名「蚊島田（鹿島田）」が略されて生まれたとする説が有力で、旭川流域

			の地形や条里制と結びついた古い地名と思われる。
132	鉄山	かねやま	真庭市・由来は、古くは鉄を産出した山た地域であった事に由来する地名と思われており、「鉄を産する山」＝鉄山という意味合いで名付けられた。
133	上砦部	かみあざえ	真庭市・由来は、「砦部（あざえ）」の上流側の集落。
134	神	こう	真庭市・由来は、多くは古くからの神社（氏神や産土神）や、延喜式内社など由緒ある社の鎮座地である事が地名の由来とされている
135	神代	こうじろ	真庭市・由来は、古くから神が鎮座する聖なる土地や神の時代に由来する名称とされ、近くの神社や古い伝承にちなむ地名。
136	富尾	とみのお	真庭市・由来は、「富（豊かさ）」＋「尾（山の尾根）や端」という一般的な定義から付いた地名と思われる。
137	小童谷	ひじや	真庭市・由来は、「深い谷」を意味する地形由来の地名とされ、旭川支流沿いの谷あい集落にちなむ名称と思われる。かつての「小童谷村」は湯原ダム建設により水没をした。
138	蒜山	ひるぜん	真庭市・由来は、「蒜（ひる＝にんにく）」が自生した山や高原を指す説と、「日（霊）が留まる山」とする信仰由来の説などがある。
139	下和	したお	真庭市・由来は、「中和（ちゅうか）」という地名が中国古典「礼記」の中の「中和」の語に由来し、その下流側・下手に位置する地域として「下和」と呼ばれるようになったという。
140	美甘	みかも	真庭市・由来は、古くは味鋤高彦根命を祀る「御鴨神社」に由来する「御鴨（みかも）」が、和銅6年（713年）の表記改めで「美甘」と書くようになったという。また、「川沿いの地形」などに由来する地形説もある。
141	英田	あいだ	美作市・由来は、古代の郡名「英田（あいだ）」に由来し、「間（あい）」を意味する古語や川の合流点を表す語に関係すると思われる。確定説はなく「アイタ/アヒタ」系の古い地名語に遡るという
142	青野	あおの	美作市・由来は、周囲を青々とした山野や草原に囲まれた「青い野原」の景観に由来する地名と思われる。中世以来の集落と神社が残る古い土地で、古くから農村集落として発達してきた。
143	猪臥	いぶし	美作市・由来ははっきりしませんが、猪（イノシシ）と「臥す（ふす）」を結び付けた民間語源が想定されるで、確定した説ではない
144	上相	かみや	美作市・由来は不明。
145	楮	こうぞ	美作市・由来は、和紙の原料となる植物の「楮（こうぞ）」が多く自生や栽培された土地である事に由来する。
146	巨勢	こせ	美作市・由来は、古代奈良の巨勢（こせ）と同様に「川の瀬（こせ）」＝川の瀬や渡し場を意味する古語に由来し、これに「巨勢」などの好字を当てたもの。奈良の巨勢氏ゆかりの地名が各地に広がった結果として、岡山にも残ったもの。
147	鯰	なまず	美作市・由来は、近くを流れる那岐川などの水辺に多い魚の「ナマズ」にちなみ、水辺の低湿地を示す地名として付けられたもの。

148	藤生	ふじゅう	美作市・由来は、山の斜面などに自生していた藤（ふじ）の木が多い土地であった事から「藤の木が生い茂る場所」という意味から付けられた地名と思われる。
149	海内	みうち	美作市・由来は、古くは「吉備の穴海」と呼ばれた内海（うちうみ）の一部が干拓で陸地化した事から、「内側の海＝内海（うちうみ）」を略した地形由来の名称と思われる。
150	美作	みまさか	美作市・由来は、和銅6年（713年）に吉備国から分立した「美作国」の名に由来し、漢字は「美しい国土やよく治まった土地」を意味すると思われる。
151	湯郷	ゆのごう	美作市・由来は、古代の郷名「塩湯郷（しおゆごう）」に由来し、さらに平安時代に慈覚大師円仁が白鷺が傷を癒す湯を見つけたという伝承から温泉地として発展し、温泉の「湯」と郷（さと）を表す「郷」が合わさった名称とされた。
152	安倉	あくら	浅口市・由来は、「馬の鞍を下りして休む場所」を意味する「安鞍（あんくら）」が転じたものとする説が有力です。
153	鴨方町本庄	かもがたちょう ほんじょ	浅口市・「本庄」の由来は、中世にこの地が荘園「津田庄」の一部であり、その中心にあたる集落として「本庄（本の庄＝荘園の本拠地）」と呼ばれた事に由来する。
154	宇生	うぶ	和気郡・由来は、旧「守屋村」と「土生村」が合併した際にそれぞれから一文字ずつ取って作られた合成地名です。宇屋は「大きい屋敷」があった事、土生は陶器用の粘土質の土がよく産出した事に由来する。
155	木倉	きのくら	和気郡・由来は、「木々のしげる谷」を意味する言葉に由来し、周囲に気が生い茂る谷地形を表した地名。
156	尺所	しゃくそ	和気郡・由来は、古代山陽道に置かれた「駅（うまや）」＝駅所があった場所の名が転じた地名とされ、もとは「駅所村」と呼ばれ中世以降に「尺所村」と表記が変わったという。
157	浅海	あすみ	小田郡・由来は、近くを流れる小田川が度々氾濫し、一帯が「浅い海」のように水浸しになった様子を表現した事が由来という。
158	矢掛	やかげ	小田郡・由来は、吉備津彦命が鬼退治の際に放った矢が現在の矢掛町付近に落ち「矢が掛かった場所」とされたという伝承が由来。
159	女原	おなばら	苫田郡・由来は、「女（おなご）」に関わる伝承や女性にまつわる信仰と、「原（はら/ばら）」＝原野や平地を組み合わせた地名と思われ、女性に関する伝説や習慣を背景にした地名とみられる。
160	久保田	くぼでん	苫田郡・由来は、一般的に「窪んだ田（低地の田）」を意味する地形由来の地名と思われ、低湿地を開発した水田地帯に多く付けられた地名です。
161	越畑	こしわた	苫田郡・由来は、山地を「越える」場所に開かれた畑地や耕地を意味する「越える＋畑」の複合地名と思われ、周囲の峠越えの地形と高地の農地景観を反映した名称です。

162	至孝農	しこうの	苫田郡・由来は、もとの地名は「四口野（しこうの）」が「至孝野（しこうの）」と表記されるようになり、さらに農業集落としての性格を示したため「農」の字が付け加えられたという。
163	貞英寺	ていえいじ	苫田郡・由来は、かつてこの地にあった雲井山貞英寺という寺院の名に由来する。寺は廃寺したが、寺名だけが地名として残った。
164	土生	はぶ	苫田郡・由来は、「土が盛り上がった場所」や「土を盛って作った場所」を意味する語に由来し、低湿地の中の微高地や、土を盛って造成下集落や田畑を指す地名と思われる。
165	石生	いしゅう	苫田郡・由来は、古代の郷名「石生郷（石生や石負）」に由来し、「石の多い土地」「石が隆起して生えるような地形」を表すという
166	上神目	かみこうめ	久米郡・由来は、古くは一帯を指した「神目（こうめ/かんのべ）」という地名があり、「神の辺（かみのべ）」＝神にゆかりのある場所や神域のほとりを意味する地名が分村して生まれた上流側の集落名
167	京尾	きょうのお	久米郡・由来は、志呂神社に供える神餅（御供）を納めた「供納（きょうのう）」が転じた地名とされる説が有力。江戸時代前期に下神目村から分村した際、この神社の神田として開かれた土地であった事と結びつけて説明されている。
168	神目	こうめ	久米郡・由来は、「神の辺（かみのべ）」＝神にゆかりのある場所や神域のほとりを意味する地名です。
169	全間	またま	久米郡・由来については不明。
170	安ヶ岬	やすがわた	久米郡・由来は、志呂神社に神餅を運ぶ途中、この岬（岬）で一行が休んだ事から「安らぐ岬」＝安ヶ岬と呼ばれるようになった。
171	打穴	うたの	久米郡・由来は、かつて盛んだった綾織物を砧（きぬた）で打ってツヤを出す作業「打ち綾（うちあや）」に由来し、この言葉が転訛して現在の地名「打穴」になったという説がある。
172	王子	おおじ	久米郡・由来は、熊野信仰に伴って各地に勧請された「王自社（王子権現）」という神社に由来し、この社の所在を示す地名として定着したと思われる。
173	大坪和	おおはが	久米郡・由来は、「坪（は）」が「広く平らな場所」や「広がる」を意味し、山間のすり鉢状に大きく開けた高原地形を表したものとおもわれ、大きく広がった坪（は）の場所」という地形由来の名称
174	書副	かいぞえ	久米郡・由来は、村の名が公的書類に書き添えられ忘れた事から「書き添え（書添）」が「書副」となったという。
175	吉ヶ原	きちがはら	久米郡・由来は、ヨシ（葦）が生い茂る低湿地の「ヨシ原」が開かれた原野となり、縁起の良い字の「吉」を当てて「吉ヶ原」と表記するようになった地名。
176	高下	こおげ	久米郡・由来は、「高い場所」とその下（川下や谷の下）」が接する地形を表す地名と思われ、「高い所の手」「高台の下側」という意味合いを持つ地名。
177	越尾	こよお	久米郡・由来は、大戸（現・柵原方面）へ「山を超えて行く尾根筋

			(尾)」に位置する事から「越す尾」＝越尾と呼ばれるようになったという説がある。
178	周佐	すさ	久米郡・由来は、中世以来の村名「周佐村」に由来する地名で、古くは「すさ」と読まれ、周辺一帯を指す郷那や村名がそのまま残っている地名。
179	角石祖母	ついしそぼ	久米郡・由来は、角石はかつて角石村を形成した名残りで、村内に角石という奇岩があった事に由来し、「祖母」は「杣（そま）」に当てられたと思われ、小字や集落名として後に付加されたという。
180	百々	どうどう	久米郡・由来は、地区の氏神である大宮神社が「二百八万歳鎮座」と伝えられた事から、その「二百」を百々」と表記したのが地名の由来とされている。神社の祭神「猿田彦神（サルタヒコ）」との関りを示す表現と解釈とされている。
181	錦織	にしこり	久米郡・由来は、古くからこの地に住んだ渡来系の泰氏が養蚕と機織り（はたおり）を行い「錦を織った土地」である事から、その職能を示す地名として生まれたという。
182	八神	ねりがみ	久米郡・由来は、古くは「祢里神」「祢利神」などと書かれ、近くの十二所権現社（多くの神を祀る社）との関係から「多くの神（八百万の神）が祀られる場所」を意味したと思われる説が有力です。
183	柵原	やなはら	久米郡・由来は、古くは鉄を産した柵原鉾山に由来し、「柵（さく＝鉾山や採掘場周辺の囲い、「原」＝その一帯の原野を指す地名と思われる。
184	飯岡	ゆうか	久米郡・由来は、「飯を盛ったような形の丘（岡）」がある事に由来する。文字通り「飯（ご飯）＋岡（小高い丘）」という地形から名付けられた地名。
185	岨谷	すわたに	加賀郡・由来は、「険しい崖や山の斜面」を意味する「岨（そわ）」と谷地形を表す「谷」が合わさり「険しい斜面を持つ谷」を指す地形由来の地名と思われる。
186	広面	ひろも	加賀郡・由来は、「広い平坦な土地（広い面＝広面）」という地形的特徴から名付けられたと思われる。



吉野ケ里遺跡の高床建物

広島県



NO	地 名	読み方	由 来
1	銀山町	かなやまちょう	広島市・由来は、江戸時代にこの一帯にあった「竹屋村」の小字「銀山」に由来し、太田川河口の城下町整備の際に町名と採用されたという。
2	幟町	のぼりちょう	広島市・由来は、江戸時代のこの一帯に「幟（のぼり）」を作る職人や幟屋が多く住んでいた事に由来し、「幟を扱う町」であった為「幟町」と呼びようになったと思われる。
3	薬研堀	やげんぼり	広島市・由来は、広島城の外堀の一つが薬を砕く道具の「薬研」

			に似たV字型の断面をしていた事から、その堀を〈薬研堀〉と呼んだ事が由来です。また、周辺に医師や薬屋が多かった事にちなむという説もある。
4	温品	ぬくしな	広島市・由来は、古くは「温科」や「温品」などと書かれ、中世には港や市が立つ海辺の低湿地であった事から「暖かい入り江や潟」を意味する古い言葉に由来すると思われる。
5	戸坂	へさか	広島市・由来は、古くは鎌倉時代の文書にも見える古い地名で、古代山陽道沿いに開かれた集落（戸）と坂道の地形に由来する説と、武田氏家臣「戸坂氏」にちなむという説もある。
6	猿猴橋町	えんこうばしちょう	広島市・由来は、猿猴川に架かる「猿猴橋」の名に由来し、その猿猴橋は周辺にいたとされる猿「猿猴＝猿や河童などの水辺の妖怪」にちなむという。
7	大河	おおこう	広島市・由来は、太田川水系の支流がつくる大きな谷筋や川筋に由来し、「大きな川（谷）」を意味する地形名から生じた地名。
8	大須	おおず	広島市・由来は、浅瀬を意味する「大洲（おおず）」という話が元になり、それが「大須」と書き表されるようになったという。また、この地を領していた「大須氏」の名に由来する説もある。
9	東雲	しののめ	広島市・由来は、昭和13年の町名制定時に「夜明け前の東の空（東雲＝しののめ）」を意味する古語から名付けられたとされ、地形や旧村名ではなく、明るい未来や新しい時代の到来をイメージした文学的地名。
10	似島	にのしま	広島市・由来は、島北部の山「安芸小富士」が富士山に似た姿をしている事から「富士山に似た山のある島」＝「似島」と表記されるようになったという。古くは「見の島」「簑島」など様々な表記があり、現在の「似島」となった。
11	向洋	むかいなだ	広島市・由来は、かつて広島湾に浮かんでいた小島が「海（洋）」の方へ向かった場所」という地形的特徴から名付けられ、埋め立てで陸続きになった後もその島名が地名として残ったという。
12	己斐	こい	広島市・由来は、神功皇后に献上された大きな鯉を喜んで「鯉村」と呼んだ事が転じ「己はあやに美しい」という意味を込めて「己斐」と表記するようになったという説と、古い文献に見える「鯉村」表記からの転訛説などの説がある。
13	三篠	みささ	広島市・由来は、太田川の支流「三篠川（みささがわ）」及び太田川の別名「御篠川（みささがわ）」に由来するとされ、水辺の地形と古い川名から生まれた地名と思われる。
14	宇佐町飯室	うさまちむろ	広島市・由来は、中世まで存在した「飯室村」に由来し、古くからの村名をそのまま継承した地名です。語源ははっきりしませんが、「氷室（ひむろ）」が変化した可能性などがある説もある。
15	宇佐町小河内	おがうち	広島市・由来は、太田川本流から分かれた小さな支流で谷を刻んだ場所で、その内側にある土地一帯を小河内と呼ぶようになった

16	可部町桐原	かべちょうとげ	広島市・「可部」の由来は、「漢弁」から可部川に沿う町として、「可部」に転じた説が有力で、「桐原（とげ）」の由来は、古くは「戸毛」とも書き、熊谷氏家臣の「桐原備前守」の屋敷跡が地域内にあり、これにちなむという。
17	可部町南原	なばら	広島市・由来は、可部山の南方に広がった原っぱの村が由来。
18	湯来町白砂	ゆきちょう しらさご	広島市・由来は、海岸の砂が白砂なので、元は白須村と呼ばれていたという。
19	湯来町葛原	つづらはら	広島市・由来は、桓武天皇の子の「葛原（かづらわら）親王」に由来するという。桓武平氏の祖として知られ、平将門や平清盛の祖といわれる。
20	警固屋	けごや	呉市・由来は、平清盛が音戸を開削した際に設けた「食小屋（けごや）」や見張り小屋に由来し、その後、毛利氏がこの地に警固の武士を置いたことから「警固屋」という字が当てられたという。
21	豊浜町齊島	とよはまちょう いつきしま	呉市・由来は、周囲の海「齋灘（いつきなだ）」と同様に、神に仕える・齋（いつ）く＝神聖な場としての島」を意味する語源から来たと思われ、古くから祭祀と結びついた名称とされる。
22	安浦町内海	やすうらちょう うちのうみ	呉市・由来は、瀬戸内海の内側にある「内なる海」＝内海という地形的特徴をそのまま表した名称とされ、陸地に囲まれた穏やかな海域を指す一般名詞「内海」に由来する。
23	吉浦潭鼓町	よしうら たんこちょう	呉市・由来ははっきりしませんが、平氏の落人が自らの運命を悲しみ打った鼓の音が「タンゴタンゴ」と響いたことから名が付いたという伝承がある。
24	忠海	ただのうみ	竹原市・由来は、平清盛の父の平忠盛がこの地を開いた際、自らの名「忠」と瀬戸内の「海」を合わせて「忠海（ただのうみ）」と名付けたという説がある。
25	久井町苅原	くいちょうあぞ うばら	三原市・由来は、谷状の地形にアザミ（苅）が多く生えていたことから「苅（あざみ）の原（はら）」＝苅原と呼ばれるようになったという説がある。
26	幸崎町	さいざきちょう	三原市・由来は、海に突き出た岬状の地形を表す「崎」と、豊漁や安全を願う「幸」を合わせた「さいざき（幸いな岬）」という意味に由来する。
27	姥ヶ原	うばがはら	三原市・由来ははっきりしませんが、一般的には「姥（年老いた女性）＋「原（原野）」から、老女にまつわる伝承や墓所や隠棲地などを連想される地名。
28	高坂町許山	たかさかちょう もとやま	三原市・由来は、野見山や野美山と起源を一緒とする説がある。
29	沼田	ぬた	三原市・由来は、低湿地や沼地状の田んぼ（沼のような田）を指す古い地形語「沼田（ぬた/ぬまた）」に由来すると思われる。
30	八幡町垣内	やはたちょう かいち	三原市・由来は、家屋やその周囲の畑や林などを垣で囲んだ私有地（小さな集落や耕地）を指した古い言葉が地名化したもの。

3 1	八幡町篝	かがり	三原市・由来は、山の見張りや合図の火「篝火（かがりび）」を焚いた場所に由来する地名と思われる。
3 2	八幡町美生	みのう	三原市・由来は、中世以来の村名「美生村」に由来し、「美生」の意味は「美しく生まれる」などと地形や開発史との関係がある。
3 3	因島	いんのしま	尾道市・由来は、「因（いん）」という古い地名や氏族名に「由来し、古くは「伊怒島」「伊乃島」などと書かれたものが転化して現在の「因島」となったという。中世は「村上水軍」の拠点として知られた。
3 4	因島洲江町	すえのちょう	尾道市・由来は、海に突き出た砂洲や浅瀬（洲）と、そこに入り込む入り江の地形を表した地名で、砂洲状の海岸線と入江のある場所を意味する呼び名と思われる。
3 5	因島外浦町	とのうらちょう	尾道市・由来は、島の外海側に開いた入り江（外側の浦）を指す地形由来の地名と思われる。瀬戸内海沿岸では、内側の静かな湾を「内浦」、外海に面した湾を外浦と呼び分ける例が多く、因島外浦町もその一つ。
3 6	因島中庄町	なかのしょうち ょう	尾道市・由来は、中世に因島一帯にあった荘園「因島庄」のうち島の中央部に位置する区画＝「中の庄（中庄）」を指した地名が由来という。荘園制の時代からの歴史的な地名が残ったもの。
3 7	因島土生町	はぶちょう	尾道市・由来は、「土生（はぶ）」の意味は「土が盛り上がった場所」「新しく生まれた土地」を意味する語に由来するとされ、港の発達とともに因島南部の中心集落として広まった地名。
3 8	因島三庄町	みつのしょうち ょう	尾道市・由来は、中世に因島にあった荘園「三津庄（みつのしょう）」に由来し、その名が近世以降も受け継がれた地名。
3 9	因島棕浦町	むくうらちょう	尾道市・由来は、海岸に自生していた棕（むく）の木が多い入江（浦）であったことから「棕の浦」＝「棕浦」と呼ばれるようになったという。「棕」はニレ科の落葉高木で、日本各地に自生。
4 0	尾道	おのみち	尾道市・由来は、ほとんど平地がなく、山の尾根に沿って続く細長い町で「尾の道」と呼ばれた事が由来という。
4 1	十四日町	とよひちょう	尾道市・由来は、町の長さ一町五間、昔は叶屋（かのうや）小路と胡（えびす）小路の間の空地で、毎月一四日に市が開かれた為「十四日市町（じゅうしんいちまち）」と言ったものを「十四日町（じゅうしんちょう）」と称するようになり「十四日（とよひ）町」となったという。
4 2	御調町	みつぎちょう	尾道市・由来は、「御調（みつぎ）」は古代律令制下で租税として中央に納めた「調（みつぎもの）」に由来し、朝廷への貢納地・建貢納川であったことから名付けられたと思われる。
4 3	御調町白太	はかた	尾道市・由来ははっきりしませんが、漢字から「白く太い木材（白太）」や「明るく開けた谷や斜面」を連想される語源の地名。
4 4	芦田町柞磨	あしだちょう たるま	福山市・由来は、「柞（ははそ＝カシ類）」の多い場所を意味する古語と、山の斜面や谷間を表す「マ（間）」が合わさり「柞の木の

			多い谷や斜面」を指す地名と思われる。
4 5	伊勢丘	いせがおか	福山市・由来は、昭和 40 年代以降の宅地造成時に新しく付けられた地名で、古くからの由緒や神社名は見当たらない。
4 6	駅家町法成寺	えきやちょう ほうじょうじ	福山市・由来は、平安中期に藤原道長が京都に建立した寺院「法成寺」にちなみ、同寺に関する荘園や勅使田が置かれた事からその名称が地名として定着したもの。
4 7	駅家町万能倉	まなくら	福山市・由来は、古代山陽道が通り、多くの倉庫があった事からこの地名になったと思われる。
4 8	神島町	かしまちょう	福山市・由来は、由来は、福山城下の南東部に形成された町人町「神島町」がもとで、城下町の町名として成立した歴史的地名とされ、神社由来説や島状地形由来説もある。
4 9	神村町	かむらちょう	福山市・由来は、日本書紀に見える元伊勢「名方浜宮」で天照大神を祀った地とされる伝承にちなみ、神を祀る村＝神村と呼ばれるようになったという。
5 0	神辺町道上	かなべちょう みちのうえ	福山市・由来は、古代に有無だった「穴の海」の北縁を通る古道（山陽道など）の「道の上手側（道より高い位置）」にある集落である事から「道の上」＝「道上」と呼ばれるようになったという
5 1	神辺町八尋	やひろ	福山市・由来は、古くは安那郡粥田庄の「八尋郷」「八尋村」として見える歴史的地名で、「八尋＝長さや広さ」を表す古語に由来し神辺平野東部の広がった土地を示す地名と思われる。
5 2	新市町相方	しんいちちょう さがた	福山市・由来ははっきりしませんが、寛文年間（1664 年）以降に福田村から分村して出来たと思われる。
5 3	瀬戸町山北	せとちょう さぼく	福山市・由来は、世知地域の山地の北側に位置する事から付いたと思われる。
5 4	沼隈町中山南	ぬまくまちょう なかさんな	福山市・由来は、「中山」という山の南側に位置する集落であることから「中山南」と名付けられたという。
5 5	水呑町	みのみまち	福山市・由来は、町の西側にある熊ヶ峰の岩盤が不透水層となり、山麓から湧き水が出て人々が「水を呑む場所」として利用した事に由来する。この湧き水は古くから名水として有名です。
5 6	水呑向丘	むかいがおか	福山市・由来は、水呑村に向かい合う丘陵地である事から付いた地名。
5 7	御幸町森脇	みゆきちょう もりわけ	福山市・由来は、山麓の森林の「森」と、山の端や谷の端を意味する「脇」が合わさり「山の森の端（ふち）にある集落」を表す地形由来の地名と思われる。近くの吾妻山南麓に広がる原生林的な森と谷地形の境界に位置する事から、このような地名となった
5 8	上山町	うやまちょう	府中市・由来は、中世以来の「上山村（うやまむら）」に由来し、芦田川左岸の台地上にある「川より上手の山地（上の山）」を指す地形名が元になったと思われる。
5 9	河面町	こうもちょう	府中市・由来は、芦田川沿いの村「河茂（かわしげ）」と記された川辺の集落が、のちに「川面（こうも/かわも）」と表記されるよう

			になったのが由来という。
60	上下町階見	じょうげちょう しなみ	府中市・由来ははっきりしませんが、古くは「階見村」と書かれた山間の集落名で「段々の斜面や階上の地形を見下ろす場所」を意味する地形由来の地名と思われる。
61	父石町	ちいしちょう	府中市・由来は、「石の多い土地で、石に育てられるように農民が暮らしてきた」という意味合いから名付けられたと思われる。
62	土生町	はぶちょう	府中市・由来は、一般に「土のままの土地」や「自然のままの土地」が語源とされる「土生（はぶ）」という古い地名要素に由来
63	行滕町	むかばきちょう	府中市・由来は、江戸時代の村名「行滕村（むかばきむら）」に由来し、その名はさらに古い呼称「むかはき」「牟加波幾」などが転じて、山の形を「行滕（脚絆・きゃはん）」に見立てた当て字と思われる。
64	海渡町	うとまち	三次市・由来ははっきりしませんが、近世文書に「うと村」と仮名と記され、古くから「うと」と呼ばれた村名が近代以降に「海渡」の字を当てて「海渡町」となったと思われる。
65	吉舎町	きさちょう	三次市・由来は、律令時代に皇后の直轄地とされた「私部（きさいべ）」が「私市（きさいち）」となり、その略称が転じたものとする説が有力です。
66	吉舎町雲通	うづい	三次市・由来は、江戸初期の史料に「薄井村」と書かれた村が後に「雲通村」と表記されるようになったもので、古くは「うすい/うづい」と読まれたものと思われる。川沿いの山村としての景観から「雲」「通」の字が当てられたと見られる。
67	甲奴町小童	こうぬちょうひち	三次市・「小童（こわっぱ/こどもでない）」の地名は、古くは「ひち」と読まれた地名で、後世「小童」という当て字をあてたことに由来するとされ、特に「小童（こわらべ）」が現れた」という伝承に基づく説がある。
68	作木町門田	さくぎちょう もんで	三次市・由来は、集落や屋敷の「門」に近い田、あるいは村の入り口付近の田んぼを指した事に由来する地名と思われる。
69	三好町	みよしちょう	三次市・由来は、三つの川が合流する盆地に位置する事や、古代の郡名「三好郡」に由来するとされ、「水が寄る＝水寄」が転じたという説など複数の説がある。
70	廻神町	めぐりかみまち	三次市・由来は、神がこの地を巡ったという伝承に由来し、「知波夜比古神」が最初に当地に降臨し各地を転々としたのち隣接する高杉へ遷座したため「廻神（めぐりかみ）」と呼ぶようになった。
71	雨蓮	あめつら	庄原市・由来については不明。
72	口和町金田	くちわちょう きんで	庄原市・由来は、一般的には「金（かね）」のように価値の高い良田や水田を意味する字義から、「肥沃で実りの多い田」を表す地名と思われる。
73	実留町	さねどめちょう	庄原市・由来ははっきりしませんが、近世以降に成立した農村で豊作の願いと収穫を留める村として付いた地名と思われる。

74	奥門田	おくもんで	庄原市・由来は、「門田」と呼ばれた一帯のうち山側の奥まった田地を指す区画名から生じた地名と思われる。
75	風防地	たらんち	庄原市・由来は、古くは「多良内」「多良地」などと書かれた地名が転訛し、現在の「風防地」という字が当てられたもの。
76	吨田	どんでん	庄原市・由来については不明。
77	比和町木屋原	ひわちょう こやばら	庄原市・由来は、木材を扱う「木屋」や木材の置き場と、平坦な原野を意味する「原」が合わさり「木材に関わる屋敷や作業場があった原野」という地形・生業由来の地名と思われる。
78	三河内	みつがいち	庄原市・由来は、「三つの「河内（かわち/こうち）＝川沿いの低地や谷あいの土地」が集まった場所」という地形に由来する地名と思われる。
79	螻野	まての	庄原市・由来は、川や湿地に多い二枚貝「螻（まて）」が生息する「野原」を意味し「螻の多い野＝螻野」と解釈される説がある。
80	穂仁原	おにはら	大竹市・由来ははっきりしませんが、字の組み合わせから「穀物の穂が実る原野」や「仁（人名・字名）に関わる原」などが想像される地名。
81	木野	この	大竹市・由来は、小瀬川（旧・木野川）流域の河岸低地に広がる集落で、川の名「木野川」に由来する地名と思われる。
82	比作	ひつつくり	大竹市・由来については不明。
83	油見	ゆうみ	大竹市・由来は、近世に成立した村名「油見村」に由来し、その名は「湯見（ゆみ）」と書かれた温泉見物の地名が転訛したとする説がある。
84	黒瀬町市飯田	くろせちょう いちいだ	東広島市・由来は、中世以来の「市（いち）＝市場」と水田地帯を意味する「飯田（いいだ/いだ）」が結びつき「市場のある田（田地）」を表す地名と思われる。
85	乃美尾	のみのお	東広島市・由来は、「乃美」という古い地名（乃美郷・乃美村）と山の尾根や谷の奥を示す「尾」が合わさった地名で、周辺の乃美氏や乃美郷に由来する山間の集落名と思われる。
86	助実	すけざね	東広島市・由来は、中世以来の村名「助実村」に由来し、個人名「助実（すけざね）」とみられる人名起源の古い地名。
87	七条栴坂	しちじょうかぶ さか	東広島市・由来は、元は「樺坂」と書かれ、カバノキ（樺）の多い坂や丘陵地を意味する地名が、後に「栴」の字をあてて現在の表記となった。
88	豊栄町安宿	とよさかちょう あすか	東広島市・由来は、中世から見える「安宿村」「安宿郷」などの古い行政地名を受け継いだ地名で、「安らかに宿る場所」や「落ち着いて泊まる所」といった意味合いを持つ漢字をあてた都名。
89	福富町久芳	ふくとみちょう くば	東広島市・由来は、古代の郷名「訓芳（くば）郷」に由来し、「くわ（桑）」に「芳」をあてた地名が中世以降「久芳」と表記されるようになったとされる。
90	飯山	いいのやま	廿日市市・由来は、「飯（米や食料）」と「山」という字義から、

			稲作や食糧と結びついた山や集落を表す地名と思われ、全国の同地名と同様に豊かな農耕地や糧食供給の場としての性格が反映した地名と思われる。
91	大野鴉ヶ岡	おおのからすが おか	廿日市市・由来は、由来は、鴉（カラス）が多く集まる岡（丘）であることから「鴉ヶ岡」と呼ばれるようになったと思われる。
92	平良	へら	廿日市市・由来は、平安時代に「種篋（たねら）」と書かれた古い地名が変化し「平らの土地」を意味する語感と結びついて現在の「平良」になったという。
93	廿日市	はつかいち	廿日市市・由来は、中世以来この地で毎月20日に開かれていた「廿日の市（はつかのいち）」という定期市が立った事に由来し「二十日（はつか）＋「市（いち）」が合わさって「廿日市」という地名になった。
94	甲田町稼地	こうだちょう すくもじ	安芸高田市・由来は、「稼（すくも）＝糠（ぬか）やもみ殻などのカス」と「地（じ）」を合わせ、「糠やもみ殻などを捨てたり集めたりした土地」を意味する地名と思われる。
95	美土里町生田	みどりちょう いけだ	安芸高田市・由来は、「いく（幾・生）」「多く・豊か」を「田」が水田を表し「豊かな田んぼのある土地」という意味合いから生まれた地名と思われる。西日本各地に見られる「生田や幾田」系の古い地名と同系統で、古くからの農耕地を示す地名。
96	八千代町土師	やちちょう はじ	安芸高田市・由来は、古代の職能集団「土師部（はじべ）」に由来し、土器づくりや葬送儀礼を担った土師氏一族の居住や所領地であったことから名付けられたと思われます。
97	相合	あいおう	安芸高田市・由来ははっきりしませんが、漢字の意味から「お互いに会う・交わる場所」を表す地名と思われる。
98	鹿川	かのかわ	安芸高田市・由来は、元は鹿が群生していたことから「鹿皮村」と書かれ、のちに「鹿川村」と改められたと思われる。
99	鹿籠	こごもり	安芸郡・由来は、宮島の鹿が海を渡ってこの地で子を産み「鹿がこもる場所」とされたという伝承に由来する地名と思われる。
100	水分峡	みくまりきょう	安芸郡・由来は、古くから水の分配や配分を司る神を祀る「水分（みくまり）神社・水分神」に由来し、「水を分け与える峡谷」という意味とされる。
101	山県	やまがた	山県郡・由来は、古代の郡名「山県郡」に由来し、「山の多い地域（山間の土地）」を意味する地名と思われる。山々に囲まれた安芸国北部の地形を表した地名です。
102	遊谷	あぞうだに	山県郡・由来ははっきりしませんが、川床がたびたび変化した跡や複雑な地形に関係した地名と思われる。
103	猪山	いのしやま	山県郡・由来は、かつてこの周辺に「イノシシ」が多く生息した山や土地であったことから「猪（イノシシ）のいる山」という意味で付けられたと思われる。
104	柴木	しわざ	山県郡・由来は、山林で薪や柴を採取した場所を指す地形や土地

			利用に由来する地名と思われる。中世には戸河内村の一集落名として現れ、周辺の山地集落とともに山林資源と結び付いた地名。
105	横川	よこごう	山県郡・由来は、太田川の支流が本流に対して横向きに流れていた「横川」という川の名に由来し、その川沿いの町として「横川町」と呼ばれるようになったという。
106	雲耕	うずのう	山県郡・由来は、古くは「うつほの村」「うつふ原村」と呼ばれた地域に後から「雲耕」の字をあてた地名で、古名の音に合わせた当て字と思われる。
107	移原	うつのはら	山県郡・由来ははっきりしませんが、山間の村で、南側に開けた地形から「移住して開いた原野」や「移り住んだ原」などを連想される地名です。山林と農業を主とする山間の村。
108	才乙	さよおと	山県郡・由来は、古くは「才乙村」と呼ばれた山間の集落名で、語源ははっきりしませんが、川名や小字名など古い地名に由来。
109	舞網	もうつな	山県郡・由来については不明。
110	丁保余原	よおろほよばら	山県郡・由来は、旧「丁」と「保余原」という二つの村が合併して出来た地名。
111	鮎崎	めばるざき	豊田郡・由来は、瀬戸内海でよく獲れる魚「メバル（鮎）」と岬や崎を意味する「崎」が合わさり「メバルが多い岬」を表す地名。
112	田打	とうち	世羅郡・由来は、「田の内側や田の中の集落」といった地形や土地利用を表す語から生じた地名。
113	階見	しなみ	神石郡・由来は、古くは「階見村」と書かれた山間の集落名で、「段々の斜面や階状の地形を見下ろす場所」を意味する地形由来の地名と思われる。
114	李	すもも	神石郡・由来は、「スモモ」の木や実に由来する地名。
115	田頭	たんどう	神石郡・由来は、中世の有力農民「田堵（たと・たど）」を表す「田頭・田刀」に由来する地名と思われる。田の上手や田の先端という地形的な意味もある地名。



山口県



NO	地 名	読み方	由 来
1	内日	うつい	下関市・由来は、「内」は山間の奥まった所「日」は谷や水の流れを指す古語とされ、山々に囲まれた盆地状の地形を表した地名。現在も鬼が城などの山に囲まれた盆地であることから、地形由来の地名と思われる。
2	阿内	おうち	下関市・由来は、古くは「阿内村」と呼ばれた集落名に由来し、地域は「凹地」で、神田川の上流域の中国山地の中のへこんだ地域から付いたと思われる。
3	員光	かずみつ	下関市・由来は、中世の荘園名「員光保(かずみつほ)」に由来した地名「かずみつ」に縁起の良い漢字の「員」と「光」を当てた字地名と思われる。
4	菊川町轡井	きくかわちょう くつわい	下関市・由来は、馬具の「轡(くつわ)」と「井戸(井)」にちなみ、馬の水飲み場や馬つなぎ場に関わる地名とみなす説が有力。
5	樅ノ木	もみのき	下関市・由来は、かつてこの地に「樅(もみ)」の大木があった事に由来するとされ、「樅木村」と呼ばれた旧村名が小字が残った。
6	特牛	とっこう	下関市・由来は、古くは「ことい」と読み「牝牛(めうし)」を表す方言や、強い牛を意味する語に由来する説が有力ですが、小

			な入江を表す「琴江」が転じたとする説など複数ある。
7	木屋川	こやがわ	下関市・由来は、川沿いに多くあった木材置き場や木材を扱う小屋（木屋）に由来すると思われる「木を扱う小屋のある川」＝木屋川とする説が有力です。
8	豊田町手洗	とよだちょう たらい	下関市・由来は近くを流れる手洗川の名に由来し、川名から集落名・旧村名「手洗村」として広がったと思われる。
9	奎路子	むくろじ	下関市・由来は、和泉式部がこの地に「むくろじ（無患子）の木」の枝を挿し、それが根付いたという伝承に由来する。
10	八道	やじ	下関市・由来は、古くは「谷地（やち）」と書かれた湿地帯を指す地名が転訛し「八道」の字が当てられたという説が有力です。
11	南部町	なべちょう	下関市・由来は、中世にこの地を本拠地とした武士団「南部氏」の居館「南部城」に由来し、その城下町として発達したことから「南部」と呼ばれるようになった。
12	岬之町	はなのちょう	下関市・由来は、海に突き出た岬状の地形（＝「岬/はな」）に由来し、その岬にある町という意味から名付けられた地名。
13	蓋井島	ふたおいじま	下関市・由来は、神功皇后が三韓征伐から帰途に島の「水の池」と「火の池」という二つの井戸の水をほめ、その井戸を蓋で覆わせたことから「蓋井島」と呼ぶようになったという。
14	吉見古宿町	よしみこずく ちょう	下関市・由来は、古くからの宿場集落「吉見の古い宿（こじゅく）」があったことに由来する地名と思われる。
15	豊北町田耕	たすき	下関市・由来は、中世から見える「田耕村」という村名に由来し、「田を耕す土地や集落」を意味すると思われる。
16	櫟原	いちいばら	宇部市・由来は、クヌギなどを意味する「櫟（くぬぎ）」と、原野を表す「原」が合わさり「クヌギの多い原野や林」を意味する地名と思われる。古くは、厚東川沿いの農村で、周辺の埴生や地形を反映した自然地名。
17	檜小野	うつぎおの	宇部市・由来は、「檜（うつぎ）」という落葉低木が多く生えていた「小野（小さな野原）」を意とする地名で、「檜の多い野」を表した地名と思われる。
18	吉部	きべ	宇部市・由来は、中世から見える阿武郡吉部郷・吉部村などに由来し、「防長風土注進案」に引用された伝承では、「高佐村から分かれた際に土地が良かったため「よき土地」の意を込めて「吉部」と名付けたという。
19	厚東	ことう	宇部市・古くは、厚狭郡の「東側の地域」を指した事と、この地を本拠とした中世武士団の厚東氏の本拠地であった事に由来すると思われる。
20	矢矯	やはぎ	宇部市・由来は、元々「矢萩」などの別字表記だったものが、元禄期に「矢矯」となったと思われる。ただし「矯（はぎ）の字義（まげる・なおす）と土地の形状や伝承を結び付けた説は、公的資料は確認できない。

21	秋穂	あいお	山口市・由来は、古くは「秋穂庄」と呼ばれた中世の荘園名に由来し、塩の生産地として栄えた歴史的地名が現在まで受け継がれたもの。
22	阿知須	あじす	山口市・由来は、古くは「阿知須浦」と呼ばれた山口湾沿いの入江や港町に由来し、湾奥の浅い入江（アシ・アジ）を表す古い言葉が転訛した地名とされる説が有力です。中世には文献に現れ、近世以降は港町や干拓地として発展した。
23	生雲	いくも	山口市・由来は、八幡社の創建時に「生きた雲のような紫雲が山にたなびいた事からこの山を「生雲山」里を「生雲の郷」と呼び、のちに村名となったという説がある。
24	嘉年	かね	山口市・由来は、元の地名は「川根（かわね）」の川を省き、阿武川の「川の根（河根）」に由来するとされ、のちに縁起の良い字を当てて「嘉年（かね）」と表記するようになったという。
25	陶	すえ	山口市・由来は、古代からこの地で須恵器等の陶器生産が盛んで、多数の窯跡である事に由来するとされる。朝鮮半島から伝わった製陶技術を背景にした工業地帯で、地名がその歴史を今に伝わる。
26	鑄銭司	すせんじ	山口市・由来は、奈良～平安時代にこの地に置かれた官営の貨幣鑄造所「鑄銭司」で銅銭「皇朝十二銭」などを鑄造していた事に由来する名称です。
27	周布町	すふちょう	山口市・由来は、長州藩士の周布政之助の姓「周布」に由来し、その功績を記念して一帯の地名とされた。
28	徳地柚木	とくじゆのき	山口市・由来は、古くは「湯ノ木」や「由木」などと表記され、温泉や湧水に関する「湯（ゆ）」や、谷あいの湿地に生える木立を指す語に由来すると思われ、周辺の谷地形と古い信仰の場「柚木神社」と結びついた地名。
29	八幡馬場	やはたのばば	山口市・由来は、今八幡宮（八幡神を祀る神社）と、その門前に設けられた馬場（馬の練習や競馬の場）に由来すると思われる。近世以降、神社名の「八幡」と施設名の「馬場」が結びつき、周辺一帯の小字名や町名として定着したと思われる。
30	吉敷	よしき	山口市・由来は、古くは「葦（よし）」が生えている湿地を「葦敷（よししき）」と呼んだ事が転じたとする説が有力で、「吉」の字はのちに縁起を担いで当てられたと思われる。
31	飯井	いい	萩市・由来は、「飯（稲や米）」と「井（湧き水や井戸）」に由来し稲作に適した水の得られる土地を意味する地名と思われる。
32	御許町	おもとまち	萩市・由来は、萩城下の武家地にあった町で、城下町の一角として整備した際に、「御許（おもと）」という尊敬語を含む名が付けられたと思われる。
33	紫福	しぶき	萩市・由来は、近くの鍋山をキリシタンたちが「至福（しふく）の丘」と呼んだ事から、その「しふく」が訛って「しぶき（紫

			福)」になったとする説が有力です。
34	椿東	ちんとう	萩市・由来は、古くから椿が多く自生した「椿」地区の東側に位置する事から「椿の東＝椿東」と呼ばれるようになったという。
35	土原	ひじわら	萩市・由来は、「土の原（つちのはら）」を意味する古い地形語が転じたものと思われる。
36	平安古町	ひやこまち	萩市・由来は、かつてこの地にあった池「ひやこ」に「平安湖」の字を当てた事から生まれた地名とされる説がある。
37	迫戸町	せばとちょう	防府市・由来は、「山が迫る入り口（戸）」という地形を表した地名とみられ「山が迫る戸口＝迫戸」に由来する説が有力。
38	富海	とのみ	防府市・由来は、「外（との）海（とのみ）」が転じたとする説が有力で、瀬戸内海の外海側の海辺を指した呼び名が地名になったという。中世文書にも「富海」の表記が見える、古くからの港町。
39	鞠生町	まりふちょう	防府市・由来は、古くは「万里布」「万里生」などと書かれ、瀬戸内海航路の要地として「万里に通じる港・入江」を意味したとする説が有力です。
40	牟礼	むれ	防府市・由来は、古くは「群れ」「群（むら）」に通じる語から生じたとされ、集落が群がる地形や景観を表した地名と思われる。
41	下谷	くだたに	下松市・由来は、谷の下側に位置する低地や谷底の集落である事を表す「地形由来の地名」とと思われる。
42	下松	くだまつ	下松市・ゆらいは、推古天皇の頃に松の下に星が降りたという「降星（流星）」伝説に由来し、「星が降（くだ）った松＝降りた松」が転じて「下松」になったという。
43	温見	ぬくみ	下松市・由来は、古くは「怒久見」などと書かれ「暖かい・温い場所（谷や湧水）」を意味する古い語形が転じて現在の表記になったと思われる。
44	青木町	おおぎまち	岩国市・由来は、江戸時代に成立した「青木村」に由来し、その「青木村」は真言宗寺院「青木山養福寺」の名を取って付けられたという。もとは「円行寺原」と呼ばれた松林の新開地です。
45	獺越	おそこえ	岩国市・由来は、「カワウソ（獺）」が人に化けて子供をだましたという伝承に由来する地名とされ、「獺が越えた場所」や「獺を越す所」という意味を持つと思われる。
46	通津	つづ	岩国市・由来は、「海上交通がよく通う入り江や港」を意味する「通う津（つたうつ/かようつ）がちじまり「通津（つづ）」になったと思われ、古くから海運や漁業の港として栄えた歴史を反映した地名。
47	天尾	てんのお	岩国市・由来は、「天（あま）」＋「尾（お）」という地形語から成り、山の尾根や尾状の地形が天に伸びるように見える事に由来する地名と思われる。
48	錦見	にしみ	岩国市・由来は、錦川を望む位置にある事から「錦（にしき）川を見渡す土地」という意味で名付けられた地名。

49	甘木	はたき	岩国市・由来は、熊野権現を祀る際に山から二十本の木を伐り出して社を建てたことから、「二十本の木」＝「甘木」と呼ばれるようになったという。
50	土生	はぶ	岩国市・由来は、古くは「埴生（はにふ）」と書かれた「粘土の産地・粘土のある土地」を意味する語が転訛して「土生」と表記されるようになったと思われる。
51	藤生町	ふじゅうまち	岩国市・由来は、かつてこの地の長者屋敷に見事なフジ（藤）の木が生えていた事に由来する。藤の木が多く生えていた土地柄を示す「藤生」の地名が、現在の藤生町になった。
52	四馬神	しめがみ	岩国市・由来は、集落近くにある「四馬神岩（しめがみいわ）」と呼ばれる大岩を神として祀った事に由来とされ、この岩の名から村名が生じたという。
53	南桑	なぐわ	岩国市・由来は、中世には河内郷の一部として「南桑」と記録され、のちに独立した村となったという歴史的地名ですが、語源については明確な説は不明。
54	海土路町	みどろまち	岩国市・由来は、古くは「海土路村」と書かれた村名が近世から見られるものの、語源については不明。
55	渋前	しぶくま	岩国市・由来は、中世以来の街道沿いの集落名で、石洲街道の市が立った場所に由来する地名。
56	中垣内	なかがうち	岩国市・由来は、「垣（かき）」で囲われた私的な耕地や屋敷地＝垣内の中ほどにある集落や土地を指す地形由来の地名。
57	日宛	ひなた	岩国市・由来は、「日当たりの良い場所」や「日がよく当たる山裾や谷あい」といった地形的特徴を表す和語「ひなた（日向）」が漢字表記されたものと思われ、古くから集落名として用いられた。
58	牛島	うしま	光市・由来は、平安時代に「垣島牛牧」として牛の放牧地だった事から「牛島」と呼ばれるようになったという説がある。現在の島内には、牛にまつわる「丑森明神」の伝承などが残り、牧場の島だった歴史をうかがわせる。
59	束荷	つかり	光市・由来は、修行の身である僧侶が地名を尋ねたところ「ここは綿の荷を束ねる所です」と答えられた事に由来する説がある
60	日置	へき	長門市・由来は、古代の職能集団「日置部（へきべ）」の居住地に由来する説が有力。他に太陽や暦との関係を指す説もある。
61	伊陸	いかち	柳井市・由来ははっきりしませんが、「伊」と「陸」の字義からの当て字や古い地名の転訛と推測される地名。
62	伊保庄	いほのしょう	柳井市・由来は、平安時代に京都の加茂社（上賀茂神社）の荘園として成立した「賀茂社領の荘園名」であり、地名中の「イオ（伊保）」は魚を意味する古語に由来すると思われる。
63	青景	あおかげ	美弥市・由来は、鎌倉幕府の御家人でこの地の地頭となった青景氏（藤原秀通の子孫）が居住し、その苗字が地名となったという
64	厚保	あつ	美弥市・由来は、古代の駅名「阿津（あつ）」が転じた地名とされ

			「厚保村」などを経て現在の東（西）厚保に受け継がれている。
65	嘉万	かま	美弥市・由来は、別府長者が夢で仙人から授かった二つの鎌で林を切り開いた事や、「竈（かまど）」に似た浸食地形「カマ」に由来する説が知られている。
66	筋地	あどうじ	周南市・由来は、「筋（あざみ/いばら）などの低木が生い茂る土地（茂った土地）」を意味する語に由来する地名。
67	遠石	といし	周南市・由来は、沖合に見える大きな岩を「遠くの石」と呼んだ事から生まれた地名で、その岩を神体として祀ったのが「遠石八幡宮」とされる。
68	糎島	すくもじま	周南市・由来は、粃殻を意味する「糎（すくも）」が語源で、粃殻の山が海に浮かぶ様子にk似ていた事から付いた地名。
69	須々万	すすま	周南市・由来は、古くからの山間集落であり「すす（炭）や「すま（住まい）」などに由来すると思われる。
70	清尾	せいのお	周南市・由来は、山の尾根が美しく連なる地形（清らかな尾や山の尾）を表すと見られる説が有力です。
71	峠	たお	周南市・由来は、「山と山の間のくぼんだ所＝峠や鞍部」を表す国字「峠（たお・たわ）」に由来し、尾根が最も低くなった場所を示す地形語がそのまま地名となったもの。
72	土越	ひじこし	周南市・由来ははっきりしませんが、地形や土地利用に由来する古い小字名と思われる。
73	戸田	へた	周南市・由来は、入り口を示す「戸」と水田や湿地を示す「田」を合わせた「水辺の田や入り口の田」を表した地名と思われる。
74	政所	まんどころ	周南市・由来は、中世以降の公家や武家社会で財政や成務を司った役所名「政所」に由来し、その役所や支配拠点が置かれた場所を指したのが地名となったと思われる。
75	金峰	みたけ	周南市・由来は、山中にある巨岩「権現巖（ごんげんいわ）」を神の山＝金峰山として信仰した事に由来する地名。
76	夜市	やじ	周南市・由来は、もとは「弥地」などと書かれた地名が正徳3年（1713年）に藩令で「夜市」と改められたもので、夜に市場が立った事からではなく、古い地名表記が変化したものという。
77	厚狭	あさ	山陽小野田市・由来は、古くは「阿豆佐」や「安都佐」と表記された古い地名が変化し、「厚狭」の字が当てられたものされ、厚狭川流域の古代からの郡名や駅家名として続いてきた地名。
78	埴生	はぶ	山陽小野田市・由来は、古代の駅家名として用いられた古い地名で「粘土質の田畑や土」を意味する語「埴＝粘土」に由来すると思われる。現在も山陽道の古い駅名を引き継ぐ地名です。
79	神浦	こうのうら	大島郡・由来ははっきりしませんが、神格化された入江の地名と思われる。
80	津海木	つのうぎ	大島郡・由来ははっきりしませんが、構成漢字から「津＝港や入江」「海＝海辺」「木＝樹木・木材」などを連想した地名。

81	殿入	とのにゅう	大島郡・由来ははっきりしませんが、「殿（との）」＝身分の高い人物や寺社・館、「入（いり）」＝谷奥や入り込んだ地形を指し、「殿に関わる施設のある谷奥や入り込んだ場所」を意味する地名と思われる。
82	安下庄	あげのしょう	大島郡・由来は、中世に京都の妙法院が支配した荘園「安下庄」に由来し、その荘園名が近世以降も地域名として受け継がれた。
83	日前	ひくま	大島郡・由来は、太陽が昇る「日」と山裾の窪地を指す「隈（くま）」が合わさり、「日の当たる山裾のくぼ地」を意味する地形由来の地名とされる説が有力です。古くは「日隈」「日熊」などと表記された
84	麻郷	おごう	熊毛郡・由来は、中世文献に見える「麻合郷（おごうごう）」に由来し、古くは京都や嵯峨の善入寺領の荘園「麻合郷」の一部として記録された地名が、近世以降「麻郷」と表記されて残ったもの
85	宇生賀	うぶか	阿武郡・由来は、南北朝時代の文書に見える「生賀」という古い地名が元になり「宇生（うぶ）」＋「賀（が）」と解かれるが、確定した語源説は示されていない。



山口県の錦帯橋

制作・編集にあたり、インターネットの「ウィキペッキア」及びAI データーを活用して作成しています。

制作・編集 上総の国いちはらの歴史を知る会（ふるさと市原をつなぐ連絡会々員）

連絡先 090-3545-1113

四国地方編

徳島県



NO	地 名	読 み 方	由 来
1	鮎喰	あくい	徳島市・由来は、吉野川支流の鮎喰川で鮎が多く獲れ、住民がそれを食していた事から「鮎」を喰う川や土地」という意味で名付けられたという説が一般的。
2	安宅	あたけ	徳島市・由来は、戦国期に三好氏に仕えた安宅水軍（安宅氏）と、その大型軍船（安宅船）」を拠点とした水軍基地に由来する地名。
3	勝占	かつら	徳島市・由来は、古くは「勝浦」と書かれた地名が変化し「勝ちを占める」という縁起を担いだ表記となったとされ、忌部氏（勝占忌部）ゆかりの地名とも伝えられる。
4	国府	こう	徳島市・由来は、古代の阿波国の国府（こくふ）＝令制国の役所や政治の中心）がこの地に置かれていた事に由来する地名。
5	助任	すけとう	徳島市・由来は、鎌倉時代初期に名東郡の国衙領（南助任保）として

			現れる古い地名で、語源は不明ですが、800年以上続く地名。
6	西沢	にっそ	徳島市・由来は、「西側に位置する沢（谷筋や小さな谷川）」という地形を表す地名と思われる。古くから沢沿いの集落や谷地形を指す一般的な地名要素です。
7	矢三	やそ	徳島市・由来は、戦後期にこの地にキリシタン（耶蘇）の教会が置かれたことから「耶蘇」が転じたという説が有力です。
8	家名田	やなだ	徳島市・由来ははっきりしませんが、「家+名田」で、「ある家（家集団）が支配や耕作した名田」や「家々に割り当てられた名田」を指した地名と思われる。
9	明神	あきのかみ	鳴門市・由来は、近くにある神社（明神・弥吉神社・安芸神などと呼ばれた社）を中心に成立した集落名で、「明らかな神」や「顕現した神」を意味する神への尊称に由来すると思われる。
10	林崎	はやさき	鳴門市・由来は、「林の突き出た岬・崎」を意味する地形語に由来する地名と思われ、鳴門市周辺の港「林崎浦」など中世から見られる名称です。
11	撫佐	むさ	鳴門市・由来は、淡路島志知川浦から移住した人々が慶長年間に開いた新田村に由来し、開基者一族の名（撫佐）を村名としたと思われる
12	撫養	むや	鳴門市・由来は、船と船をつなぐ事を意味する「舫（もや）う」が転じた語に由来し、鳴門海峡入口の港町として船を係留し航海基準を行った場所であったことから生まれたとされるのが有力な説です。古くは「牟屋「牟夜」などと表記され、四国の玄関口として栄えた。
13	大吉	おおよせ	小松島市・由来ははっきりしませんが、「大きな吉地（良い土地）」という縁起を担いだ地名と思われる。
14	清水	きよず	小松島市・由来は、多くの場合「湧き水や清らかな水が出る場所」に由来すると思われる。
15	芝生	しばう	小松島市・由来は、古くは「シボ」や「シボウ」などと呼ばれた在地名があり、語源ははっきりしませんが、湿地や低地を表す古語や地形名に由来すると思われる。
16	中田	ちゅうでん	小松島市・由来は、一般に「田んぼや耕地の中ほど「中央部」にある田を指す地形や土地利用に由来する地名と思われる。
17	砥鼻	といしのはな	小松島市・由来は、砥石の産出や砥石のような岩石を特徴とする「砥」と、岬状に突き出た地形を指す「鼻」が合わさり「砥石に関わる岬状の突端地形」を表した地名と思われる。
18	生谷	おいだに	阿南市・由来は、谷の始まりに位置する事から「生（いぎ＝始まり）+谷」で「谷の生まれる所」を意味する地名と思われる。
19	落雷	おちらい	阿南市・由来ははっきりしませんが、雷や天候に関わる伝承や詐欺の記録が残る地域があり、地名の由来は主に地形や水辺・歴史的施設に基づくと思われる。
20	学原	がくばら	阿南市・由来ははっきりしませんが、「学ぶ場のある原」や「学校のあった原野」といった意味が推測される。

21	権現池	ごんげんいけ	阿南市・由来は、池のほとり（または中島）に権現（権現社・権現さん）を祀った事に由来する地名と思われる。一般に「権現」は神仏習合期の神号で、各地で社名や地名の要素として用いられる。
22	十八女	さかり	阿南市・由来は、平家の落人と十八歳の姫にまつわる伝承から「十八女」と書いて「さかり」と読むようになったとされる説がある。 また、百姓新座衛門の先祖である日下対馬守がかつて、18歳の姫を守るためにこの地域へ逃げ、開発を行ったとする伝説がある。
23	紫衣池	しいけ	阿南市・由来は、かつて存在した農業用ため池「紫衣池」に由来し、その池の名がそのまま小字名として残ったものと思われる。
24	椎木谷	しいのきだに	阿南市・由来は、周囲に自生していた椎（しい）の木が多い谷間であったことから「椎の木が茂る谷」を意味して名付けられた地名。
25	メ谷	しめだに	阿南市・由来は、谷を「締める」ように細く狭まった地形から生まれたとされる説があり、谷の出口を堰き止める・締め付けるような地形イメージに由来すると思われる。
26	丈ヶ丸	じょうげまる	阿南市・由来ははっきりしませんが、一般的に「丈（たけ/じょう）」は山の高さや長さ「丸」が山頂部の丸い地形を表す山名要素で、「丈ヶ丸」は「丈の高い（長い）丸い山や尾根」を意味する地形由来の地名と思われる。
27	工地	たくむじ	阿南市・由来は、一般的には土木工事や開墾地を意味する「工事の行われた土地」を表す説明的地名。
29	竹鼻	たけのはな	阿南市・由来は、川や谷に突き出た「鼻」（岬状の地形）に竹が多く生えていたことから「丈の生えた鼻状の土地」を意味する地形由来の地名と思われる。
30	茶畦	ちゃぐる	阿南市・由来ははっきりしませんが、「茶」は茶畑や茶の栽培地「畔（あぜ/くろ）」は田畑の境目を指す語なので、「茶畑の畔」を意味する地名と思われる。
31	長生	ながいけ	阿南市・由来は、一般的な「長生」の語感（長寿・繁栄）や徳島南部の「長の国」伝承と結びついた地名と思われる。
32	廿歩	にじゅうぶ	阿南市・由来ははっきりしませんが、「二十歩分の土地」や「二十歩ほどの距離」など、土地の規模や測量単位を示す呼び名が地名になったと思われる。
33	走寄	はしりより	阿南市・由来は、急峻な山の斜面が川に迫り「山が走り寄る」ように見える地形を表した地名と思われる。古くからの山村で、川沿いの狭い土地を示す自然地名とされる。
34	廿枝・廿谷	はたえだ・はたがたに	阿南市・由来は、「二十（廿）の枝」の字義から、枝分かれした谷や川筋や尾根が多い地形を表した地名と思われる。
35	畷町	はりちょう	阿南市・由来は、古い字「畷（はり）」に由来し、開墾地や畑地を意味する語から生じたと思われ、周辺には小字名「新畷（しんはり）」なども含めて、開いた田畑の土地を示す歴史的地名とみられる。
36	蛭地	ひるじ	阿南市・由来は、湿地や水辺に多く生息するヒル（蛭）に由来する地

			名と思われ、「ヒル（蛭）の多い土地（低湿地）を意味する自然地名。
37	芳崎	ほうさき	阿南市・由来は、「芳しい岬（さき）」を意味する地形由来の地名とされ、那賀川に突き出した微高地＝岬状の土地を指す呼称が、近世には村名や姓として定着したもの。
38	反古田	ほごでん	阿南市・由来は、「役に立たなくなった田」や「荒れた田」のような意味合いの地名。
39	三栗	みぐりゅう	阿南市・由来は、「栗の木が多く生えた場所（栗の多い里）」を意味する自然地名と思われ、「三」は数そのものより「多いやいくつも」を表す修飾語とみられる。
40	見能林	みのばやし	阿南市・由来は、「見能（みの）」は古い小字・氏族名などに由来する可能性が高いものの、確実な語源は不明。
41	宮倉	みやくら	阿南市・由来は、古くは「御丈倉」書き、天正年間に北条氏家臣の高田氏の倉庫（年貢などを納める倉）があった事に由来する。
42	屋那婆	やなば	阿南市・由来については不明。
43	伊端穂	いずほ	吉野川市・由来ははっきりしませんが、川や段丘の端にある田地や集落を表す地名と思われる。
44	麻植	おえ	吉野川市・由来は、古代に阿波忌部氏がこの地に麻を植え、麻布を織って天皇の大嘗祭に献上した事から「麻を植える郡」＝麻植郡と呼ばれるようになった事が由来。
45	槻原	かえきばら	吉野川市・由来は、一般には「槻（ケヤキの古称）の生える原（原野）」を意味する自然地名と思われる。
46	鉾原	かんなばら	吉野川市・由来は、字義から推測すると「鉾（かんな＝大工道具）」＋「原」＝原野」で、「大工や伐採に関わる原野」を連想される地名
47	刷石	はけいし	吉野川市・由来については不明。
48	木綿麻山	ゆうまやま	吉野川市・由来は、古代からの繊維作物「木綿（ゆう）」た「麻」と関わる信仰や産業に由来すると思われる。
49	尾開	おばり	阿波市・由来は、周辺の谷を開削・開墾した事に由来する地名と思われる「開く」や「開墾する」の意味を持つ「開（はり）/ばり」に川筋の付け替えなどの新開発が重なって成立した地名と思われる。
50	香美	かがみ	阿波市・由来は、平安時代の文献にも見える古い地名で、「香りのよい・美しい土地」などを表す美称的な漢字をあてた地名と思われる。
51	柴生	しばう	阿波市・由来は、「柴」（雑木や薪）と「生（生える・生じる）」に由来し、「柴がよく生える土地」や「柴を採る場所」を意味する地名。
52	新開	しんばり	阿波市・由来は、一般に川沿いや海沿いの低湿地や砂州などを干拓や埋め立てし、新しく「開いた（開発下）」土地を意味する地名とされ、多くは江戸時代以降の新田開発や港湾整備に伴って附いた地名。
53	潺	せせらぎ	阿波市・由来は、水の流れの音や小川のある地形に由来する地名。
54	早田	わさだ	阿波市・由来は、一般的には「早く開かれた田」や「早く水を引く田」など田の性質を表す地名と姓と解釈される。

55	狙ヶ内	ねらがうち	美馬市・由来については不明。
56	田上	たねえ	美馬市・由来は、農業の神様として信仰を集めた太田名神山＝田の神山が地名の由来となって、田上の字を当てるようになったという。 古くは「谷上」とも書き、奈良方面から瀬田川沿いに谷を進んだ先に開けた地である為と思われる。
57	櫟木	ちちのき	美馬市・由来は、クリやコナラなどを指す木名「櫟（くぬぎやいちい等）」と「木」が重なった「櫟の木のある場所という自然地名という
58	吾橋	あはし	三好市・由来は、祖谷川に架かる橋の名に由来し「阿波国側へ渡る橋」「吾（われ）の集落を結ぶ橋」など川を渡る地点を示す地名と思われる。
59	鮎苦谷川	あいくるしだにがわ	三好市・由来は、「鮎が多く棲む谷川」である事を示す「鮎」と「苦谷（くるしだに）」という険しく厳しい谷地形を表す古い地名表現が合わさった地名と思われる。
60	祖谷	いや	三好市・由来は複数あり、忌部神の住む「祖山（おやま）」由来する説や、「背山（そやま）」＝山の背後の地とする説「いよいよ」＝山々が重なる様子を表す説などがある。
61	大歩危	おおぼけ	三好市・由来は、断崖を意味する古語「ほき（ほけ）」が転じたとする説と、「大股で歩くと危ないほど険しい場所」という意味とする説が代表的な由来です。現在は、溪谷沿いの急峻な崖地形を反映した「ほき」起源説が有力です。
62	小歩危	こぼけ	三好市・由来は複数あり、断崖を意味する古語（ほき/ほけ）が転じたとする説と「小股で歩いても危ないほど険しい場所」という俗説もある。
63	双子布	ふたごの	三好市・由来については不明。
64	麦生土	むじゅうと	三好市・由来ははっきりしませんが、麦作や土質に由来する地名。
65	三溪	みたに	勝浦郡・由来は、「三つの谷（溪谷）が合流場所」を指して名付けられた地名と思われる。
66	槻地	きやけじ	勝浦郡・由来は、カシ類の古称「槻（つき）」と土地や場所を表す「地」が合わさり「槻の木が多い土地」を意味する地名と思われる。
67	牧犢	うしかい	名東郡・由来は、字義を読めば「小牛を放牧した場所」や「小牛の牧場」という意味の地名と思われる。
68	蝮塚	はめづか	名東郡・由来は、「マムシ（毒蛇）が多く出た場所」や「マムシを埋めた塚」・「マムシにまつわる伝承のある塚」に基づく民間的な呼称と思われる地名です。
69	曲突越	くどうごえ	名西郡・由来ははっきりしませんが、字義から「曲がった突きだした（岬や尾根）を越える場所」といった地形的由来と思われる。
70	鬼籠野	おろの	名西郡・由来は、中世に「尾呂野」と書かれた地名が、当地の鬼籠野神社を中心とする集落一帯を指した事に由来し、後に現在の「鬼籠野」の字が当てられた地名。
71	二秀峯	にしゅうほう	名西郡・由来は、徳島東部の霊峰「津峯（津峯山）」と「日峯（ひみ

			ね)」の二つの秀でた峯を合わせて呼んだ「阿波二秀峯」に由来する
72	朝生	あそう	那賀郡・由来は、字義から「朝に生まれる」や「浅い生地」の地名と推測される。
73	出羽	いずりは	那賀郡・由来は、古代の官道「出羽路」（いではじ）や「出端（いでは）」など、山の端や谷の出口を意味する語に由来すると思われ、山間部の谷口や峠の出入り口を示す地名。っ
74	追立口	おつたてぐち	那賀郡・由来は、那賀川の支流沿いに築かれた追立ダム附近の谷口の出入口を指す地名で、「追立ダム（追立地区）＋川筋の入口（口）」と言う地形や施設由来の複合地名。
75	音谷	おんだに	那賀郡・由来は、字義から推測すると「水音の響く谷」や「滝や急流の音が特徴的な谷」に由来する地名と思われる。
76	雄	おんどり	那賀郡・由来については不明。
77	小延	このぶ	那賀郡・由来は、江戸時代から見える旧村名「小延村」に由来し「小さく細長く延びた土地形状」を表す地形語から生まれたと思われる。
78	小計	こばかり	那賀郡・由来は、那賀川上流右岸の山間部に位置し、川沿いに小平地を有する。地名の「コバ」は、焼畑もしくは山間の小平地などの意で「カリ」も山裾の草地や山畑を意味するところから付いた地名。
79	李	すもも	那賀郡・由来ははっきりしませんが、多くは中国や朝鮮系の姓「李」に由来する可能性が高い地名。
80	轟	とどろき	那賀郡・由来は、滝が大きな音を立てて「とどろく」様子から名付けられた地名です。
81	殿谷	とんたに	那賀郡・由来は、「殿（身分の高い人）」＋「谷（谷地形）」から生じた名字であり、それが地名に転じたものと思われる。
82	西納野	にしなの	那賀郡・由来は、「西」＋「納」＋「野」という漢字からみて、「西側にある、物資を納める（集める）場所を含む野（原野）」を意味した地名と思われる。
83	延野	のぶの	那賀郡・由来は、那賀川支流に沿って細長く開けた谷あいの耕地や集落である事から「長く延びた野（の）」という地形的特徴を表したものであると思われる。
84	拝宮	はいぎゅう	那賀郡・由来は、那賀川支流の拝宮谷川沿いにある集落で、地名の直接の由来は不明です。近隣の「拝村」などと同様に、神社や霊山を拝む場所（遥拝地）に由来する地名と思われる。
85	墓瀧	びきだき	那賀郡・由来ははっきりしませんが、一般的には「墓（埋葬地）＋「瀧」（瀧のある場所）」という自然地形や信仰に由来する複合地名と思われる。
86	五倍木	ひしのき	那賀郡・由来は、「節のある木」や「節目となる木」などと意味する古い言葉に由来すると思われる。
87	朴野	ほうの	那賀郡・由来は、「ホオノキ（朴の木）」が多く生えていた野（原）」を意味する自然地名と思われ、古くは山間の朴野村として那賀川左岸の集落名に用いられて来た。

88	政所肥	まどころ	那賀郡・由来ははっきりしませんが、中世荘園の役所「政所」と、肥沃な土地を示す「肥」が結びついた地名と思われる。
89	水崎	みさき	那賀郡・由来は、「水辺に突き出た岬状の土地（＝水の崎）」を意味する自然地形由来の地名と思われる。
90	百合谷	もまえだに	那賀郡・由来は、「日本歴史地名大系」などに史料にも百合（もまえ）村・百合谷（もまえだに）村として記録されるが、百合の花に由来する説は示されておらず、谷地形に付いた古い村名「百合」の一部として理解されている。
91	築ノ上	やなのうえ	那賀郡・由来は、川に設けられた魚捕り用の築（やな）の上手側に位置する場所を示す地形由来の地名と思われる。
92	鎗戸	やりと	那賀郡・由来ははっきりしませんが、字義から「槍のように尖った地形」や「ヤリト姓などの人名由来」とと思われる。
93	鷺敷	わじき	那賀郡・由来は、那賀川沿いの急峻な岩山に鷺が多く棲み着いた景観から「鷺の住む場所（鷺の敷地）」を意味して名付けられた説がある
94	和食郷	わじきごう	那賀郡・由来は、古い郷名「和射郷（わさのごう）/わさごう」が時代と共に音変化・表記変化して「和食郷」となつたとみられ、古代の郷（行政区画）名に由来すると思われる。
95	川長	かわたけ	海部郡・由来は、一般的には川沿いの細長い集落や川の流路が長い場所など、川の形状や地形に由来する可能性が高い地名と思われる。
96	篋野島	ぬのしま	海部郡・由来は、矢竹を意味する「篋（の）」と古くは「ののしま」と呼ばれた島名が転訛して現在の「ぬのしま」になったという説。
97	久望 	くも	海部郡・由来は、「くぼ（窪）＝くぼ地・谷地」に吉祥的な字「久」「望」を当てた地形由来の地名と思われる。
98	海部	かいふ	海部郡・由来は、古代に海で漁労や航海に従事した「海士（あまの部民＝海部（あまべ）に由来し、海辺に住む海人の一族がいた土地を示す地名と思われる。
99	王余魚谷	かれいだに	海部郡・由来は、谷を流れ落ちる滝が「王余魚（かれい）滝」と呼ばれた事に由来し、その川筋や谷全体が「王余魚谷」と呼ばれるようになったと思われる。現在は海部川支流の王余魚川と、その上流の轟九十九滝を結びついた地名です。
100	芥附	くぐつけ	海部郡・由来は、中世以来の古い地名「芥付村」に由来し、「芥（ゴミや細かいもの）」や「附（くつつく・張り付く）」といった字義から、土砂や細かな堆積物が付着する地形や海岸を表した地名。
101	穴喰	ししくい	海部郡・由来は、古代に阿波国にいた豪族「脚咋別（あしくいわけ）」が転訛して「穴喰（ししくい）」になったとする説が有力です また、「シシ（獣）を食う山里」に由来する説もある。
102	熟田	ずくだ	海部郡・由来は、良く開墾した田という意味から付いた地名です。
103	勝瑞	しょうずい	海部郡・由来は、戦国期に阿波国に政治や経済の中心となった城下町の名で「勝」と「瑞」という吉祥の漢字を当てた地名と思われる。
104	朧傍示	みかづきぼうじ	板野郡・由来は、「朧」が三日月形の地形や月の出にちなむ字で、「傍

			示」が境界を示す標識や境界線を意味する古い地名語であり、月形の土地附近の境界地点を表す地名と思われる。
105	龍池傍示	りょうじぼうじ	板野郡・由来は、「龍池」という池に由来する小字と、村境や境界を意味する「傍示」が組み合わさった地名。
106	唐園	とうその	板野郡・由来は、江戸時代の史料に「唐葉村」とも記される低湿地の農村で、「唐（とう）」と「園（その）」を合わせた地名ですが、唐様の庭園や外来の作物や技術との関連を推察する説がある。
107	神宅	かんやけ	板野郡・古くは「神宅村」と呼ばれた村に由来し、その名は崇神天皇の時代に置かれたと伝わる「神宅」という神に関わる施設や領域名に由来するとされる。
108	摺隅	しんしゅ	板野郡・由来については不明。
109	剪字	きりう	美馬郡・由来は、確定した通説はないが、山間の一字地区にある集落名として中世以来の「字（う）」＝年貢の徴収単位に、「剪（きり）」＝切り立った地形や伐採地を示す語が組合わさった地名とみられる説が有力です・
110	端山	はばやま	美馬郡・由来ははっきりしませんが、「端の山」や「縁辺の山」を意味する一般的な地形由来の地名と思われる。



鳴門海峡のうずしお

香川県



NO	地 名	呼び名	由 来
1	赤牛崎	あかばざき	高松市・由来は、源平合戦の際にこの岬で多くの牛馬が血を流して倒れ、海が赤く染まったという伝承から「赤牛崎」と呼ばれるようになったという地名。
2	庵治	あじ	高松市・由来は、「阿伽井（あがい）」という泉のそばの石に刻まれた「阿」の字、または「葦の生えた土地」を意味する「葦地（あしじ）」が転じたものと伝えられる。いずれも古くからの自然環境と信仰に由来するという説です。
3	台目	うてめ	高松市・由来は、屋島北麓の小高い台地状の地形を示す「台」と、区画や順番などを表す「目」が合わさり「台地状の区画（台地の一画）」を意味する地形由来の地名と思われる。
4	浦生	うろ	高松市・由来は、かつて海に面した入江（浦）だった地形に由来し、「浦に生じた土地」や「浦辺にできた集落」という意味合いから生まれた地名と思われる。
5	小村	おもれ	高松市・由来は、一般には「小さな村や集落」を意味する地名。
6	鹿角	かのつの	高松市・由来は、戦国期にこの地にあった鹿角城（かのつのじょう）

			う)と、その周辺の村名「鹿角村」に由来すると思われる。
7	塩江	しおのえ	高松市・由来は、もとは「潮江」と書かれ、温泉が湧き出る谷あい如潮のように湯気や湯が満ちる様子を「潮(塩)の江(入江・谷)」と表現した事に由来する。
8	地頭名	じとうみょう	高松市・由来は、中世の荘園や公領支配に関わる役職名「地頭(じとう)」と、荘園単位を表す「名(みょう)」が合わさった「地頭の支配する名田」という意味に由来すると思われる。
9	十川	そがわ・そごう	高松市・由来は、平安時代に「蘇甲」と書かれた古い氏名が由来し、「そが(そご)」と読まれた地名が「十川」の字を当てられたものと思われる。川が多い地形から「十の川」と解釈されることもあるが、これは後世の当て字的な説明という。
10	亀水	かめにず たるみ	高松市・由来は、亀水川の源流に大亀が住むという伝承があり、その深淵から湧く水を「亀の水」と呼んだ事に由来され、「亀水」と表記されるようになったと伝えられる。元は「垂水」と書かれた地名が、大亀伝説と結びつき現在の字になったという説がある
11	磨屋	とぎや	高松市・由来は、刀剣や金物などを研ぐ職人「磨屋(とぎや)」が多く住み、店を構えた町であった事に由来すると思われる。中世から近世にかけて職人の町として成立し、その職業名が町名になったという。
12	中間	なかつま	高松市・由来は、古代の郷名「香川郡中間郷」に由来し、「郷の中ほどや中流域の集落」を意味する地名と思われる。
13	凹原	ひっこんぱら	高松市・由来は、「窪んだ地(窪地)の原っぱや原野」を意味する地形由来の地名と思われる。
14	福家	ふけ	高松市・由来は、低湿地を意味する古い方言「ふけ」に「服をもたらす家や土地」という縁起の良い漢字を当てたものとされ、南北朝時代には既に「福家村」として史料に見られる地名。
15	仏生山	ぶっしょうざん	高松市・由来は、高松藩主松平頼重の菩提寺として建立された真言宗寺院の「仏生山来迎院法然寺」の山号に由来し、その門前町として発展した地域名が定着したもの。
16	百相	もまい	高松市・由来は、古代の郷名「百相郷(ももなみごう)」に由来し、その遺称として残った地名です。読みは時代により「ももなみ」「もまい」「もあい」などが併存したと思われる。
17	焼堂	やけど	高松市・由来は、昔この地で堂が焼けた火災の伝承に由来する地名とされている。
18	除々大向	よけおおむかい	高松市・由来は、古くからの山林地帯で、山の斜面(大きな向き＝大向)にあり、災いや害獣・風雪などを「除ける」境界や防御の意味を持つ地名と思われる。
19	弓弦羽	ゆずりは	高松市・由来は、常緑樹「杠(譲葉)」に由来し、その名を当て字的に「弓弦羽」と表記したと思われる。古くは「弓弦羽里」や「弓弦葉里」など「ゆずりは」を表す多様な字が使われた。

20	加沙越鼻	かさこしはな	丸亀市・由来は、古くは「笠越」「傘越」などと書かれ、岬を超える際に風雨をしのぐ笠や傘にちなむ地名と思われる。
21	久米氏	きみょうじ	丸亀市・由来は、古代から続く「久米（くめ）」一族・久米氏の居住や支配に由来する人名起源の地名と思われる。
22	柞原	きばら	丸亀市・由来は、古くは讃岐国那珂郡の荘園名や村名「柞原庄・柞原村」に由来し、「柞（ならやくぬぎ）などの雑木が生えた原野」を意味する地名と思われる。
23	郡家	ぐんけ	丸亀市・由来は、古代の地方行政機関「郡家（ぐんけ/ぐんが）」が置かれていた場所に由来すると思われ、郡の役所跡や中心地を示す歴史的地名です。
24	真時	さんとき	丸亀市・由来は、古くは「真土」「真時」などと書かれた地名が転訛し、土地の性質（混じりけのない土やまことの時）を表す語から生じたと思われる。
25	塩飽	しわく	丸亀市・由来は、瀬戸内海の潮流や製塩と関わり「潮が湧く（潮湧く）または「塩を焼く（塩焼く）」に由来するとされる説がある。いずれも、古くから海運と塩づくりで栄えた塩飽諸島の自然環境や生業を反映した地名と思われる。
26	宿母	すくも	丸亀市・由来は、古くは、「宿毛」や「宿茂」などと書かれた地名が転訛し、祝駅や宿場に関わる「宿」と、草木の繁茂や土地の性質を表す「茂や毛」などが組み合わせられたものと思われる。
27	風袋	ふるたい	丸亀市・由来は、江戸時代に丸亀藩へ入府した京極氏が譜代の家臣団を置いた「譜代町（ふだいまち）」が転訛して「風袋町」となった説が有力。
28	峯道	みねんど	丸亀市・由来は、五色台の山稜（峯）に沿って通る道筋に由来し「峯に沿う道」や「峯ずたいの道」という地形由来の地名。
29	青海	おうみ	坂出市・由来は、瀬戸内海に面した湾状の地形と良港であった入江にちなみ。「青い海の湾や港」を意味して名付けられたと思われる。中世文書には「青見村」とも記され、海に開けた地形を表す古い地名が変化したものと思われる。
30	逃田	にげた	坂出市・由来は、「逃げる田」や「水害から逃れた田」などの意味を持つ説がある。
31	橙	はりのき	坂出市・由来は、橙（はんのき）が湿地に生える木を表すことから、湿地や川沿いのハンノキ林に由来する地名である可能性が高いという。
32	元結木	もっといき	坂出市・由来は、髪を束ねる道具「元結（もとゆい）」を作る材料となる木が多く生えていたことから、その木を意味する地名になったとする説が有力です。
33	生野	いかの	善通寺市・由来は、「生き茂る野」や「新しく開かれた野」を意味する語に由来すると思われ、古くは「生野郷」として条里制の田地が開かれた地域であることから、開発された野や耕作地を指す地

			名と思われる。
34	大麻	おおさ	善通寺市・由来は、昔、ふもとで麻を多く栽培していた事に由来
35	鳥坂	とっさか	善通寺市・由来は、「鳥が多く集まる坂（丘）」という自然環境に由来する地名と思われる。
36	鴨部	かべ	さぬき市・由来は、古くは平安時代の文献に見える古い地名で、鴨部川流域の低地（鴨の多い湿地や川辺）を指した事から「鴨のいる川辺や湿地の土地」を意味する地名と思われる。
37	神前	かんざき	さぬき市・由来は、古代の郷名「神前郷（神崎郷）」に由来し、神社の「神の前（かみのまえ）」の意をもつと考えられる地名です。中世には荘園「神崎荘」が置かれ、現在も駅名や大字名が残る。
38	寒川	さんがわ	さぬき市・由来は、古代から見られる「寒川郡や寒川荘」として見られる地名で「寒い川」など水辺の環境を表す和語に由来すると思われ、同じ語源から生じた姓「寒川」とも深い関係がある。
39	田面	たずら	さぬき市・由来は、古くは大川郡田面村と呼ばれ、中世文書に見える「大津賀」など関係づける説があり、山間の田地の「田の面（たのも）」に由来する地形名と思われる。
40	大内	おおち	東かがわ市・由来は、古代の郡名「大内郡」（おおちぐん）に由来し、「大きな内陸の入り江（湾奥の静かな水域）」を意味すると思われる説が有力です。また、古い伝承によると紀元前孝霊天皇の皇女「倭迹々日百襲姫命（やまととひももそひめのみこと）」が当地に移住し、皇女の居住を付近の人々たちが「大内」と称した事に由来すると言われる説がある。
41	黒羽	くれは	東かがわ市・由来は、中世にこの地にあった「黒羽城」と、その城主の永塩氏らの居城を中心に形成された村落名「黒羽村」に遡るとされ、黒い羽のような山の稜線や地形のイメージから名付いたと思われる。
42	小砂	こざれ	東かがわ市・由来は、砂の多い小さな浜や洲を意味し「小砂」＝「小さな砂地」を指す自然地形が由来と思われる。
43	入野山	にゅうのやま	東かがわ市・由来は、古くは「入野（にゅうの）郷」の山地に位置する事から「入野の山」→「入野山」と呼ばれるようになったとみられ、「入野」は山間の入り込んだ谷地や奥まった野を意味する地形語に由来する。
44	引田	ひけた	東かがわ市・由来は、古くは港町として栄えた海辺の集落に由来し、海から「引き入れた田」＝入り江に開かれた田地を意味する説が有力です。中世以降、引田港を中心に発展し、現在もその歴史的町並みが残っている。
45	柞	ほうそう	東かがわ市・由来は、多くが「柞（くば）」＝イスノキなどの木の育成地や林地を示す古い自然地名に由来すると思われる。
46	水主	みずし	東かがわ市・由来は、古くは「水主神社」の社名に由来し、「水の神や水を司る神（＝水主）」を祀る事から生じた地名と思われる。

47	原間	わらま	東かがわ市・由来は、「原野のあいだ」や「原の中ほどの場所」といった、周囲の原野地形に基づく地名と思われる。
48	溶目	うてめ・とろめ	三豊市・由来は、海岸の岩が波で「とろとろ」と溶け崩れるように見える地形から来たという説が有力です。
49	油	さこ	三豊市・由来は、「田（た）＋水からなる感じで、意味は「水の多い田」や「ぬかるんだ田」など、水田や湿地に由来する地名。
50	長噺	ながりて	三豊市・由来は、「田畑の間を通る細長い道（噺）」という地形語に「長い」を意味する「長」が付いたものと思われ、「長く続く畦道や他の中の細道」を表す地名を言う。
51	爺神	とかみ	三豊市・由来は、近くにある爺神山・爺神社に由来し、「祖先神（年長神）を祀る信仰から生まれた地名と思われる。
52	塩生	はぶ	三豊市・由来は、「塩を産するや塩に関わる土地（塩のある生産地）」を意味する語から生じたと思われ、塩づくりや塩分を含む土地に由来する地名とみられる。
53	土庄	とのしょう	小豆郡・由来は、中世文書に見える荘園名「肥土庄（ひとのしょう）」が転訛し、後に「土庄」という表記されるようになったという説が有力です。
54	千軒	せんげ	小豆郡・由来は、大阪城築城の際この地に集住した石工が「千軒もあった」と言われるほど多かった事に由来する。
55	豊島	てしま	小豆郡・由来は、「水が豊かな島」や「豊かなめぐみをもたらす島」という意味から「豊島」と表記されるようになったとする説が有力だが、古くは「手島」とも書かれ、由来には諸説ある。
	小豆島	しょうどしま	小豆郡・由来は、古くは「あずきしま（しょうどしま）」と呼ばれた島で、小豆の産地説と「崖（あず）」に由来する説がある。現在の読み「しょうどしま」は「小豆」の音読み「しょうず」が転じたものと思われる。
57	田浦	たのうら	小豆郡・由来は、一般的には「田のある入江や浦」を意味する地形由来の地名（あるいは姓）と思われる。
58	苗羽	のうま	小豆郡・由来は、本来は「苗間や苗場」で田の苗代を意味する地名で、地元では「野馬（のうま）」と解釈され、野に放した馬＝自然放牧地を指す名に転じたとされる。
59	池戸	いけのべ	木田郡・由来は、周囲一帯がかつて湿地や池が広がる低地であったことから「池」を示す語と、縁辺やほとりを表す「戸＝辺」が結びついた「池の辺（いけのべ）」に由来すると思われる。
60	公文明	くもんみょう	木田郡・由来は、律令時代に公文書を扱う官吏の役職が公文の役所が経理をまかなうために田畑を有していた事を公文明という。
61	鹿伏	ししぶせ	木田郡・由来は、鹿などの獣が身を伏せていた場所や獣の多い山裾や斜面といった自然環境に由来する地名と思われる。
62	風呂谷	ふろんたに	木田郡・由来は、谷水を用いて風呂を立てたことからついた地名と、戦国時代に敵側や裏切り者を斬首する場所を「フロケ谷」と

			命名したという言い伝えもある。
63	峰堂峠	むねんとうげ	木田郡・由来は、峠付近にあった「峰堂」というお堂（地蔵堂・小祠）に由来して付けられた地名と思われる。
64	風戸	せと	香川郡・由来は、「風が戸を立てたように静まった」という伝承と「崩れた斜面＝かじ（掻）と（処）」が転訛したという説があり、崩壊地を意味する地形由来の地名。
65	宇夫階	うぶすな	綾歌郡・由来は、宇夫志奈（うぶしな）大神を祀る宇夫階神社の神名や社名に由来地名と思われる。古くは「宇夫志奈」や「宇夫階」などと表記され、日本武尊の子の武彥王が暴風雨から救われた伝承と結びついた神社を中心に地名かしたと思われる。
66	水主町	かごまち	綾歌郡・由来は、「水主」とは水夫（船内労働者）や船頭のことで「水手」とも書かれた。江戸時代にこの地域に船乗りが多く住んでいたことから「水主町」という地名になったという。
67	馬酔木	あせび	綾歌郡・由来は、この地に多く自生していた有毒低木の（アセビ（馬酔木））の名に由来するという説が有力です。
68	生子	ううこ	綾歌郡・由来は、古い郷名「生野」などに関係する可能性が指摘されるが、はっきりしない。
69	鵜生池	うのいけ	綾歌郡・由来は、かつて池の一角が葦の茂る湿地で、多く鵜（う）が生息していたことから「鵜が生きる池」＝「鵜生池」と呼ばれるようになったという。
70	挿頭山	かざしやま	綾歌郡・由来は、山のふもとの丘が「香指山（かざしやま）」と呼ばれていた事に由来し、その地形や位置関係から名付けられたとされる。
71	千疋	せんびき	綾歌郡・由来は、牛千疋（多くの牛）を挑発したという伝承や、牛一千疋を並べたほど広い土地をたとえた呼び名が地名化したという説がある。
72	粉所	そぎしょ	綾歌郡・由来は、木材を薄く削った（そぎ（粉））を扱う場所や集積地であったことから、その作業所や集荷場を意味する地名になったという説と、多数の木を削尖して粉（そぎ）を作り、これを地上に立て敵の襲撃に備えたという説がある。
73	榎井	えない	仲多度郡・由来は、榎（えのき）の木のある井戸や湧き水の場所を意味する「榎の井（えのい）」が語源とされる説が有力です。
74	葛原	かずはら	仲多度郡・由来は、一帯にクズ（葛）の草が多く生えた「葛の原野（はら）」に由来する地名と思われる。
75	佐柳	さなぎ	仲多度郡・由来は、神功皇后や足利義満が暴風からこの島に避難したところ、風が急に凩いだことから「早い凩ぎ（はやなぎ）」と呼ばれ、それが転じて「佐柳（さなぎ）」という地名になった。
76	山階	やましな	仲多度郡・由来は、中世文書に見える荘園名（山階縣（やなしなのあがた））に由来し、藤原氏の直営地や荘園名から発達したと思われる。現在は旧山階村一帯の地名として残っている。

77	旭東	きょくとう	仲多度郡・由来は、「香川県の東端（＝県の一番東）」という地理的位置をそのまま表した呼び名です。
78	羽間	はざま	仲多度郡・由来は、山と谷・谷と谷など「土地と土地のあいだ（狭間）」を意味する地形語から生じたと考えられ、谷間の集落や谷あいの低地を指す地名と思われる。



香川観光地ランキング



香川金毘羅宮

愛媛県



NO	地 名	読み方	由 来
1	朝生田	あそうだ	松山市・由来は、かつての村名「浅生田（あそうだ）」に由来し、「浅い湿地や田んぼ」を意味する地形由来の地名。表記と読みを変えつつ現在の「朝生田」として残ったもの。
2	來住	きし	松山市・由来は、古くは「久米郡來住郷」と呼ばれ、古代から人が「来て住み着いた土地」という意味合いから付いた地名という。
3	斎院	さや	松山市・由来は、平安時代から鎌倉時代にかけて賀茂御祖神社（下鴨神社）と賀茂別雷神社（上賀茂神社）の両賀茂神社に奉仕した皇女の齊院（さいいん）に由来し、その関係の田地「斎院勅旨田」が置かれ

			た事から生じた地名と思われる。
4	苞木	すぼき	松山市・由来は、「苞（つと＝包み）」＋「木」で、薪や枝葉などを束ねて運び出した林や山裾を指す地名と見る説が有力です。
5	垣生	はぶ	松山市・由来は、古代の郷名「埴生（はにゅう/はぶ）郷」の「埴（はに）＝粘土」が「垣」と書き替えられた事に由来する。
6	別府	べふ	松山市・由来は、中世の荘園制で本来「別府（べっふ/べふ）」と書かれた本来の荘園から切り分けられた別区画（新開地）を指す語が地名化したものと思われる。愛媛県には伊予国の荘園に属する別府があり、その呼称が近世以降「別府」と表記され、現在の地名として残ったと思われる。
7	松前	まさき	松山市・由来は、加藤嘉明から松山城へ移る際に「松山の前」に位置する事から「松前」と改めたとする説がよく知られる。
8	水泥	みどろ	松山市・由来は、本来は湿地帯を意味する語に由来すると思われ、「水の多いぬかるんだ土地」を表す地名。一方で、聖徳太子が通行した「御堂路（みどうじ）」が転訛したという伝承もあるが、研究者は湿地由来説を有力とみなしている。
9	余戸	ようご	松山市・由来は、古代律令制で一理＝50戸に満たさずに余った戸数をまとめた「余戸（よこ）」という行政単位に由来し、その名が中世の郷名・近世の村名を経て現在の町名となったという。
10	今治	いまばり	今治市・由来は、古くは「伊麻波里」や「今張」などと書かれ、港の整備や海の守りを「今まさに治める・整える」という意味から「今治」と表記するようになったという説が有力です。
11	明日	あけび	今治市・由来は、桜の名所「法福寺」の山号「明日山」に由来する。
12	五十嵐	いかなし	今治市・由来は、豊作をもたらす「五風＋雨」を意味する地名。
13	口総	くちすぼ	今治市・由来は、大三島の海岸部に開発された「口惣塩田」や旧村名「口惣村」に由来し、「口惣から口総」と表記が変化した地名です。
14	小大下	こおげ	今治市・由来は、隣接する島名「大下（おおげ）」に対して「小さい大下の島や集落」を意味する対照的な呼称として生まれたと思われ「小＋大下」が連続して「こおげ」と読まれるようになった地名。
15	馬刀潟	まてがた	今治市・由来は、海岸の潟湖状の形状に、二枚貝のマテガイ（馬刀）が多く生息した事から、この地名が付いたという。
16	石応	こくぼ	宇和島市・由来は、石の多い急傾斜地の段畑や石垣地形と、古くからの浦（港）集落としての歴史が結びついて生まれた地名と思われ、確定した一説より「石の多い土地や石垣の発達した浦」に由来する地名とされる説がある。
17	申生田	さろうだ	宇和島市・由来は、古くからの「申（さる）」に関わる人名や地名と、水田を意味する「田」が結びついたと考えられる地名。
18	泥目水	とろめず	宇和島市・由来は、「泥」を含む湿地や浅瀬の地形と、海岸近くの湧き水や海水の混ざる水場を表すと思われる地名で、泥の多い入り江や磯を意味する説が有力です。

19	南君	なぎみ	宇和島市・由来は、古くは「南君浦」と書かれた海岸や浦の名に由来し、「南側の入り江（浦）」を意味する自然地名。
20	法華津	ほけつ	宇和島市・由来は、「法花津」とも書き、中世からの港「津」を持つ海辺の地名で、戦国期にこの地を本拠とした法華津氏の城や港に由来する地名と思われる。
21	元結掛	もとゆいぎ	宇和島市・由来は、武士の髷（まげ）を束ねる紐「元結（もとゆい）」を掛けておく場所や役目に由来すると思われ、城下町の職人・役屋敷に関わる町名説と、昔ある僧が発心して剃髪し、馬目木（まめぎ）に元結を掛けたので「元結木」といったという説もある。
22	遊子	ゆす	宇和島市・由来は、藩政期初めこの一帯が「遊子浦」と呼ばれていた事に由来し、宇和海に面した漁村や浦としての性格を示す地形。
23	神越	みのこし	八幡浜市・由来は、菅原道真がこの地を通ったという伝承にちなみ「神（道真）がお越しになった場所」という意味から付いた地名。
24	丸礫	まるばえ	八幡浜市・由来は、「丸い岩礁（礫）」のある河岸地形に由来する地名と思われ、その地形から生まれた姓（丸礫）とも深く結びついている
25	一宮	いっく	新居浜市・由来は、伊予国の中で最も格式の高い神社＝「一宮（いちのみや）」が鎮座した場所に由来し、その社の門前町や周辺地域の地名として定着したと思われる。
26	大生院	おおじょういん	新居浜市・由来は、中世にこの地にあった寺院「往生院（おうじょういん）」の名を忌まわしみ「大生院」と改めた事に由来する。
27	東雲	しののめ	新居浜市・由来は、夜明け前の空を意味する古語「しののめ（東雲）」に由来し、「闇から光へ移る夜明けの情景」をイメージして昭和期に命名された。
28	種子川	たねがわ	新居浜市・由来は、山地を源とする「種子川」という川の名に由来しその川沿いの山村として呼ばれた地名。
29	東平	とうなる	新居浜市・由来は、元々の呼び名「東の鳴（とうのなる）」に後から「東平」という漢字を当てた「当て字」であり、山間を開拓して平地にしたことから「平」の字が用いられたと思われる。
30	明穂	あかお	西条市・由来ははっきりしませんが、「明るい」や「豊かな」を意味する「明」と、稲穂など実りを連想させる「穂」を組み合わせた、開けた実り豊かな土地をイメージした人工地名と思われる。
31	安知生	あんじゅう	西条市・由来ははっきりしませんが、江戸時代から見える地名で、「安知生村」を受け継いだ地名説がある。
32	大郷	おおご	西条市・由来は、「大」は「大きい・広い」、「郷」は「村や集落・行政単位」を意味するため、「大郷」は「大きな郷」や「広い範囲を持つ郷」といった意味合いの一般的な地名です。
33	大保木	おおふき	西条市・由来は、山腹の斜面地形を表す古語「オフキ（大きく吹きあがる・噴き出したような斜面）」に「大」を添えた地形由来の地名とされる説が有力です。
34	楠窪	くすぼ	西条市・由来は、「楠（クスノキ）の多い田に遭いの低地や窪地」を

			意味する自然地形の地名と思われる。
35	周布	しゅう	西条市・由来は、古代の郡名「周敷（すふ）郡」に由来し、奈良時代の史料「続日本紀」にも「伊予国周敷郡」と見える古い地名がのちに「周布」と表記されるようになったという。
36	千町	せんじょう	西条市・由来は、「田地が広く千町もあるほど」という意味合いから水田の広さを誇って名付けられたと伝えられる。江戸期の地誌「西城誌」にも同趣旨の記述が見られ、棚田の大規模さと結び付いた地名と思われる。
37	朔日市	ついたち	西条市・由来は、旧暦の毎月一日（朔日）に市（いち＝定期市）が立ったことから、その日付名（朔日）と「市」が組み合わさって生まれた地名とされる。
38	壬生川	にゅうがわ	西条市・由来は、古くは「丹生川（にゅうがわ）」と書かれ、水銀（丹生）に関わる川や土地を意味した地名が、後に「壬生川」の字に変化したと思われる。
39	早川	はいがわ	西条市・由来ははっきりしませんが、「早く流れる川」や「早瀬の多い川」といった水流の特徴から名付けられた可能性が高い地名です。
40	菅田	すげた	大洲市・由来は、スゲ（菅）の草が生え茂る湿地状の田んぼ＝「菅の茂る湿地状の田んぼ＝「菅の生えた田」から生じたとされる説が有力で、「菅の田」―「菅田」となった地形由来の地名です。
41	富士	とみす	大洲市・由来は、多くは山名に由来し」地元から見て富士山のように端正な円錐形に見える山を「〇〇富士」と呼んだ事が地名化したと思われる。
42	予子林	よこばやし	大洲市・由来は、確定した説は見当たらず、古語「横林村」との関係が示されているのみです。市制施工時に「予子林と坂石の2箇村が合併し「横林村」となった。
43	米湊	こみなと	伊予市・由来は、伊予灘に面した港でコメの積み出しや集散が主な割れた事から「米」と「湊（港）」を合わせた港町の機能を示す地名として付けられたと思われる。
44	双海	ふたみ	伊予市・由来は、海に面した地域に二つの集落（上灘・下灘）が並ぶ事から「二つの海辺＝双海」と呼ばれるようになったという説。
45	本郡	ほんぐ	伊予市・由来は、古代の行政区画である「郡（こおり）」の中心・本体を意味する語に由来し、「郡の中で中心となる本（もと）の郡域や郷」を表す地名と思われる。
46	五良野	いらの	四国中央市・由来は、中世に「五郎野村」と書かれた地名が近世以降「五良野」と表記されるようになったもので、古い人名「五郎」や「良い野」などを語源とする説がある。
47	長田	おさだ	四国中央市・由来は、一般に長い形状の田んぼ（細長い水田）がある土地を表す地名とされ、「長田＝長い田」を意味する説が有力。古くから稲作地帯に多い地名です。
48	妻鳥	めんどり	四国中央市・由来は、中世から見える地名「めんどり」に由来し、

			当地を本拠とした妻鳥氏（在地領主）や、鶏の飼育が盛んだった土地柄と結びつけて説明される説など諸説がある。
49	具定	ぐじょう	四国中央市・由来は、「山の具（そな）わった定まりの地」という意味合いを持つ古い和語に由来すると思われ、法皇山脈から燧灘へと続く山と海に囲まれた集落地形を反映した地名と思われる。
50	寒川	さんがわ	四国中央市・由来は、大和国長谷寺のある神川浦から流れ着いた観音像を祀った際、本来は「神川」書くべきところ「寒川」と誤記した事から村名になったという伝承に由来する。
51	柴生	しばう	四国中央市・由来は、古くは「芝の多い湿地や低地」を意味する語や、開発前の草地景観を表す「芝生（しばふ）」に由来する可能性が高いと思われる。
52	金砂	きんしゃ	四国中央市・由来は、一般に砂金を含む川砂や鉱山に由来する説と、金色に輝く砂礫や岩肌の景観に由来する説があり、いずれも鉱物資源や地形の特徴を反映した地名と思われる。
53	有網代	あらじろ	西予市・由来は、「網代（あじろ）」＝魚を獲るための竹や木の仕掛けや漁場を意味する語に「有（あり）」が付き「網代のある浜（浦）」を表した地名と思われる。古くは「有網代浦」とも記され、沿岸漁業と結びついた自然地名。
54	下川	ひとうがわ	西予市・由来は、一般に「下川」は「上流側（上川）」に対する下流側の川沿いの集落を意味する地形由来の地名。
55	則之内	すのうち	東温市・由来は、川沿いの砂洲に囲まれた土地を意味する「洲の内（すのうち）」が転じた地名とされ、西城市「洲之内」と同系統の由来と思われる。
56	松瀬川	まつせがわ	東温市・由来は、川沿いに生えた松の木と、川の瀬（浅瀬・早瀬）の多い地形に由来する「松のある瀬の川」を意味する地名と思われる周辺の地形や字名・姓の分布からも「松＋瀬＋川」という自然地形由来の複合地名です。
57	岩城	いわぎ	越智郡・由来は、中世以降に成立した荘園名「岩城荘（いわきのしょう）」に由来し、「岩の多い土地」や「岩山の城（要害）」を意味する地形や城砦イメージから生まれた地名と思われる。
58	土生	はぶ	越智郡・由来は、「土の盛り上がった所」や「土手状の地形」などを表す古い語に由来し、崖や急斜面・土手状の土地を指す地名と思われるが、決定的な説ではなく、古い地形や土地利用と結びつけた地名。
59	弓削	ゆげ	越智郡・由来は、古くは「久司（くし）」と呼ばれた島に、弓を作る職能集団「弓削部（ゆげべ）」が移り住んだ事から、その名が用いられるようになったとする説が有力です。
60	上浮穴	かみうけな	上浮穴郡・由来は、古代の郡名「浮穴郡」が上流側と下流側に分かれた際、上流側を指す地名で「川の上流側に位置する浮穴地域」という意味から生じた地名と思われる。
61	面河	おもご	上浮穴郡・由来は、石鎚山麓を流れる面河川（おもごがわ）の名に

			由来し、その川名が地域名・旧面河村名となったと思われる。
62	久万高原	くまこうげん	上浮穴郡・由来は、古くからこの一帯を指す地名「久万山（くまやま）」に由来し、山地高原の地域名が「久万高原」という町名が採用されたという。
63	菅生	すごう	上浮穴郡・由来は、文武天皇の時代に豊後国からきた獵師が観音像を祀り、「菅（すげ）の蓑を掛けた草庵を建てたことから「菅生山」と号したという伝承に由来する。
64	御三戸	みみど	上浮穴郡・由来は、面河川と久万川が合流する地点にある石灰岩の巨岩「御三戸獄」にちなみ、「その地形が川を「三つの戸口（出入口）のように分ける場所である事から「三つの戸（みつのと/みみど）」を意味する地名と思われる。
65	大角蔵	おおかくら	伊予郡・由来は、古くは「大神楽」とも書かれたと伝わり、神楽（かぐら）に関わる信仰や祭祀に由来する地名とされる説がある。
66	高尾田	たこうだ	伊予郡・由来は、周囲より高く尾根状に伸びた地形が田として利用された事から「高い尾を引く田」という意味で名付けられたとされる。
67	三角	みょうか	伊予郡・由来は、弘法大師が三角形の護摩壇を築いて修行した跡とされる「三角（みすみ）の池」に由来する。
68	五十崎	いかざき	喜多郡・由来は、中世に見られる「伊賀崎」などの表記から変化したとされ、川沿いの「岬（さき）」状の地形を指す地名が語源と思われる。
69	五百木	いよき	喜多郡・由来は、「五百本ほどの木がある場所」や「多くの木のある山林」を意味する数量＋自然地形に由来する地名と思われる。
70	袋口	ふろく	喜多郡・由来は、谷や川筋が袋状に膨らみ、その出口（口）に位置する地形から名付けられた地名と思われ、周辺の姓「袋口」とも関係する地名です。
71	与侈	よぼこり	西宇和郡・由来は、与えるという文字と「侈（おごる）」という漢字が組み合わされた当て字で、宇和藩のお殿様から命名されたと言われている地名です。
72	遊鶴羽	ゆずるは	北宇和郡・由来は、棚田景観で知られる集落名で、春に枝先に若葉が出た後、前年の葉がそれに譲るように落葉することに由来し、その様子を親が子を育てて家が代々続いて行くように願い着いた地名。
73	小倉	おぐわ	北宇和郡・由来は、地形や倉庫機能に由来する説が一般的です。
74	日向谷	ひゅうがい	北宇和郡・由来は、「日当たりの良い谷」を意味する和語地名に漢字を当てたものと思われる。
75	鰯越	いるかごえ	南宇和郡・由来は、イルカ（鰯）がこの付近の海を越えて回遊した事にちなむ地名と思われる。
76	魚神山	ながみやま	南宇和郡・由来は、推測ですが「魚」と「神」を含む事から、漁業や海の神への信仰と関係する地名と思われる。
77	平簷	ひらばえ	南宇和郡・由来は、海岸の岩礁や磯を意味する「ばえ（ハエ）」に「平らな」を表す「平」が付いた「平らな岩礁や磯」を指す地形由来の地

		名と思われる。現在は内海浦の一部として、海に面した集落名として残っている。
--	--	---------------------------------------



愛媛県の名所 道後温泉本館



高知県



NO	地 名	読 み 方	由 来
1	薊野	あぞうの	高知市・由来は、この地に自生していたトゲのある草「アザミ（薊）」が多い野原であったことから「薊野（あぞうの/あざみの）」と呼ばれるようになったとする説が一般的です。中世には「薊野村」と呼ばれた。
2	愛宕山	あたごやま	高知市・由来は、京都の愛宕山に鎮座する火伏せの神・愛宕権現（愛宕神社）を勧請した信仰に由来し、その社を祀った丘陵地が「愛宕山」と呼ばれるようになった。
3	一宮	いっく	高知市・由来は、この地に土佐国一宮である土佐神社が鎮座していた事に由来し、国の「一宮」の社名がそのまま地名となったもの。
4	鵜来巢	うぐるす	高知市・由来は、近くの「鵜来島（うぐるしま）」と同様に「鵜（う）」が多く集まり巣を作った場所を意味する説が有力とされ、海鳥の栄巣地を示す地名と思われる。
5	吸江	ぎゅうこう	高知市・由来は、鎌倉末期に夢想礎石がこの地に開いた禅寺「吸江庵（のちの吸江寺）」の名に由来し、その寺名が周辺一帯の地名として定着したものと思われる。
6	介良	けら	高知市・由来は、中世の荘園名「介良荘」に遡り、さらに平安期の

			「和名抄」に見える「気良（から）郷」に由来するとされ「気良/介良」という古い郷名や荘園名がそのまま現在の地名になったという
7	河ノ瀬町	ごうのせちょう	高知市・由来ははっきりしませんが、一般的には、川の流が急になる「瀬」や渡渉点を指す語から、川沿いの低地や急傾斜地を表す地形由来の地名と思われる。
8	菜園場町	さえんばちょう	高知市・由来は、江戸時代にこの一帯に土佐藩主の為の菜園（野菜畑）が置かれていた事に由来すると思われる。
9	杉井流	すぎいる	高知市・由来は、「杉の多い低湿地（流れ）」を意味する地形由来の地名とみる説が有力です。
10	高須絶海	たかすたるみ	高知市・由来は、室町時代の禅僧・絶海中津がこの地で修業した事にちなむ地名とされ、「高須」地区内の池周辺にその伝承が残っている
11	高埴	たかそね	高知市・由来は、痩せた土地・痩せ地を意味する語から生まれたとされ、「埴」は本来「塙」と書かれた字が転じて地名用漢字と思われる
12	尾立	ひじ	高知市・由来は、古代にこの地を領有したと伝わる「小立足尼（ひじのすくね）」という人物名に由来すると思われる。
13	万々	まま	高知市・由来は、「万々村」という旧村名に由来し、古くは「真々」「間々」などと書かれた地名が転じて現在の「万々」の字が当てられたものと思われる。
14	初月	みかづき	高知市・由来は、旧村名「初月村」に由来し、「初めの月」や「新月」を意味して吉祥を願った地名説や、山間部にわたる地域で、村の真ん中を流れる久万川が三日月型に流れていた事から付いたという説などがある。
15	御豊瀬	みませ	高知市・由来は諸説あり、「御旅所（おたびしょ）」が転訛したという説や、海岸の岩礁や浅瀬を意味する「御霊瀬（みたませ）」などから変化したとする説が代表的とされ、いずれも神事や海と深く関わる地名と思われる。
16	別役	べっちゃく	安芸市・由来は、中世から見える香美郡別約村（べっちゃくむら）などの村名に由来し、香南市・香美市・安芸市などに受け継がれた歴史的地名と思われる。漢字の意味は「別」＝別れた所、「役」＝役目・役所など）などが推測される。
17	大埴	おおそね	南国市・由来は、「埴（そね）」が「土を高く盛った所や堤防状の高まり」を意味し、「大きな土盛り・大きな堤」を表す地形由来の地名。
18	岡豊町	おこうちょう	南国市・由来は、国分川北岸の小高い丘陵「岡豊山（おこうやま）」に由来し、この山に築かれた戦国大名の長曾我部氏の本拠「岡豊城」の名から広く知られるようになった地名。
19	左右山	そやま	南国市・由来は、古くは「左右山村（そうやまむら）」と書かれ、山の左右に広がる集落地形を表した地名と思われる。
20	桑田山	そうだやま	須崎市・由来は、弘法大師が四国遍路の途上にこの山を訪れ。桃の花が一面に咲き山全体が染まっている様子を「桃の花に染まった山」と称賛し、この感嘆の言葉「「そうだ山」が転じて「桑田山」と呼ばれ

			るようになったという伝承に由来する。
21	東・西糺町	ただすまち	須崎市・由来は、「糺」が神社境内の「糺（ただす）の森」などと同様に、神前で物事の是非をただす場所や聖域を指す古い語に由来し、東側に位置する「東糺町」と南側に位置する「南糺町」として名付けられたと思われる。
22	還住藪	げんしゅやぶ	宿毛市・由来は、「環住」＝一度離れた人が戻ってきて住み着く、「藪」＝藪地や雑木林という一般的な語義から「戻ってきて住み着いた人々の藪地」を表す地名と思われる。
23	宿毛	しゅくも	宿毛市・由来は、海岸の葦原で造られた燃料「すくも（宿毛）」に由来する地名とされ、葦が生い茂る湿地地形にちなむ説が有力。古くは、葦を焼いて炭状にした「すくも」を焚く煙が立つ風景から名付けられたとも言い伝えられる。
24	高石	たこす	宿毛市・由来は、「高い所にある岩や石」などの地形を表す一般的な地名と思われる。
25	藻津	むくづ	宿毛市・由来は、「藻（海藻や水草）の多い入り江や浜辺」を意味する語からと思われる。
26	鍵掛	かいかけ	土佐清水市・由来ははっきりしませんが、「崖や急斜面を意味する古い地名要素（カキ/カイ）に後から意味の通る漢字（鍵掛け）が当てられた当て字地名と思われる。
27	爪白	つまじろ	土佐清水市・由来は、海に突き出した岬状の地形が「爪」のように見え、白い砂浜や白波の立つ浜であったことから「爪白」と呼ばれるようになったと思われる。
28	秋田	あいだ	四万十市・由来は、「あぎ」は「上げ」から転じたもので、高くなっている土地を意味する。「た」は場所を意味する「と」が変化したもの。「秋田（あいだ）」は（周辺よりも）高くなっている場所という意味と思われる。
29	大用	おおゆう	四万十市・由来ははっきりしませんが、漢字の意味から推測すると、大きな用水や水利に関わる土地や用材林や資源利用が盛んな土地に由来する地名と思われる。
30	九樹	くじゅう	四万十市・由来は不明ですが、中世に「九樹城」があったという。
31	実崎	さんざき	四万十市・由来は不明ですが、安土桃山時代からある地名。
32	中村百笑	なかむらどうめき	四万十市・由来は、「とうめき」は「とよめき」から来っていて「川瀬の音がどよめく」という意味と「百人が笑うとどめきが起きる」という二つの意味に由来する。
33	名鹿	なしし	四万十市・由来については不明。
34	五百蔵	いおろい	香美市・由来は、居住していた葦生谷五百蔵にちなんで、五百蔵姓を名乗ったと言われる。正徳3年（1713年）、美濃郡吉田村に住む五百蔵孫六勝成が、明石郡藩主松平直明に雄岡山下の新田開発を行う願書を明石郡代奉行を通じて提出し、その開発により出来た集落です。
35	神母ノ木	いげのき	香美市・由来は、「イ＝稲、ゲ＝毛で稲の意味」や「池（イケ）→イ

			ゲ＝井」から来ているという説が有力です。
36	杉田	すいた	香美市・由来については不明。
37	拓	つぶせ	香美市・由来は、周辺の山林を切り開いた開拓地であることから「拓く」「開拓」の意味を込めて名付けられた地名と思われる。
38	兎田	うさいだ	香南市・由来は、古くは「宇多（うだ）」と呼ばれた海浜一帯の地名が転訛し、後に縁起の良い「兎」の字を当てたものとされる説が有力で、「宇多（うだ）」→「兎田（うさいだ）」への読みと表記の変化が地名の由来と思われます。
39	手結	てい	香南市・由来は、古くから港として栄えた入江一帯を指す呼称がそのまま地名化したもので、夜須川河口東岸の湊（手結湊・手結港）とその周辺集落をまとめて呼んだ歴史的な地名と思われる。
40	甲浦	かんのうら	香南市・由来は、古くは、「神ノ浦」や「観音浦」などと書かれた信仰や景観に由来する説と、湾の形状から「カブト（甲）のような浦」とする説があり、いずれも決定説はない複数の伝承がある。
41	奈半利	なはり	安芸郡・由来は、古くは「なはり」と記され、ナは「国・土地」、ハりは「張る・墾る」を意味し、「開墾して開けた土地」という説が有力です。
42	法恩寺	ほうおんじ	安芸郡・由来は、地域内にある「法恩寺」に由来し、創建当初は「本住院」と称したが、道灌の孫の太田資高が父の法恩齊の三回忌に当たり、寺号を法恩寺としたという説に由来する。
43	淌濤	しょうとう	安芸郡・由来は、「水が流れさかまくさま」を表す漢語的表現から来たとされ、低地を流れる水の勢いをイメージした地形由来の地名
44	土生岡	はぶのおか	安芸郡・由来は、「土の多い丘（岡）」に人が住み、土地を切り開いて「土を生かした岡」といった地形や開墾の様子を表した地名です。
45	ニタ又	ふたまた	安芸郡・由来は、村域を流れる川が二股に分かれる地形（川の分岐点）に由来する地名と思われる。
46	東川	ひがしごう	安芸郡・由来は、「集落の近くを流れる川のうち、東川にある川「東の川」」を指す自然地形由来の名称と思われます。中世には香美郡一帯の地域名としても用いられた。
47	八川	やこう	安芸郡・由来は、物部川支流の八川流域にある集落名で、川の名に由来する地名と考えられ、「八つの支流が集まる川」や「谷や支流が多い川」など水系の姿を表した地名と思われる。
48	魚梁瀬	やなせ	安芸郡・由来は、平家の落人が川に仕掛けた魚を獲るための築（やな）が流され、その築が掛かった場所に移り住んだことから「魚梁瀬」と呼ぶようになったという伝承に由来する。
49	久重	くえ	安芸郡・由来は、「久重」と呼ばれるのは、「久礼野」の「久」と「重倉」の「重」とで『久重』となったという。
50	和食	わじき	安芸郡・由来は、中世に成立した荘園名「和食荘（わじきのしょう）」に由来し、その語源は古くからの川名「和食川（わじきがわ）」と思われる。

5 1	粟生	あお	長岡郡・由来は、粟（あわ）が自然に生えた湿地的な土地を指す古い語に由来する地名と思われる。
5 2	八畝	ようね	長岡郡・由来は、田の面積を表す古い単位「畝（せ）」を用い、「八つの畝＝八畝」という水田や棚田の規模に由来すると思われる。
5 3	早明浦	さめうら	土佐郡・吉野川の古い呼び名「早明川（さまがわ）」と、川がつくる入江状の地形を指す「浦」が結びついたものと思われ、「早く明ける川の入り江」などの意味を持つとされる。
5 4	溜井	ぬるい	土佐郡・由来は、川や谷に水が溜まりやすい低地や遊水地を指す古い地形語「ぬるい（たまり水）」に由来する地名と思われる。
5 5	越裏門	えりもん	吾川郡・由来は、「山を超えた裏側の門（出入口）」という地形イメージに基づく地名と思われる。山間の集落で、峠や谷を越えた先の「裏手の入口」を指す民間語源。
5 6	大瀧	おおたび	吾川郡・由来は、近くにある落差約60mの大瀧の滝にちなみ、「大きな滝」を意味する自然地形に由来する地名と思われる。
5 7	早稲川	さいながわ	吾川郡・由来は、早く実る稲（早稲）を意味する「早稲」と、川沿いの土地を示す「川」が結びつき、早稲の栽培が盛んな川筋の地域を表したものである。
5 8	井流	ゆる	吾川郡・由来は、「井戸や用水路（井）」と「流れる水（流れ）」に由来し、水を流すための樋門や水路施設に結びついた地名と思われる。特に日高村の「江尻の井流」と呼ばれた樋門跡の記録から、水利施設を示す呼称がそのまま地名となったと思われる。
5 9	神母野	いげの	高岡郡・由来は、水や稲作の神を意味する土佐特有の語「神母（いげ）」と、野（の）＝野原や台地を表す語が結びつき、「神母のいる野」や「水神を祀る野」を意味するという説が有力です。
6 0	液沢	じるさわ	高岡郡・由来については不明。
6 1	野老野	ところの	高岡郡・由来は、山の斜面に自生する山芋（自然薯）を意味する古語「野老（とろろ）」と、野原を表す「野」が重なった「山芋の多い野原」という意味に由来すると思われる。
6 2	上伏尾 下伏尾	かみふしょう しもふしょう	高岡郡・由来は、「伏尾」という山麓や谷筋の地名に対し、その上手側（上流・上位）を「上伏尾」と呼び、下手側（下流・下位）を「下伏尾」と付いたという。
6 3	越知	おち	高岡郡・由来は、中世にこの地を支配した在地武士「越智（おち）氏」の名字に由来する地名と思われており、仁淀川中流域の拠点集落として発達する中で、現在の地名になった。
6 4	鵜の林	うのはえ	高岡郡・一般的には「鵜（う）」という水鳥が多く集まる川辺や入り江近くの林を指した自然地形由来の地名と思われる。
6 5	桑藪	くやぶ	高岡郡・由来は、周辺に桑の木や桑畑が多く、藪状に繁っていた地形から「桑の藪」を意味して生まれた地名と思われる。
6 6	柴尾	しばお	高岡郡・由来は、中世以来の村名「柴尾村」に遡るが、語源（「柴」た「尾」が具体的に何をさすか）については定説はない。

67	野老山	ところやま	高岡郡・由来は、中世の荘園支配に由来する「野老山名」という小地域名から続く山間集落の地名であり、山地の一画を示す古い名残りと思われる。ただし「野老（ところ）」自体の語源は明確な定説はない
68	壺斗俵	いっとひょう	高岡郡・由来は、中世にこの地を開発した南部氏が年貢として「殻一斗を俵に入れて献上した」という伝承に由来し、「一斗俵村」と呼ばれたことが元となったという。
69	天ノ川	そらのかわ	高岡郡・由来は、山から伐り出した木材を滑り落とす装置「修羅（すら）」に由来し、本来は「スラノカワ」と呼ばれていたものが、当て字的に「天の川（天野川）」と表記されるようになった。
70	辻ノ川	ぬたのかわ	高岡郡・由来は、「道が交差する場所（辻）」と「川」が組み合わさり「道の分岐点付近を流れる川」や「辻に沿った川」を意味する自然地形由来の地名と思われる。
71	桧生原	ひさはら	高岡郡・由来は、ヒノキ（桧）が生い茂る谷筋や斜面に開かれた原（はら＝原野・集落）である事から、「桧の生える原（はら）」を意味する地名と思われる。
72	構原	ゆさはら	高岡郡・由来は、スギなどの「構（ゆす）」と呼ばれる木が多く生えていた「原（はら）＝構の木の原野」という自然地形に由来する。
73	上成	うわなろ	高岡郡・由来は、中世の「上成名（うわなりみょう）」という小字や名田に由来し、四万川中流域の集落名として続いてきた地名と思われる。地名学的には「上の成り田（開発地）」などの意味合いを持つ可能性が指摘される。
74	本も谷	おもだに	高岡郡・由来は、「本（おも）＝中心や本元」と「谷＝谷地形」が合わさり、「谷筋の中心となる集落や墳元」を意味する地名と思われる
75	東向	こちむき	高岡郡・由来は、「東の方向を向いた斜面や山麓の集落」である事から名付けられたと思われる。
76	仲間	なかいだ	高岡郡・由来は、沖縄由来の姓「仲間」との関係が指摘された一つですが、地元での明確な語源説は確認されない。集落名としての歴史的経緯から生じた地名と思われる。
77	赤辻	あかぬた あかどろ	高岡郡・由来は、「赤い泥や赤土の多い湿地（ぬかるみ）」を意味する地形語から生じた地名と思われる。
78	白鬚	しらひげ	高岡郡・由来は、一般に「白いひげ」のように見える岩や滝や波・砂州などの景観にちなむ説が有力です。
79	安満地	あまじ	幡多郡・由来は、近世以前に存在した村名「天地村（あまじむら）」に由来し、古くは「天地」と書いて「あまじ」と呼んだ地名が、のちに現在の「安満地」という表記に変化したもの。
80	頭集	かしらつどい	幡多郡・由来は、中世に見える「鉾土村（ほこつちむら）」が後に「頭集村」と呼ばれるようになったことに関わるが、名称変化の理由や「頭集」という字の直接の語源は文献上ははっきりしない。
81	浮鞭	うきびち	幡多郡・由来は、古くは「鞭村（ぶちむら）」と呼ばれた地域で、「鞭」はこの一帯の古い村名、「浮」は近くの海岸や砂州「浮津（う

			きつ)」などの地形名に由来し、それらが合わさって現在の地名となったと思われる。
8 2	荷稻	かいな	幡多郡・由来は、古くは「かいな」と読まれ、語源は明確には特定されていないが、荷を運ぶ港や稲作地などに由来する説がある。
8 3	坂折	さこり	幡多郡・由来は、一般的には「折れ曲がるような急な坂」や「坂道の曲がり角」意味する地形語から生じた地名と思われる。
8 4	蜷川	みながわ	幡多郡・由来は、「蜷（にな/みな＝巻貝）と川が結びついた「巻貝の多い川や湾入した川筋」を意味する自然地名が元になったという。



高知県の産んだ幕末の志士像

制作・編集にあたり、インターネットの「ウィキベキア」及びAI データーを活用して作成しています。

制作・編集 上総の国いちはらの歴史を知る会

(ふるさと市原をつなぐ連絡会 会員)

市原ふるれんネットのいちまる館（資料館より）ダウンロード出来ます。

連絡先 090-3545-1113